
九の末裔 ~寒椿~

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九の末裔 ～寒椿～

【Zコード】

Z36831

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

かつて、人は力を得るために、妖怪と契り、子をもうけた。

その一族の末裔として生まれた双子、直久と和久。彼らが十六歳になった今、ゆっくりとソレは日を覚ます。

『式鬼を探り、魑魅魍魎と戦う高校生陰陽師のどたばたコメディー。ラブファンタジック・ホラー！九の末裔シリーズ序章』

プロローグ

こちらは『九の末裔』シリーズ序章となります。

本編は『九の末裔（春眠）』<http://ncode.syo-setu.com/n1840n/>から始まります。

どうして、私じゃないの?
どうして、あの子なの?
同じ顔、同じ声なのに。
私のどこがダメなの?
なぜ?

私は何のために生まれてきたのだろう。

私はあの子の鏡ではない。
私はあの子の影ではない。

私は私。
私はここ。
ここにいるから。
だから、私を見てよ！

どうして私は一人いるの?

第一話 ボタンくらい押せないのか

「え？ ベ～～！ すげえ、雪～～！ 」

直久は、バスの車内中に響き渡る素つ頓狂な声を上げた。まるで、初めて雪を見た子供のように、バスの窓に両手を張り付かせて、はしゃいでいる。

彼の声は驚いた他の乗客が、じをじと視線を送る。彼はまたたく間に留める様子もない。かわりに頬を赤らめたのは、直久の隣の席に座る双子の弟、和久のほうだった。

か・か・か・と直なやん……」声がでかいよ

「だつてさ！ 見ろよこの雪！！ ハンパねえーつ！！」

再び大音量でそう言つて、弟を振り返つた直久の顔は、キラキラ

「ううん。確か二十一日。二十一日

「だろ～！？」やつべ～！あの雪の中に倒れ込んだ

からない和久だつた。

(東京生まれだから…… しょうがないのかな……)

確かに、和久だつてバスが走る道路の両側に、壁のようにうず高く積もられた雪には、驚きを禁じえない。その高さは車高を軽く超えている。しかも日光が反射して、ガラス細工のように輝いて見え

た

そんな美しい光景に目を奪われるのはわかる。わかるが、高校生なんだからもう少し空氣読もうよ、と思わないでもない。

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

突然、隣の直久が声を上げたので、窓の外を見ていた和久はぎよつとなつた。兄は頭を右手で押さえ、勢いよく背後の座席を睨みつ

けている。

「つてめ～、おい」いら、ゆずるっ！！！ 何しやがんでも～！」

「……黙れ」

「ああん！？ オレ様の大事な頭を殴つといて、なんだその言い草はつ」

直久が、いよいよ身を乗り出すようにして、後ろの席の従兄弟に眼をつけていた。それでようやく、後ろの席から手を伸ばした従兄弟のゆづるが、直久の頭部を殴つたらしいと和久は推測した。凶器は、現在も涼しげな顔で読み続けている本、『燃えよ剣』（司馬遼太郎著）のようだ。

「すこしは利口になつたか？」

まつたく本から目を離さずに、ゆづるは足を組みなおした。

「はあ！？」

「……んなわけないか」

「んがあああああ」

頭に血が上りきつた直久は、ついに猛獸のような唸り声を上げ、ゆづるの手の中から本を奪い取つた。

その瞬間。

「あ……」

小さな驚きの声を上げたのは、ゆづるではない。もちろん直久でもない。

和久は思わず窓の外を指差し、すぐつと立ち上がつた。

「……どした、カズ？」

直久がきょとんとなつて、固まつたまま詰つ。すると和久は、けらけらと笑つた。

「すぎちゃつた」

「え？」

「降りなきやいけないバス停」

「……え！？」

「あははは」

「…………」

「どうしようか

そして、再び大音量の直久の、「ええええーーーーーー？」という絶叫が駆け抜けていった。

ぶおおーっと、表現したくなるような音をたててバスが三人から離れていった。明らかに体に悪そうな排気ガスの黒煙を吸い込んで、思わず三人ともにむせ返る。

「降車ボタンも押せないのか、お前は」

ゆづるははき捨てるように言い、バス通りから山の小道へと入つていく。その足取りには迷いが無い。

「はあ！？ 何でオレのせいなんだよ！？」

そのゆづるの後を、怒鳴りながら直久は続いた。最後に、和久がキヨロキヨロと辺りをうかがいながら、続く。

「ていうか、オレは今回の依頼の場所知らないんだから、バス停の名前なんて知るわけないだろうが」

「たく、これだから……。直久を連れてくると口クなことがない。何だつて連れて来たんだよ、カズ」

「つて、おい！ 人の話を聞けって！！」

眉間のしわを深くしたゆづるが、直久を完全に無視して、和久を睨んでいる。その身もふたもない言い方に、和久も思わず肩をすくめた。

「あはははは。直ちやんだって、色々役に立つんだよ」

和久がフォローを入れると、ゆづるは、ちつと舌打ちをして、再び歩き出した。

この従兄弟は、決して直久を嫌っているわけではない。ただ、心配しているだけなのだ。

(言葉が足りないんだよな、ゆづるは)

つまり、『何だつて連れてきたんだよ』　今回の依頼は、自身の命も危ういっていうのに』と、言いたいだけなのだ。

だが、言葉を言葉どおりにしか受け取らない、双子の兄。彼の性格上、直球しか受け取れない、投げられない。さらに、血の氣も多い。

そのため、二人は顔をあわせれば、喧嘩になってしまふ。いや、喧嘩しているつもりなのは直久だけで、ゆずるには、キヤンキヤンと周りで犬が吠えているくらいにしか思っていない節がある。そのゆずるの態度が、さらに直久のカンに触っているのだが、それも分かつていてワザとやつていてるよう見える。

（まつたく、危ないから来るなつて言えばいいのに。『邪魔だから来るな』とか言つから、直ちやんも意地になつて、ついて来ちゃつたんじやないか）

和久は苦笑いを浮かべた。

だが、と和久は小さくため息をついた。今日の依頼は、確かに簡単ではなさそうだ。それはすでに肌で感じている。

ビリビリと電気が走るような鋭い靈気と息苦しさ。まるで3人の行く手を阻むかのように、前方から吐き気をもよおしそうな生暖かい風が吹いてくる。どれも普通の人間なら感じとれないものだ。

そう。彼は生まれつき不思議な力を持つていて。いわゆる靈能力というものだ。これは和久だけではなく、両親、姉にいたるまで皆、性質や特技は異なるが、多少なりとも靈感をもつ。

和久の家族だけではない。従兄弟のゆずるもそうだ。とこより、ゆずるの生まれた九堂家こそが本家だ。その本家である九堂家は、分家を含む、一族のなかでもすば抜けて強力な能力をもつており、ゆずるは一族の頂点に立つ九堂家の次期当主であった。

今回の依頼主は、この雪国の山奥のペンションのオーナー。死んだ少女の幽霊が出る、という相談を受け、ゆずるが担当することとなっていた。

（僕なんかより、よっぽどゆずるの方が能力は上なんだけどね）

本当なら、ゆづる一人で十分だろ。だが、今はダメだ。
今は一人で行かせるわけにはいかない。

和久が、わずかに口端に力を込めた時だった。前方を歩く直久が、もつともな疑問を投げかけてきた。

「んで、じつちで、道はあつてるのかよ」

一行は、ゆづるを先頭に、すんずんと山深くに入り込んでいる。そもそも、本来のルートは外れているはずだった。バス停を降りそびれ、そのまま、林道へと足を踏み入れたのだから、依頼書と一緒に同封されていた地図に示されたルートを今歩いているはずがない。それはいくら『残念な頭』とゆづるから称される直久の脳でも、わかることだ。生い茂る木々が密になり、足元を照らす日光が心もとなくなつて来たため、不安になつてきたのだろう。

「……黙つて歩け」

振り返ることなく、ゆづるが返事をした。

「地図も見ないで、道が分かるのかつて聞いてんだよ」

苛立ちのこもつた声で直久が畳み掛ける。

「こんな雪山で、迷子になつたらどうすんだよ。おまえ、適当に歩いてるんじやねーだろつなあー」

「……」

「おーー、まさかホントに適當かよー」

「僕も、じつちだと思うよ」

このままでは、また言い争いになると判断した和久は、二人の会話に口を挟んだ。彼の向ける包み込むような笑顔で、直久の怒りと不安は鎮火したようだ。

「なんか感じるのか?」

「うん、すごいのを」

「……そんなに、今回やっぱそうなのか?」「ゆづるに聞かなかつたの?」

「あいつが俺に何を教えてくれるって言つんだよ」

「えつ。じゃあ、何も知らないでついて來たの?」

「ククと頷く直久に、和久は明らかに呆れ顔をして見せた。

「あのね」

和久のゆつくりと話し出した。

遡ること数百年前、こじらの土地の村人は山の神に対して、生け贋を捧げていた。そのおかげで、1年の大半を雪に覆われるこの村でも栄えることができたのだと言ひ。

「その生け贋は代々、今から行く家の娘になると決められていましたいんだ」

「今から行く家って、ペンションか？」

「そうだよ。何でも、生け贋に娘を差し出す代わりに、他の村人から多額の金を受け取っていたらしいんだ。それで現在においても、余るほどの土地を持つているらしいよ。で、タダあるだけではもつたいたいからって、ペンションを始めたことにしたんだって」

「へー」

あんまり興味がなさそうな返事だな、と内心思いながらも、和久は続けた。

「元々あつた古い屋敷を改築して、数年前にオープンしたらしいんだけど。……出るんだって」

「出る？」

そこで初めて直久は真剣な表情になつて、和久を振り返つた。

「出るって何が？」

「生け贋にされた少女たちの幽霊が！」

「げっ」

「そのオーナーの話だとね。そのせいで、お客様が全然来なくなつちやつたんだってさ」

「ま、普通そうなるな。で、困っちゃつて依頼して來たつてわけだ」

「そんなどこ」

すると、急に直久は小声で弟に耳打ちした。

「大丈夫なんだよな……ほら、だつて、ゆずるは今……」

「今のゆずるは確かに力が不安定だけど。でも大丈夫だよ」

(きっと、ね)

続く言葉を和久は飲み込んで、微笑んだ。しかし、いくら和久が軽やかに華のような笑顔で言つても、直久は顔を引きつらせるしかなかつたようだ。

(あれ？ あんまり不安にならないように言つたつもりだつたんだけどな、おかしいな)

和久は、ははは、と笑つた。

でも笑つていられるのも、今のうちかもしれない。そう思いながら、和久は前方を見つめた。

彼の目には、確かに見えていたのだ。前方の林の中に“この世のものではない”黒くおぞましいモノが立ち込めているのを。

直久の前に、その洋館がその姿を現すまで、バスを降りてから二十分もかからなかつた。

「ホントについたよ……」

ごくりと直久の喉が鳴つた。

(地図も見ないで、山道を……なんで着くかなあ……)

理解できない。

正直、双子の和久と、従兄弟のゆづるのする」とには、時々、いや、いつもついていけない。

今回だつて、なぜ目的地がわかつたのかと問い合わせたところで、『感じたから』とか『見えたから』とか言うに決まつている。

そこで、何が？ と聞いてはいけない。

怨霊だとか、悪霊だとか、靈氣だとか、浮遊霊だとか、呪縛霊だとか、動物霊だとか……。とにかく、現代科学では証明できないようなことを、さらりと言つてのけるに違ひないので。

(下手したら遭難だつつうの……無事に、到着したからいいものの)
直久は肩をすくめた。

それにしても、なんて仰々しいペンションなのだろう。中世のヨーロッパを思わせる洋館は、古びて四方八方から伸びるツタが巻きついている。しかも、直久の想像をはるかに上回る、広大な敷地だ。庭も建物も恐ろしく広い。今、三人が立っている門から見えているエントランスの扉が、なんと遠くに見えることか。

(こりや、ペンションというより城だな……)

圧巻の一言だった。

他の一人も、ペンションの広さに圧倒されていることだろうと、右隣にいる和久に視線を送れば、和久は両肩を抱くようにして、手でさすっている。それを見て、直久は眉をひそめた。

(なぬ……?)

和久は悪寒を感じているらしい。物心ついたときから、直久には見慣れた光景だが、和久が“何か”を感じた時にとる行動なのだ。まさかと思い、左隣のゆずるを振り返る。

くつきりとした二重の大きな瞳で洋館を睨みつけているゆずるは、眉をよせ、険しい表情で視線を右に左に走らせていた。まるで舞うように飛ぶ昆虫でも追っているかのような、眼球の動きだ。確実に“何か”を見ている。

(また、オレだけのけ者かよ)

彼らの一族は、ほぼ全員が強い霊能力を持っている。一族は、その血筋を絶やさぬように、薄くならぬように、一族間の婚姻が原則になっている。だから、一族は九堂家を筆頭に、多くの分家にいたるまで、ほぼ全員、なんらかの能力を持つている。

そう　　ほぼ全員。

(何でオレだけが、何の力も持っていないんだろう。双子の和久は強い能力を持つてるって言うのに、オレだけ何で……)

彼が、十六年の人生の中で、幾度となく繰り返した自問。答えは見つからない。一族の長老たちですら、皆目検討がつかないのだ。

ある日突然、能力が開花する者もいるというから、気にすること

無いよ、と和久は慰めてくれたが。

でも……。

何も感じない。

何も見えない。

自分だけが、役に立たない。必要の無い人間だと言われているような気がする。

生まれてくる必要があったのは和久だけで、自分はいらなかつたのではないかだろうか……？

「さあ、いこう」

和久が促した。その顔からは、完全に笑みが消えている。ゆずるの顔にも緊張が見える。

三人はもう一度だけ、顔を見合させる。そして、一呼吸おいた後、ゆずるがペンションの門を押した。

ギギギ……。

鉄製のさびた門が、まるで来訪者をあざ笑つように鳴いた。

第一話 節操無いな

「どうぞ」

差し出されたカップを受け取つて、さつそく暖かい「コーヒー」を飲もうとした直久は、自分を執拗に伺う視線に気づき、顔を上げた。ふわふわとした綿菓子のような印象の可愛らしい少女と目が合う。少女は、直久と視線が交わると、ぱっと目を逸らしてしまった。自分たちよりも幼いからだろうか、初々しいそんな姿も、直久を虜にする。

「双子は珍しいですか？」

柔らかな笑みを湛えながら、直久の隣から和久が問う。

「こりゃ、八重。やえ そんなにジロジロと見つめたら失礼でしょう」

お茶菓子を持った、別の少女が部屋へ入ってきた。こちらの少女も、息を呑むほどの美人だ。八重と呼ばれた少女と、どことなく似ている。彼女の姉だろう。

だが、妹とは、その纏う雰囲気が違う。妹の方は柔らかな暖かな雰囲気で、春の陽だまりのようなイメージだが、姉の方はどこか物悲しく、切れ長な瞳がクールな印象を持たせている。

「いいんですよ。慣れてますから。一卵性双生児なので、よく似ているでしょう？」

「ホントに見分けがつかないです」

八重は、兄弟へ交互に視線を送る。

「僕が弟の大伴和久です。こちらが、兄の直久。そして、従兄弟の九堂ゆずるです。……えっと」

「あ、ごめんなさい。私は、このペンションのオーナーの娘の、山ま吹ぶき よしのです。こちらは妹の八重」

すると、それまで口を閉ざし、興味なさそうにあさつての方を向いていたゆずるが、ぼそりとつぶやいた。

「桜か……」

「え？」

よしのが聞き返すが、ゆずるはそっぽを向いたまま、返事をしようとしない。姉妹たちは、困ったように顔を見合せた。

（たく、愛想がなさ過ぎだらうー。今に始まつたことじやないけどさ）

直久は、ゆずるの冷たい態度に眉をひそめる。が、先にフォローに回つたのは和久のほうだつた。

「気にしないでくださいね。仕事の前のゆずるは、いつもペリペリしているんです」

「そうですか……」

少し表情を和らげた少女たちだが、ビニカすつきりしない気がするには直久だけだらうか。

何か一言、ゆずるに言つてやろうと口を開いた時だつた。応接間のドアが開いて、男性が姿を見せた。

「すみません、お待たせしました」

このペンションのオーナーであり、依頼人の登場であつた。オーナーが娘たちに視線を送ると、姉妹は静かに応接間を後じた。これから、詳しい依頼の説明があるのであらう。

ならば……。

（オレも退散するか）

すくとソファーから立ち上がりつて、直久も部屋を出て行つた。するので、和久がその背中に声をかけた。

「直ちゃん……？」

「オレが聞いたところで、意味ねえし。雑用係は外で待機します」「雑用だなんて……」

「終わつたら呼んでくれー」

ひらひらと手を振つて、直久は部屋を後にした。

実のところ、退屈なオッサンの話を聞くより、女の子とお近づきになるほうが、建設的だと判断したのだ。

野生のカンというか、男のカンを働かせて、難なくテラスにいる

八重を発見した。植木の水をあげている姿は、見とれるほど可愛らしい。

「八重ちゃん」

「あ、えつと……」

双子のどちらか見分けがつかないのだらう。八重は困ったようにうつむいてしまった。

「直久。兄の方だよ」

「ごめんなさい。見分けがつかなくて」

「気にしないで、それが普通だから」

彼女のそばにある白い椅子に腰掛けると、直久はにつこりと微笑みかけた。直久が、これが一番の自分のキメ顔だと思い込んでいる顔だ。

「ありがとう。直久さんは、お父さんとお話しなくていいの？」

「ああ。いいんだよ。あつちはあの一人にまかせておけば」

「そう……」

突然、彼女の顔が曇り、今にも大粒の涙の雨が降りそうになる。キメ顔で、彼女の心を落とそうと思っていたのに、まさか彼女のテンションが落ちるとは思つても見なかつたので、直久は慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「ど、どうしたの？」

「…………」

「八重ちゃん？」

直久は、じさくさにまぎれて、八重の細い肩に手を伸ばそうとした時だつた。逆に八重の方が、直久の胸に飛び込み、泣きじやくり始めたではないか。

「ええええ！？ ちょ、え？ エエエー！？ 八重ちゃん！？ あの、その、落ち着いて！ オレまだ何もしてない！！」

おたおたしながら、どうすることも出来ずに、直久はしばらく立ち尽くした。時折、彼女の背中を、ぽん、ぽん、と叩きながら。

「じめんなさい。洋服汚しちゃったね」

「いいのいいの」

すっかり目を腫らした八重は、照れ隠しのよつた、泣き笑いを見せた。

「それより、どうしたの？ オレでよければ話を聞くよ」

八重は、少し考えてから、再び口を開いた。

「お姉ちゃんが……」

「えつと……よしのひやん？」

八重はノクンと頷く。

「お姉ちゃんが、このどひるわうと変なの」

「変？」

直久は、応接間で会ったよしのことを思い返してみた。自分と年は変わらないように見えたが、実にしっかりとしていて、大人びた印象だった。どこも、おかしいところなど思い当たらない。

どういう意味だらう、と、八重の返事を目で促す。

「初めて、変だと思ったのは、お姉ちゃんの十六歳の誕生日だったの。三人で夕ご飯を食べていて、台所に飲み物を取りに行つたお姉ちゃんが、戻つてこないから様子を見に行つたのね。そしたら恐ろしいものでも見たような表情で、八重ちゃんは言葉を切つた。その時のこと思い出しても、声を詰まらせたのかもしれない。

「そしたら？」

大丈夫だよ、と直久は八重の肩に手を置いた。

「そしたら、お姉ちゃんは……固まつて動かなくなつっていたの」

彼女の話によると、よしのは飲み物を取ろうと、冷蔵庫に手をかけ、ちょっとかがんだ姿勢のまま動かなくなつっていたそうだ。いくら呼んでも、搖すつても反応がなく、それはまるで

「人形になつちゃつたみたいだつた……」

魂の抜けた、イレモノ。

（なんてこつた……）

直久の背筋を、ぞくりと冷たいものが走つていった。

(いや、でもまた。さつきは普通に動いていたじゃないか)

「しばらくして、もともどつたんだね？」

直久の問いかけに、八重は首を縦に振る。

「私がお父さんを呼びに行つている間に、もともどつたの。でも、その日から、度々お姉ちゃんはおかしくなつて……動かなくなる時間も回数も、増えていつてる気がするの」

「そうか……それで、オレたちが呼ばれたんだね」

(きつと二人も、オッサンから詳しい話を聞いてるんだろうな……これは結構厄介かもしれないぞ)

うつかり直久の口からため息がこぼれる。

八重はそれを過敏に聞き取り、不安げに直久を見上げた。

「お姉ちゃんは……治るよね？ 治してくれるよね？」

こんなとき、直久は自分の無力を痛感する。

役に立たない。

いらない。

何で生まれてきたんだ。
自分自身にそつ言われている気がする。

「大丈夫。オレの従兄弟と弟がきつとよしのちゃんを治すから

苦笑いにならずに、自然に笑えたかな、と少し思ったその時。人の気配がして、和久とゆずるがテラスに姿を現した。

どうやら仕事の話が終わつたらしい。笑顔でこちらに近づいてくる。

「山吹さんが今日泊まる部屋に案内してくれるつて……つて、なにその手……」

和久の刺すような視線が、八重の肩に乗せられた直久の手に注がれていく。

「うわっ、いやっ、これは！ ねつ！」

「…………」

タイミングよく、八重ちゃんが頬を染めたので、ますます和久の目が細くなつた。

「節操ないな。行くぞ、カズ」
ゆづるのはき捨てた容赦ない一言よりも、軽蔑するような視線を向けたままゆづるの後を追つた和久の姿に、直久は戦意すら削がれ、がっくりと肩を落とした。

「…………あの」

「大丈夫、こういう扱いには慣れてるから。
はあ……」

「さて、オレも一緒にいつてくるね」
「はい……お姉ちゃんを、よろしくお願ひします」
力なく笑い、直久はテラスを後にした。

第三話 ソレの壁にたくさんの目が！

直久たちが案内されたのは、屋敷の一階のふた部屋だった。ひとつ部屋はゆずるに、その右隣のひと部屋は双子にと、用意されていた。右側の部屋に入り荷物を置くと、直久はベッドの上に飛び込む。ほど良いスプリングが効いて、寝心地がすこぶる良い。セミダブルだらうか、両手両足をめいっぱい広げても、まだ余裕がある。（極楽～極楽～）。コレに温泉と、ウマイ飯とくりや～言つことないね！）

まるで縁側の猫のように伸びている直久を優しく見守っていた和久が、おもむろに今回の依頼の詳細を説明し始めた。

直久は特に手伝えることが無いので、知つていなくてはいけない事情というものはない。それでも、面倒がらずに話してくれる。和久らしいといえば和久らしい。

「なんでも、この家は代々、長女が十六歳になると生け贋としてさげていたらしいよ」

だが、科学の栄える現代において、神様の祟りをおそれて、人身御供をしようと考へる者はない。

いつしか、生け贋など必要とされなくなり、忘れられていった。人身御供のあつたという事実も、生け贋にされた少女たちの存在も。

ところが、それらは、この家の者たちにとっては、遠い記憶のものにはならなかつた。

人身御供をやめてからというもの、この家に生まれた長女は、かつて生け贋に出されていた年齢になると、生気が抜けたようになってしまふのだといつ。何に対しても反応がなく、自ら動こうとしない。まるで

「人形のようになつてしまつららしい」

直久はごくりと唾を飲み込んだ。八重から聞いていた話と同じだ。

「なんでも、山吹さんの実の妹さんも、十六歳になつたその日から
様子がおかしくなつたんだって」

つまり、ここのおーナーは自分の娘が、今のように抜け殻になる
の予感がしていたのだ。自分の妹と同じようになるかもしれない。
そう恐れて16年間を過ごしてきただに違ひない。

「……それで……妹さんはどうなつたんだ？」

直久は、恐る恐るたずねた。

その結末を聞いてはいけない気がする。そんな予感で頭が痛くな
りそうだ。

わずかな望みを抱きながら、和久の言葉をじっと待つ。一呼吸置
いて、和久が口を開くまで、えらく長い時間に感じられた。

「妹さんは　亡くなつたつて」

（なつ！？）

がばりと、直久は体を起こした。和久を食い入るように見る。和
久は、その刺すような視線を避けるように、目を伏せ、言葉を紡い
だ。その顔はいつになく、曇っている。

「17の誕生日の数日後、死んでしまつたそつだよ

「……」

「その時の妹さんと今のよしのちゃんが似てゐるみたいだ。まさか
とおもつて、医者にも見せたみたいだけど原因は分からぬといつて言
われたんだつて。」

「じゃあ……よしのちゃんはどうなるんだ」

和久は寂しげに口元を歪めた。

「……最善を尽くすよ

弟だつて万能ではない。

一族最強とうたわれる従兄弟だつて、できないことはある。
わかってる。無理なものは無理だつて。
でも……。

自分と同じ年数しか生きていかない少女が、死ななきやいけない理由がどこにあるっていうんだ……。

(よしのちゃんは何も悪いことしてないのに……)

こんな理不尽なことがあっていいのか。

何か自分にも力があれば、ほんの少しでも能力があれば……。自分はどうすることもできない。何もしてやれない。

直久が、悔しさに、ぎりっと奥歯をかみ締めた、その時だつた。小さい悲鳴のようなものが耳に飛び込んできた。

(……!?)

隣の部屋、ゆづるの使っている部屋からだ。

一瞬二人は顔を見合せたが、次の瞬間には一人同時に駆けだしていた。

「ゆづる！？」

部屋の中に入った途端、普通ではないものを直久は感じ取った。未だかつて感じたことのない大きな不安に襲われる。鼓動が早くなる。息苦しい。

(何だ？ この感じ……？)

初めて感じる空氣の重さと違和感に、直久は呆然となつた。その間に、和久はなにやら短い呪文を唱え、終わるや否や、しゃがみこんでいるゆづるの脇へと駆け寄つた。

「ゆづる、大丈夫？ 今、結界を張つたよ。何があつたの？」

「カズ……今、そこの壁にたくさんの目が！」

「目……？ 僕にはそんなにはつきりした形には見えなかつたな……」

「いくつもの目が、俺を見ていたんだ！！ 僕をじつとっ！」

「大丈夫……大丈夫だよ。もういない。いなくなつたから」

和久は、それ以上何も言わずに、ゆづるが落ち着くまでそつと肩を抱いていた。

直久はそれを、どうすることもできずに、一人を見つめていた。

ゆずるが落ち着くと、和久は厳しい顔で自分の部屋へ戻り、狩衣に着替え、再びゆづるの部屋に現れた。

「アレをやるのか？」

和久の問いかけに、和久は神妙な面持ちで首を縦に動かした。

アレとは、いわゆる除霊の儀式。この屋敷に集まつた浮遊霊を追い払うのだろう。この儀式を行つ時は、九堂一族では狩衣に着替えるのが慣例である。

狩衣というのは、平安時代の民間服で、動きやすいことから狩り時の服となり、後、公家の普段着になつたもの。現在の神官の姿を想像するとちょうどいい。

しかし、この狩衣を着ると除霊効果が上がるわけでもなければ、着てなくては出来ないというわけでもない。

そこを敢えて着るのは、狩衣を着ることで依頼人が安心するからだ。普段着でヒヨイヒヨイと御祓いされても、何ら有難味がないといふか。本当に祓つてくれたの？ と、不安にさせることもある。現在の狩衣はそのくらいの意味しかもつていないので。行つ者の気分、というものかもしれない。

「ここに浮遊霊はどんくらいいるんだ？」

さつきのゆづるを脅かしたのも、浮遊霊のしづざなのだろうか。見えないし、感じないけども、いるといわれるとき味が悪い。

「いるなんてもんじやない。うじやうじや。視界がかすむくらいに珍しく厳しい顔で直久を一瞥した弟に、自然と口を閉ざす。

（あれ、なんか和久、機嫌悪くない？）

テキパキと儀式の準備を進める弟の背中に、ぴりぴりと張り詰めたものを感じる。声をかけるな、とでも言いたげに。普段にこやかな弟だけに、怒らせると誰よりも迫力がある。

触らぬ和久にたたりなし。それは16年間の直久の教訓でもあつ

た。

(……こ、ここは邪魔しないで、大人しくしてましょうかね)
直久が見守る中、和久は意識を集中させるために、ゆっくりと瞼を閉じていった。

和久が追い払おうとしている浮遊霊とは、特に悪さをするモノじやなく、そこら中を漂つてているだけの靈をさす。

それ自身に意志はなく、何か強い力に引き寄せられて集まつてくることが多い、その強い力というのは大抵、悪靈だ。そして、悪靈は引きつけた浮遊霊を吸収してますます力を持ち、成長して強大化していく。

これ以上、この屋敷に巢食つ悪靈に力を付けさせないためにも、まずは浮遊霊を除去してしまおつ、といつことらしい。

「これより、除霊の儀を行う」

和久は、かつと目を見開いたかと思うと、呪文を唱えながら、すばやく指を宙で動かし、印を結ぶ始めた。

弟の話によると、この作業により、蒼いオーラのようなモノが彼の全身を包み込み、それが次第に大蛇の形になつていくという。

それは、和久に仕える“ヒトならぬもの”『式神』である。

その大蛇が彼の代わりに靈を払うのだ。その式神の名前を靈居くわいと和久は呼ぶ。

(式神か……いつか見えるんかね~俺にも)

式神とは結局何なのだろう、と、除霊している弟を見るたびに思う。実際に目にしたことがないので、正確にはわかっていないのだ。小さい頃から、和久がその存在を教えてくれるので、知っているが、だからといって、今弟の周りに大蛇がいて、その大蛇が靈をぱくぱく食べてるんだよ、といわれて信じられるわけもない。

式神というからには、神なのかというと、どうも違う。どちらかと言つて、西洋の魔女に仕える『使い魔』に近いのではないかと考

えている。

そもそも古来日本では、何でもかんでも『神』として崇め奉る習慣があつた。

一番わかりやすいのは雷。雷は『神鳴り』だ。

石や山、動物、はたまた無念に死んでいった人間ですら『神』となる。学問の神、菅原道真すがわらのみちさねがいい例だ。

結局のところ『神』と言うモノは、ヒトがその怒りを恐れ、敬い、鎮めるモノであつたのだ。『触らぬ神にたたりなし』という言葉こそがそれを顕著に表現している。つまり、日本人にとって『神』とは、人々を守り、願いを聞き入れてくれるべきモノではなく、恐れの対象に他ならなかつたのである。

当然、平安時代から、西洋で言う悪魔的存在、つまり『神』の逆位置の存在として、『鬼』というモノがいる。だが、鬼も、それより昔は『神』だったようだ。『鬼』と書いて『カミ』、または『シキ』と読んだのだから。

つまり、人にとって恐れの対象であった『悪い神』、『意地悪な神』は『鬼』となり、都合の良い『神』こそ『神様』になつたと考えられる。そして、『人間に使役されている神』を『式神』と呼ぶのだ。

「終わったよ」

和久は汗だくになりながら、こちらに笑顔を向けた。

そう言わただけで、回りの空気が軽くなっているような気がしないでもない。

「『ぐるー、ぐるー』

そう言いながら、直久は冷蔵庫からミニネラルウォーターを取り出し、和久に手渡した。

「ありがとう」

数久は一コツとしてそれを受け取ると、一口だけ飲む。そして、ゆするに向き直った。

「気分はどう?」

「……心配ない」

「なりいいけど。……手、かして」

ゆずるはそっぽを向いたまま、和久の言葉を無視した。が、和久はむりやりゆずるの右手を掴むと、手の甲に指で何かの文字を書いた。

「念のため」

「……」

口を開ざしたままのゆずるにかまわず、今度は直久の方を見て、やはり腕を掴み、手の甲に字を書く。

「お守りみたいなものだよ。……念のためだから」

力なく笑う和久の目が、今回は手に負えないかもしねい、と言つた気がした。

(まじかよ……)

仕事に同行するのは初めてではない。今までだつて、危ない目にはあつてきた。でも、こんなに緊張している和久は始めてみる。(そんなに、やばいつてことか今回は……)

なんてところに来てしまつたんだろう。

なんてことに首を突つ込んでしまつたんだろう。

しかし、聞かなかつたことにして帰るわけにもいかない。

(くつそ。よしのちゃんと会つていなかつたら……ハ重ちゃんの涙を見てなれば……)

「ンン。

部屋のドアがノックされた。顔を出したのは八重だつた。

思わず直久は彼女から目を逸らしてしまつ。まともに顔が見れな

い。

「あの……夕飯の支度が整いました……でも、お忙しいようでしたらまた後ででも……」

「ありがとう。」直久も、今、ひと仕事おわりましたよ。すぐに着替えて、伺います」

こんな時に、笑顔で応対できる弟に舌を巻いた。直久は、笑うことどころか眉一つ動かす気になれそうもなかった。

第四話 セッキのが、効いたな

「なんだか、気分が軽くなつたきがするんです。いやー、さすがですな！ 本当に、来ていただいて良かった！」

一緒に食後のコーヒーをすすつていたオーナーが笑顔になつて、和久たちに何度もかの礼を言つた。

大層な額の依頼料を支払つたのに、来たのがこんな子供たちで、内心不安だつたにちがいない。安堵の色がオーナーの全身からじみ出でいて、ゆづるなど明らかに不愉快そうな顔をしている。

(しようがないよ、僕たちまだ16才だし)

年齢のせいで信頼してもらえないのはいつものこと。こう言つときの対処法なら心得ている。和久は得意の花のような笑顔を見せてやつた。たいていの依頼はこれですっかり安心するからだ。

「簡単な作業をしただけですから。まだ本格的なことは明日させてもらひつもりです。念のために、今夜一晩、皆さん的手に護符を書かせてください」

和久はオーナーの腕を取ると、御守りみたいなものですよ、と言いいながら、直久たちにしたように手の甲に文字を記していく。が、よしの腕に字を書こうとした時だつた、和久は手に静電気のような、びりつとした痛みを感じた。思わず手を離す。

「どうした！？」

心配した兄が、和久を覗き込んだ。

(彼女には護符が書けない……)

何ががいる　彼女の中に。

和久は、すつと笑顔になつて首を振つた。

「なんでもないよ。静電気が走ったの。僕のセーターのせいかな、

あはは」

「なんだよ、びっくりさせるなよ～」

「『めんじめん』

そういうて、再び護符を書くマネをした。

「はい、できました。ほんとに念のため書いただけなので、心配しなくていいですよ」

和久は再び山吹一家に向かつてじにじり微笑んだ。

これで、皆の不安が消え去るならば、いくらでも笑つてみせる。

それが今自分にできる最大の防御。敵に弱みを見せては命取りとなる。

柔らかな表示の下で不安に負けそうになりながら、それでも和久は必死に笑うしかないのだ。

「ところで」

オーナーの方へと首を回し、和久はお願いがあります、と続けた。
「このペンションの見取り図を貸していただけないでしょうか？」

「見取り図ですか？」

いつたい何に使うのだろう。そんな不安が彼の目に宿る。当然だろう。

だが、それには答えずに、続ける。

「それから、屋敷の中を少し見て回りたいのですが……よろしいですか？」

オーナーは少しだけ困った顔を見せたが、了承した。きっとこれも娘の奇病を治すためなのだ、と理解したのだろう。

なんにせよ、ありがたい。

(とにかく、はやめに元凶をつきとめないと……ゆづるがもたない)

今のゆづるは、力がほとんど使えない。使えないだけならいい。もともと強い靈力の器であるゆづるの体は、悪霊からみれば格好の餌食。隙あらばゆづるの魂ごと取り込んで、体を乗っ取ろうとする中級悪霊は、そこら中にはびこっているのだから。さきほどゆづる

るの部屋でおきた出来事が、いい例だう。今も息を潜め、虎視眈々と狙う気配は後をたたない。

(だから、僕は今回の依頼を受けることに反対したんだ。それなのに……本家は……いつたい何を考えて)

和久が知らず知らず、ぐつと奥歯に力が入つてしまつた時、見取り図を取りに行つたオーナーが席へと戻ってきた。

「これです」

オーナーが新聞紙大の紙を和久に手渡した。

「丁重にお借りします」

和久の顔には笑顔が戻つていた。

直久たちは食堂を引き上げると、自分たちの部屋へ戻つてきた。ソファーや前にある長方形のテーブルを和久とゆづるが困んで、先ほどの見取り図を広げだす。そして、図面に穴が開きそうなほど鋭い目つきで、食い入るように見入つている。まるでスキヤンでもしているかのようだ。

直久はそんな二人をしり目に、「よつこいせ」と言いながら、そのテーブルの前にあるふかふかのソファーに座り、どかっと足を投げだした。

「そんなの何に使うんだ?」

「うん……」

和久は集中しているらしい。図面から目を離さずに、身のない返事をした。

こういう時、何を聞いても無駄なのは心得ている。だから、直久も口を閉じた。

(それにしても……)

何だつてこんなものを借りてきたのだろうか。自分の弟の考えていることが、さっぱり理解できない。珍しく直久は、首をかしげて

険しい顔になり、腕を組みながら思考の迷宮に入り込んでいった。

「ホント広いなあ……」

しばらくして、和久がぽつりとぼやいたので、なんとなく直久も図面を覗き込む。

確かに広い。広すぎる。

1階は受付、ロビー、食堂や浴場などの他、オーナーの山吹一家の個室、応接間がある。2階は客室が9部屋。3階は5部屋。うち4部屋はスイートルームになっているようで、一部屋が2階の客室の倍の広さになっている。

(こりあ～掃除するの大変だ～)

田を丸くする直久に、和久が微笑みかけた。

「建てた当初から、あんまり変わらないらしいよ」

「当初つていつだよ」

「明治初頭」

「古つ。その割りに部屋綺麗すぎねえ?」

「内部は何度も改装しているみたいだよ。でも、建物自体は変わらないし、部屋数なんかもそのままだつたみたい」

「ほほ～。すげーな。だって、ペンション経営をする前は、普通の民家として使つてたんだろう?」

「そうだね。生け贋になる女の子たちが、死ぬその時まで、この家で過ごしてたんだよね」

「とすると、その子たちが使つてた部屋もどつかに残つてるかもしないってこと?」

あまり考えずに発した直久の言葉に、和久は息を呑む。そして、ゆずるは顔を見合わせた。

「ん? なんか変なこと言つたか?」

「ううん。その逆! サスガ直ちゃん。野生のカンがさえてるね!」

「ほめられてる気がしないんですけど！」

「こりと和久は微笑んだ。

「さつき除霊したのが、効いたな」

ゆずるも口はしをほんの少しだけ上げ、微笑を浮かべた。

「ああ? どういうことだ?」

一人だけわけがわかつていない直久は、二人の顔を交互に見比べた。すると和久がやんわりと説明はじめた。

「さつきまでは、浮遊霊が多くいてね、霧がかかつたようになつてよく見えなかつたんだ。でも、それを追い払うことごとく、見えてきたんだ」

「何が?」

「ボスのいるだらう場所? たぶん、女の子たちの思い入れが強かつたところに今もいると思つ」

「……たとえば、寝起きしてた部屋とか?」

「そうだね。今、見取り図を使って、屋敷の中を靈視してみたんだけど、墨で真っ黒に塗り潰したかのように全く見えないところがあるんだ」

(靈視……そつか。それで見取り図が必要だつたのか)

ここにいながら、監視カメラで見るかのようにべつの場所の様子がわかるといつ。それが靈視だ。

「ゆづる、何箇所、黒く見える?」

和久はゆづるを振り返つた。

「二カ所」

「やつぱりか……

「つまり、その二つの部屋のどつちかにボスがいるつてことか?」

直久の問いかけに、弟がうなづく。

「あとは、直接見てみないとね」

そう和久が言い終わる前に、ゆづるは歩き出した。

「あ、待つて。僕も行くよ」

慌てて和久も後を追おつとして、直久を振り返つた。

「ほら、直ちゃんも行くよ」

直久はじつと和久を見つめた。

（オレが行つても何もわからぬーしなあ……意味なくねー？）

和久は、いつこうに動こうとしない直久に不思議そうな顔をして見つめている。

（行かないって言つたら、こいつは心配するだろうな……）

自分の無力さにイジケて、弟の顔を曇らせるなんてかつて悪いことは、さすがにしたくない。

「わかったよ」

観念するように、小さくため息をついて、直久は立ち上がった。

第五話 ハハヤモ?

直久たちは、まず一つ田の怪しい場所を田指し、一階へ来ていた。勝手に部屋を物色するわけにも行かず、一応オーナーに声をかけたところ、八重が同行してくれることになった。

「まあ、どっちから行くんだ?」

「どっちにする?」

直久の質問をそのままやざるに和久は丸投げする。

「どっちでも」

ゆずるの返事は、いつものように相変わらずそつけない。

「だつて?」

ははは、と和久は再び直久に向き直った。

「……んで、どっちにするんだよ」

「やうだなあ。直ちやんは、好きなものは先に食べるほうだったよね

「まあね、おなか空いてるうつか」と、食べたまつがさうにカマイ氣がするわなあ~」

直久が何も考えずに答えると、弟はにやりとしか表現できないうな含みのある笑みを浮かべた。

「んじや、二階から行こうか」

「は? 今のつて、そういう話をしてたわけ?」

ぽかんとした顔をしていると、和久はからからと笑い声を立てて、足を進めだした。そして、直久にだけ聞こえる声でささやいてきた。「三階の方が、嫌な気配が強いから。いきなりばつたりボス戦かもしれないから、そん時はよろしくね。選んだのは直ちやんだしね」

「はい!~」

「冗談だよ。行くよ~」

「……冗談にきこえねえー……」

図面を見ただけではやはり屋敷の広さは実感できていなかつたらしい。

「廊下……長つ！」

三階まで階段を上りきつてから、廊下に出た直後、直久は率直すがる感想を述べた。

一階の廊下と長さは一緒だというのに、二階にはある花瓶や陶器の飾りが無いためか、一直線に伸びた廊下が妙に長く見える。

それに、オーナーが説明していたとおり、しばらく客足が遠のき使われていないのだろう、掃除が行き届いていないような気もする。廊下の隅に埃がたまっているし、壁もザラついていて、何だかカビ臭い。

すると、和久が廊下の壁に飾つてある絵を指差した。

「この絵は何ですか？」

言われて初めて気がついた直久も、廊下の壁に視線を這わせた。三階の廊下の壁には、数メートル置きに何枚もの絵が飾つてあった。それも、全て、同じぐらいの年頃の少女の絵だ。

「この絵は、生け贋になつた少女たちの肖像画だつて聞きました。生け贋にされる前、その少女が生きていたといつ証に、必ず肖像画を描かれることになつていたらしいです」

写真のように描かれている彼女たちは、今にも絵から出てきそうだつた。その目が何かを語りかけてきそうで、早くその場を立ち去りたくなる。

「あれは？」

直久の不安など氣にも止めずに、ゆづるが指差すのは廊下の端。

「あの絵だけ、なぜ離れたところにあるんだ？」

日もあたらないような隅っこにポツンと一枚の絵が飾られている。四人はその絵のもとに歩み寄った。

白い肌、長い黒髪、黒い瞳、赤い唇。日本人形みたいな少女。

「この子は最後の生け贋の ううん、そうなる予定だつた女の子

だつて聞いたことがあります

八重はじつと絵の中の少女を見つめながら話しおした。

「明治時代に入つて、人身御供などやめようと言つのが、大半の村人の声になりました」

しかしこの少女の父親は、人身御供をやめれば村人から金を集めることにならぬと、それらの意見に耳を貸そとせず、断固決行の意を示した。

そうして、代々の生け贋の少女たちにそうしてきたように、この少女にも肖像画を描き残してやることにしたという。

「そのために招かれた絵描きは、まだ若い青年で、絵を描いている長い時間の間、二人は……あの……えつと

急にもじもじとして、顔を赤らめた。なぜか、直久にちらりと視線を送つてきた。

「恋に落ちてしまつた……そうですね？」

その八重の視線を追つて直久に微笑みかけた和久は、内心、八重ちゃん相手が悪いよ、見る目はあると思うけど、と思いながらも、八重の言葉をつなぎ話を続けるように促した。

「は、はい。えつと……でも、絵が完成すると、少女は生け贋にならなければなりませんでした。それで、この絵が完成した翌晩、二人は逃げ出してしまつたのだそうです」

「やるなあ！ 駆け落ちか！」

格好いいと言わんばかりの直久に、八重は苦笑した。

「でも、すぐ見つかつてしまつて、二人ともその場で射殺されてしまつたそうです」

（しゃ、射殺、……！？）

その威力のある二文字に、息をつまらせたのは、直久だけではなかた。

（な、何も殺すことはないだろ？……）

現代ならば、ありえない話だ。でもそれが平然と行われていた。

彼女らが生きていたのは、そういう時代なのだ。

改めて直久はその肖像画を見上げた。

少女は白い椿の花が咲く庭で楽しそうに笑っている。その笑顔の先には、この絵を描く青年がいるのだろうか。

ふと、視線を下げると、その絵の下の方に記されている文字がある。『ツバキ』と読めた。

「ツバキって、この娘の名前かな？」

その部分を指しながら和久が八重に尋ねると、八重はあやふやに頷いた。そして、まるでもうこの話はしたくない、といつようにつむいてしまった。

そこで、やつとゆずるが口を開く。

「あの部屋は？」

ゆずるは今いる場所とは逆方向の廊下の端を指差した。扉がひとつりとたたずんでいる。心なしか、その扉を見るゆずると和久の顔が一段と険しい気がした。

(その奥の部屋が、例の怪しい部屋なんだな)

二人から何も聞いていないが、持ち前の直感で直久はそう悟った。しかし、不思議なことに、直久自身もなんとなくその部屋には近づきたくないな、と思った。なぜかはわからない。なんとなくはなんとなくだ。

きっと、長い廊下の端から端を見ているせいが、向こう側の端が薄暗くしか見えていないくて、何だか気味が悪いからかな、と自分を納得させた。

しかし、なかなか返事が聞こえてこないので、八重の方に振り向くと、彼女は何やらずっと遠くを見るような目つきで、その扉をじつと見つめている。

この廊下が薄暗いせいかもしれないが、顔色が悪いように思えた。

「　　実は、あの部屋に、私とは6つ違いの兄がいるんです。……瞬と言います」

「お兄さん？」

もう半日近くこの屋敷にいるが、姉妹とオーナー以外の気配をいつさい感じてなかつたため、双子は同時に驚きの表情を見せた。さすがのゆずるも眉をわずかに動かし、動搖を見せた。

「兄は、生まれ持つた奇病のため、自分の足で歩くことができま

ん。立つことさえも。それで、ずっとあの部屋に籠もつているんです。人と会うのを極端に嫌がるもので、大変失礼ですけど、兄のことはそつとしておいてください。さあ、下の階に下りましょう」「必死な表情で頼まれては、どうすることもできない。仕方なく、誰もが口を重く閉じ、八重に従つて階段を下りた。

もう一つの疑わしき場所は、一階だつた。

「あれ？」

一階の廊下で、見取り図を広げながら和久が小さく声を上げた。すぐ隣にいた直久がそれに反応する。

「どうしたんだ？」

「うん。ちょっと変だなあ、つと思つて」

「ああ？」

どれどれ、と和久の持つ見取り図を覗き込んだ。

一人の足が止まったのに、先を歩いていたゆずるも気付き、少し戻り、同じように覗き込んできた。

「こ」が今いる位置なんだけど……」

細く長い和久の指が、見取り図の上を滑る。それから、目の前の扉を指した。

「こ」の見取り図には、この扉がないんだ。描かれていらないみたい

確かに、その扉は見取り図にはないものだつた。図面では、そこは隣の部屋と一体化しているように描かれているが、不自然にドアが二つ並んでいて、内部で一部屋に仕切られていると、想像するに容易い。

(オレだつてアヤシイのは丸わかりだ)

図面に無いものが、ここにはっきりある。

直久は、まるで謎かけのようなこのドアの存在に、強い興味を持った。隠そとされると、知りたくなるものだ。

が、弟は直久とは違う次元で、このドアの存在が気になつたようだ。

「ゆずる……」

何かを訴えるような目で、和久がゆづるを見ている。それを受けたゆづるは、どこか落ち着かない表情でぼそりと言葉を返した。

「嫌な感じがするな」

「うん、僕も。それで、さつきからドアの向こうを靈視しようとしているんだけど、真っ暗になつちゃって、ダメなんだ」少し語尾が震えたような気がして、直久の弟を見つめる視線に、心配の色が加わる。

「もしかして……」

恐る恐る直久は口を開くと、弟がその言葉をつないだ。

「この部屋が一ヶ所目だね」

その時、一瞬、直久の全身の皮膚の毛がざわめいた気がした。（な、なんだ。この感じ……さつきの嫌な感じに似てる……）

ゆづるの部屋で感じた、あの感覚に。

それは、見えない敵に対する恐怖からなのか。それとも、別の何かを感じ取つたからなのか。

「何かご存じですか？」

八重に問いかける和久の声が聞こえてきて、直久は我に返つた。（やべえ……オレ相当ビビってるな……）

「ぐくりと直久の喉がなり、飲み込んだ睡で、いつのまにかカラカラになつていた喉が少しだけ潤つた。

「そこは……私も、たぶん両親も分からないです。この扉はずつと以前から開けられていないみたいで……」

と、八重がそのドアのノブに手をかける。ノブはカチカチと小さい音を立てるものの、一向に回らない。

「何十年も前に鍵をなくしてしまったのだと聞いています。それ以來開かないのです。誰も扉を壊してまで開けようとは思わなかつたようで、開かずの扉として放つておかれています」

(開かずの扉)

直久だけではなく、一同の視線がドアに集中する。

「それに……」

八重は、唇を小刻みに震わせながら、かすかに聞こえる声で続けた。

「言い伝えでは……」(こ)は

「生け贋にされた女の子たちが使っていた部屋

違いますか

？」
和久が、口(こ)もる八重の代わりに、きつぱりとした口調で言い放つた。

八重は明らかに強張った表情で、やつとのことで首を縦に動かしている、というように肯定してみせた。

(こ)か……

先ほどまでもとまた、数段も強まつた恐怖をこめて、直久はその開くことの無いドアを見つめた。

第六話 言われなくてもわかつてゐる（一）

「今日はもう遅いし、本格的な除霊は明日行いますから」

と和久が、案内してくれた八重に、自室へ戻るように促した。

その様子を横目で見ながら、おかしいな、と直久は思った。普段なら、敵の本拠地が見つかったのなら時間など関係なく、とつとと除霊するのに。何か他にも気になることがあるのだろうか。直久が一人考えこんでいると、案の定、八重の姿が見えなくなつたところで、和久がゆるべに話を切り出した。

「気がついた？」

「外のか」

「うん。やられたよ。気がつかなかつた。屋敷の中にいるとい、いいの悪霊の気配が強すぎて……。うまく隠れてる」

「それも、強い靈力を最弱化してばれないようにしていろ」

「うん。ただものじゃないね」

そこで、ようやく一人が考え込むように黙つたので、せつ口を挟んでもいいかなと直久は思つた。

「何のことだ？」

そう言われた和久は、眉をひそめながら、困つたような表情で直久を見た。

「それがね。どうやらこの屋敷は、中に住みつく悪霊だけじゃなくて、外からもなんらかの影響をうけてるみたいなんだ」

「外から？」

「うん。まずは、それも調べないと、つかつには手をだせない」

「ほつ〜〜

(なんだか大変なんだな〜〜この家)

のんきに直久が相槌をうつと、和久はその直久の暢氣さに、すこしほだされたようだつた。

「とにかく、急いではことを仕損じる、だよ。明日、この辺の地理についてオーナーに話を聞いてみよう」
和久によつて話がまとまるといつは自室へと戻ることとした。

部屋のドアの前まで来ると、中へとへろうとしたゆづるに、くれぐれも気をつけるようにと、和久が念を押す。

そういえば、と直久は思った。

自分は和久と同室なので心配ないが、ゆづるは今夜一人だ。悪霊に狙われやすいのはゆづるの方だから、ゆづるも自分たちの部屋で休めばいいのに、と思わないでもないが、そもそもいかないらしい。

とはいえる、三人で一晩明かすだなんて、直久には息が詰まるにちがない。ごめん被る。

が、状況が状況なだけに背に腹は変えられない、とも思つ。譲歩してやらなくもない。

一人、直久は腕を組み、うんうん、と頷いていた。が、話は直久だけを取り残し、すでにゆづるとは別室で休む方へ進んでいる。

「ゆづる。なにかあつたらすぐに呼ぶんだよ」

「言われなくても、わかってる」

その返事はいつものように冷ややかなもので、さつさと部屋の中に入り、ガチャっと、じ丁寧に鍵までかけた音がした。

（なんだよ、ゆづるのヤツ！　せつかく心配してやつてるとこに、ほつつつんと、感じ悪つ！）

口に出してはいらないものの、色々と思案させられた直久は、苛立ちを隠すことなく、舌打ちした。そして、ゆづるに聞こえるようにわざと大きな音をたてて自分たちの部屋のドアをしめた。

「あ。直ちゃん……」

一人廊下に残された和久には、どちらの心情も手に取るようにわかる。だから、小さく息を吐くと、直久の後を追つようにして部屋

に入つていつた。

部屋に戻つてきた直久は、大股でベッドへ行くと、むすつとした顔で、自分の体を投げ出した。スプリングのきいたベッドは、よく弾む。

「直ちゃん……」

諭すような和久の声が追いかけたので、体をひねつて背を向けた。その明らかなる拒絶の姿勢も、ものともせずに、和久は続ける。「ゆずるは今、すごく不安なんだと思う。だつて、靈の存在は感じるし、見えるんだ。けれど、普段なら簡単に追い払える靈ですら、今は太刀打ちできない。その上、惡靈たちは次から次へと、ゆずるの魂を求めて集まつてくる。なのに 何もできないんだ。すごく怖いと思う。そんなの僕だつたら耐えられないよ。だつて、ひたすらに、結界を張つて身を潜めてやり過ごすしかないんだよ？」

確かに、直久の想像をはるかに上回る恐怖と戦つているのかもしない。

けれど、こちらが手を差し伸べようとしても、向こうは迷惑そうに振り払うだけだ。これでは、何もできない。
(もともと、何かをしてやれる能力もないけどな)

直久は、深くため息をつく。

違う。

この苛立ちはゆずるに大してではない。ちゃんと気がついている。こんな時に、何の力にもなれない自分に対し、必要とされていない自分に対し、行き場のない焦りと劣等感を再確認させられるのだ。

普段なら、知らん顔して笑つていられるのに。

この惨めな感情を、見てみぬふりをしていられるのに……。

返事のない直久の背中に、和久は静かに続けた。

「ゆずる、明日が力を失つちゃう日なんだ。今日も相当弱まつてい

たけれど、明日はあるつきり使えないんだ。だから　」

「…………わかるよ」

直久は和久の言葉を遮り、体をひねつて向き直った。

「氣をつけてやれっていうんだろ？？」

吐き捨てるような一言に、顔色ひとつ変えずに和久は頷く。

「僕もゆずるも、ホントに直ちゃんを頼りにしてるんだよ。じゃな

きや、連れてこないよ。どんなことをしても置いてくる」

「…………」

和久のその言葉は、直久の心には、まっすぐには届かなかつた。

その後、双子はさして会話もせずに、寝仕度を済ますと、早々に布団に入った。

すると、あつという間に直久の隣のベッドから規則正しい寝息が聞こえてきた。

よく考えたら、和久一人で、この広い屋敷の浮遊霊を除霊したのだ。顔に出さないから気がつかなかつたが、相当疲れていたのだろう。

（おつかれさん……）

直久は、弟を起こさないように気を使いながら、体を起こし、ベッドに座つた。そして、ぐつすりと眠る弟の布団を、かけなおしてやる。

普段と変わらないように見えるが、きっとゆづるが不安を抱えているのと同じようだ。今の和久は多くの責任という重圧を感じているに違いない。

依頼人家族を悪霊から守るだけでも、今回は厄介そうだというのに、靈力を持たない直久がいる。それに、ゴキブリホイホイならぬ“悪霊ホイホイ”と化したゆづるまでもが、和久の肩に重くのしかつているはずだ。

なにしろ、ゆずるは“あの”九堂本家の次期当主。大きな傷を負わせようものなら、長老たちがこれ幸いと、どんな無理難題を言いつけてくるかわからない。

(本家も何を考えてるんだか)

和久ほど、本家に出入りしていない直久には、詳しいことはわからない。靈力を持たない直久は、本家から存在そのものを認められていないかのような扱いを常に受けている。だから、もともと本家には良いイメージは持っていない。

(ゆづるも、色々大変なのかもな……)

こんな靈力の無い時に、こんなところに送り込まれるなんて。どう考へても“大事”にされている嫡子という扱いではない。

それにして寝られない。

まったく眠気の字も感じないので、直久は、とりあえずトイレにでも行くかと、立ち上がった。

その時。

(!?)

小さい悲鳴のようなものを聞いた。隣の部屋、ゆづるの使っている部屋からだ。

瞬間に和久を振り返ると、弟はまだ静かに寝息を立てている。仕方なく、直久は弟の肩を揺すった。

「おい、カズ。起きる」

だが、その眠りは深く、目を覚ます気がしない。焦った直久は、今度は本気で体を揺すった。

「カズ！！ 起きろ！！ ゆづるに何かあつたかもしけないっ

それでも、和久はまったく起きない。

これは尋常ではない。

悪霊が夜中に何かをやらかす時、その邪魔になるようなヒトは、たいてい金縛りにあつたり、眠らされることが多いんだ。だから、いくら頑張つても体が動かなかつたり、起きなかつたりす

る時は、悪霊の仕業である」とがちよ。

なぜか、昔、和久がそんなことを言っていたのを、ふと思い出す。
この不自然な眠りは、悪霊の仕業なのか?
だとすると、ゆずるは……。

(やつべえつ……)

直久は何も考えずに、部屋を飛び出し、ゆずるの部屋の前に駆け寄つた。そして、ノブを回す。ガチャガチャと音がなるだけで開かない。

(鍵かっ…)

ちつと舌打ちをすると、直久はゆずるの部屋のドアを拳でたたき出した。

「ゆずるひ、聞こえるか! ? 無事なのか! ?」

返事はない。ドアの向こうに気配もない。

寝てるのか。それとも、もつ悪霊に……。

自分の想像に、ぞくりと背筋に冷たいものが走る。

「おい、大丈夫なのかっ…！」

部屋の中からの応答はなく、ゆずるの様子もうかがい知ることはできない。

(くつそつ………)

どうしたらいい。

何かいい手はないか。

自分にできることはないか。

(カズは起きねえし、かといつて依頼人を危険に晒すわけにもいかないから助けも呼べねえつ……ん、そうだ！)

直久は一か八かの行動に出ることにした。体当たりで、ドアをぶち破る作戦を思いついたのだ。やつたことはないが、よくテレビドラマで見る、アレだ。

意を決し、ドアから4歩下がると、懇親の力をこめてドアに激突する。

「ぐつ……」

あまりの衝撃に直久は息がつまり、咳き込む。ドアはびくともせず、簡単に床の上に弾き飛ばされてしまっていた。

「ちきしょう……ドラマは所詮ドラマかっ！…」

そう叫びながら、再び助走をつけ、ドアへと突進する。が、その時、不思議なことが起きた。直久の体がドアに触れる直前、ひとりでにドアが開いたではないか。

(え!?)

ついてしまった勢いを殺すことはできず、直久はそのまま、ゆづるの部屋に突進し、床に倒れこんだ。

その時打ち付けた全身の痛みもさるごとながら、それよりも強い喉の痛みを感じた。ヒリヒリと喉が焼け付くようであつといふ間に口の中の粘液が蒸発していくようにすら思えた。

何よりも、体が勝手に防衛本能をむき出しつけていくので、心臓が強く脈打ち、呼吸が荒くなつていいく。

それだけではない。直久の肌もその部屋の異変を感じ取っていた。

(……寒い……)

明らかに、廊下や直久たちの部屋よりも、温度が低く感じる。何なんだ、この部屋は。いつたいどうなつているというのだろう。直久が未だかつて感じたことのない大きな不安に襲われた時だった。

「…………」

どこからかすかに誰かのうめき声が聞こえてきた。それで、直久は、はつとなる。

(そうだ、ゆずるつ)

すぐさま首を左右にひねり、暗闇の中、必死に目をこじりした。

言われなくてもわかる(2)

(「どうだ……どうにいる……！？」)

寒さを感じているといつのに、直久の額にはつつすらと汗がにじんでくる。

部屋の奥の暗がりに田をやつた時だった。直久の眉間に力が入る。ベッドの上の布団の固まりが僅かに動いたのを、直久は見逃さなかつた。

(「あそこだーー！」)

直久は、はじかれたように床を蹴つて、ベッドに駆け寄る。見るど、ゆずるはベッドの上で布団にくるまり身を縮めていた。

「おい、どうした！？ 何かあつたのか！？」

驚いたように、勢いよくゆずるが直久を見上げた。

「な、直久っ」

「おう。大丈夫か？」

近寄つて肩に手をそえる。すると、その細い肩は小刻みにガタガタと震えていた。

信じられなかつた。ゆずるが恐怖に身を震わせている。いつも自信に満ちあふれて、クールで無口でいけ好かない、あのゆずるが。まるで別人のようにおびえきつている。

「また、目がたくさん……見えるんだ」

消え入りそうな声でゆづるが訴える。

「俺を探してた……たくさんの中が俺を捜してたんだ」

「…………え」

直久は、あたりを見回した。

だが、見渡す限りの闇の中に、目だけが浮かんでみるなんてことがあるわけがない。

でも、ゆずるには見えているのだ。

「もう限界なんだ……」

ゆずるはそう言つと、直久の腕にしがみついてきた。

「限界って……？」

「今はカズが張つておいてくれた結界で、奴らには俺の姿が見えない。でも……それももう直ぐ消える。奴らの力がどんどん強くなつていくのが、手に取るよつにわかるんだ」

「奴らって」

生け贋になつた女の子たちのこと? と言葉を続けようと思つたが、できなかつた。ゆずるが、びくじと大きく体を震わせたからだ。

「……消える」

そう、ゆずるが言つた直後。

ブツ。

わけがわからず、呆然としている直久の耳にそれは確かに聞こえた。まるで細い糸が切れたよつな、やつと聞き取れるよつな音だつた。

なんの音だらう、と思ったのもつかの間、一瞬にして、直久の周りの空気が、ずどんと、肩にのしかかるよつに重くなる。そして、急激な吐き氣を催した。目がぐるぐると回るよつな感覚もあれば、胃をわしづかみにされ振り回されたよつな気持ち悪さだ。

「うつ……うえつ……」「

胃液が出そうになるのを必死にこらえた。

直久は悟つた。先ほどの、ブツという音は、ゆずるのために和久がこの部屋に張つたといつ結界が壊れた音だつたのだ、と。

(……ゆずるもカズも、いつもこんな感じてるのかよ……)

なんとか持ちこたえた直久は、ちらりとゆずるに視線を送つた。

「ゆ、ゆずる!?

直久は慌てた。今にも意識を失いそうなほどぐつたりとしている

のが見えたのだ。

初めて悪霊の靈氣を感じる直久とちがい、ベテランのゆずるなら、こんなの大したことない、と言わんばかりの涼しい顔をしていると思つたのに。

「お、おいつ……」

ゆずるの頬をピシャピシャと叩いた。僅かに目を開けたが、すぐ閉じてしまう。

「しつかりしろ……！」

叫びながら、ゆずるを抱き起こした。そして、ゆさゆさと乱暴にゆずるの体を揺する。が、今度は力なく頃垂れ、動かない。（これって、万事休す！？）

『ぐり。

生睡を飲み込む音だけが、闇に包まれた無音の部屋に響き渡った。明らかに剣呑な空氣の中、何の抵抗もできない一人で、どうしようというのだ。危険が察知できても、その危険を回避できねば何の意味もない！

直久は激しく後悔した。もっと和久の話を真剣に聞いておくべきだった。こんな時に直久にもできることを、何か教えてもらえばよかつた。少なくとも。

（和久をたたき起こす方法聞こときやよかつた。てか、ゆずるなら知つてるかもしれない！）

わずかな希望を込めて腕の中のゆずるを見下ろすも、すでに正体をなくしていいるゆずるの姿に、無惨にもその希望は碎かれる。（……氣づくの遅すぎ、オレ……）

がっくりと肩を落としたその時。

（……！？）

直久の肌が、ぞわぞわッとざわめくよつて毛を逆立てていぐ。まさか、と思つた。

勢いよく、体ごと後ろを振り返つた。目だけを動かし左右を確認する。再び、何かを感じ取り、右前方へ首をひねる。視覚から得ら

れる異変はない。

だが、確かに。

(何かいるつー)

はつきりと直久は感じ取った、何人ものヒトの気配。直久たちの背後から右に左に忙しく動き回って、まるで品定めでもしているようだ。

冷蔵庫のように冷えきった部屋だとのうのに、直久の頬を凍るほど冷たい汗がすーっと伝い降りていった。

(何人いるんだ……)

ゆづるをしつかりとかかえ直すと、今度はゆっくり首をひねり、あたりを見回した。

だがいくら目をこらしても、何も見えるはずがない。靈力のない直久は、本能的に、見えない敵が発する殺意を感じ取つてゐに過ぎないのだ。

(くつそう。どうしたらいいんだ！)

直久が悔しさと歯がゆさでいっぱいになつた時、突如としてゆづるの体が腕から、ずるりとすり抜けた。まるで、何者かが闇の中へゆづるを引き吊りこもうとしているかのようだ。

(なっ！？ ちょっと……！)

直久はとつさにゆづるの左腕を掴み、間一髪で腕の中へ引き戻す。

「あ……あつぶねーつ……！」

肝を冷やしながら、ゆづるをしつかりだき抱えた。しかし、なおもゆづるは、かなり強い力でひっぱられている。

その力はだんだんと強さを増していった。しだいに、意識の無いゆづるの体が、直久から引き離されていき、直久はそれを何とかつなぎ止めるのに必死に腕を引っ張るしかない。

(腕が……このままじゃ……きつッ)

持たない。限界の見えてきた自分と、限界どころか、まだ力を強

め続ける姿なき敵。勝敗は火を見るより明らかだ。

「うつ……」

それまで反応のなかつたゆずるが小さくうめいた。そのか細い声に導かれるように、直久はゆずるの足首を見る。すると、その足にいくつもの手が絡み付いているではないか！

（なつ……）

直久はぎょっとして、目を見開いた。

その手は青白く、暗闇にはつせりと浮き上がりて見える。
そう、見えるのだ。

直久にも、はつきり、見えるのだ。

弟から散々聞いてはいても、実際に見るとでは全然違う。それは、確かに“ヒトの手”なのに、明らかに“人の手”ではない。血の通う暖かさや、柔らかな弾力と程良い滑らかさの感触など、その手からは想像できない。実際にさわらなくてもわかる。

それに、異臭こそないが、朽ちた、というのが正しい表現だろう。ねちゃりと、粘つきそうな、ただれた皮膚からは、肉が腐り落ちて、所々骨が見えている。

完全に、初めて靈的存在を目の当たりにし、その恐ろしい姿に、頭が真っ白になっていた。だが、再びゆずるの身体がその手に強引に引っ張られて、すぐさま我に返る。

「うわああ……あつぶねえ……」

自分までもが引きずり込まれそうになり、ゆずるを掴んでいた手を離し、とつやにベッドの枕を掴んだ。

限界が近い。しかも片手で抵抗できるほど、敵の力は甘くない。

その上、腕には乳酸がたまり、ぱんぱんになっている。手のひらも汗がにじみ、いつ、ゆずるの腕が滑り落ちてしまうのではないかと気が気ではない。

「だーーーー！ ゆずる、しつかりしろーーー！」

ゆずるが正気に戻れば、自力で腕を掴んでくれれば、ベッドにへくつづけるとか、その間に和久を起こすとか、色々やりようがある

かもしだいのに。このままでは、この手が離れるのを待つだけになってしまう！

ズルリ……。

徐々に引っ張られ、直久の手から引き離されていくゆずる。直久の表情に焦りの色ががこくなる。

もう限界だつた。

それでも、直久は諦めなかつた。

（ぜつてー、離すもんかっ！！　俺は腕がちぎれても離さねーぞつ！－）

確かに、ゆづるとは折が合わない。顔を見れば、いつもむかついてくる。

でもそれは、嫌いだからではない。

この十六年間、家族の次に、共に過ごした時間の長い従兄弟を、いつもどこか妬ましく思つていた。一族で一番の能力を持ち、誰からも認められる、同じ年の従兄弟の存在を。

ゆづるといふとどうしても比べてしまつ。

何も力を持たない、一族から無視される自分と、すべてを持ち将来を期待される従兄弟。

存在そのものを消された気分になる。

自分はここにいる。確かにいるのに。

なぜ双子の和久だけが、厚く庇護され、自分は臭いものでも見のかのような扱いを受けねばならないのか。

でも、ゆづるが悪いわけではない。好きで、その力を持つて生まれたわけではないのだ。

好きでこんな怖い思いをする奴がどこにいる。何度も、何度も、こんな死にそうな思いをしながらも、てきて当然のような親族の目をいつも感じていたに違いないのだ。その親族の中に自分もいた。だからゆづるは自分を冷ややかに見下していたのかもしれない。何も知らないくせに、と。

己の運命をゆづるのせいにして逃げていた自分が、同じ年月かけ

て運命と必死に戦つてきたゆづるに叶うわけがない。

オレはオレだ、と言いながら、直久自身が自分を認めていなかつたのだから。

いつか、素直にゆずると対峙できる日がくるだらうか。
ゆずるの気持ちを汲んでやれる口がくるだらうか。

弟と肩を並べ、ゆするの力になつてやれる日が
。。

(くそーー、!!
死なせてたまるかー、いきかわー、おおおおー、
……)

卷之三

その時、一瞬だけ、部屋の空気が揺れる。

すると、わずかな間をおいて、けたたましい足音とともに、誰かが駆け込んできた。すぐさま、弟の刺すよつや鋭い声が部屋に響き渡る。

「臨、兵、闖、者、皆、陳、烈、在、前つ！－！ 悪靈退散つ！－！」
朦朧とする意識の中、ふつゝと部屋中の重苦しさが消し飛んだの
を感じた。

(助
かつ
た
)

意識を完全に手放す瞬間、直久は自分に駆け寄つた弟の声の他に
クスクス、と誰かが笑う声を聞いたような気がした……。

「抱きあつて寝てるところ悪いけど、いい加減起きたら？」

迎えた。

「直ちゃんは、向こうの部屋に担いでいるかと思つたんだけど、直ちゃんたらゆずるを抱きかかえたまま全然離さないから、そのまま放置して、僕は隣でゆっくり寝たよ。けど、まさか、朝までそのまま寝てるとは思わなかつたけど」「

ケヌケヌと弟の笑い声と、きらきらとした田光が降り注ぐ中、徐々に定まる直久の視界。

(朝?)

田の前に見えるのは、直久と同じく重たい瞼をなんとかこじ開けようと必死なゆするの顔だった。しかも至近距離。

首を動かし、周囲を見回し、状況を把握するのに二十秒。

直久は、自分の腕がゆするをしつかりと抱きかかえた状態になつてゐることに気づき、「おわつ」と叫びながら自分の体を引いた。と、ほぼ同時に、同じく状況を把握したゆするが勢いよく直久を突き飛ばした。

ドから床に投げ出された。全身に激痛が走り、息をつまらせる。

腰をさすり、体を起こした直久は、ベッドの上を見上げ、ギロツ
とこらみつけた。

「てつめーつ……いきなり何すんだよつ……」

ゆづるは身を硬くさせ、自分の肩を抱いている。

(ひ、ヒトを汚いものみたいに言いやがつて……)

一気に頭の隅々まで血がいきわたり、すっかり目が覚めた。

「オレだって好きで触つてたわけじゃねえよ。お前が、悪靈に引きずり込まれそうだつたから助けてやつただけだらうがつ」

「俺は頼んでない」

「何だとつー?」「

がばつと体を起こし、直久はゆづるの胸ぐらを掴んだ。あまりの憤りに、体中の血液が沸騰するような感覚を覚え、眩暈がする。「はいはい。そこまで~」

緊迫する空氣の中、二人の間に割つてはいる和久の声は、なんとも暢気なものだ。和久はさらに、につこりと微笑みながら、持つていたフェイスタオルを直久とゆづるへ差し出した。

「ほりあ~、早く顔を洗つて。朝ごはん食べたら出かけるよ?」「…………」「

いつも思う。

「」の和久の笑顔は、何よりも強い。最強だ。

「……出かける?」「

朝つぱらからど」「へ? と思つたのは直久だけではなかつたらしい。ゆづるも、不思議そうな顔で和久を見上げている。

「あ、そ、」

言い終わると和久は、にんまりと口端を上げ、一気にカーテンを引き開けた。

大きな窓が、いっぱいに日光を吸い込み、部屋中が生まれ変わつたように明るくなる。

直久はまぶしさに目を細めた。

「あの山だよ」

和久は、窓の外を指差した。

朝食後、直久たちが向かつたのは、裏山だつた。

朝食の準備をする山吹一家を手伝いながら、和久が収集した情報によると、この屋敷の裏に実に怪しい場所があるということがわかつたのだ。

「ほら、昨日言つたでしょ？ この屋敷は、内部だけでなく、外部からも何らかの影響をうけてるって」

屋敷から裏山へと続く獣道を歩きながら、和久は説明し始めた。

先頭を行くオーナーには聞こえないよう、小声になる。

「聞くところによると、この裏山にはこの辺り一帯の山の神様を祭つた古い祠ほじゆがあるらしいんだ」

「祠……？」

「うん。その祠こそ、女の子たちが生け贅としてささげられていた、神様の祠だつたんだ」

「……まじかよ。めっちゃ怪しいじゃん」

「でしょ？だから、早速お願いして、案内してもらつてるつてわけ」

「なるほど……」

直久が、腕を組んで、さも納得という顔で頷いた。その素直な反応に、ふわりと笑つた和久だが、ふと視線を直久の背後に送る。直久もその視線につられて、首をひねり、背後を振り返つた。

「…………」

「ゆずる辛そうだね」

直久だけに聞こえるように、和久は囁いた。

「だつたら、おいてくれば良かつたんじやねえ？」

「それはダメ」

びしやりと言い放つた和久の顔から笑顔が消えた。

「あの家に置いていくなんてできないよ。だつて、ゆずるは今、力が使えないんだよ。また、昨日の晩みたいに、何かあつたら」「ひとたまりもねえな」

和久の言葉を、直久が継いだ。

かと言つて、あんなに辛そうに肩で息をするゆずるを、結構な傾斜の山道を歩かせるのはいかがなものだらうか。

（きっと、心配してやつても逆ギレされるだけだらうけど……）

ふと、直久の脳裏には昨夜の出来事が、まるで録画映像でも見ているかのように蘇ってきた。

自分でも驚くほど鮮明に。そして、その時感じた恐怖までもが呼び起こされてゆく。

（まつたく、ありえないいつつうの……）

あんな恐ろしい目にあつていながら、よく、三人とも無事に朝を迎えたものだ。

それもこれも、タイミングよく和久が目を覚ましてくれたから。でも、あれほど直久が起こそうとしても起きる気配すらなかつたのに、どうして自力で起きることができたのだらう。

何か対策がしてあつたのだろうか。たとえば、式神に命じてあつた、とか。

……ならば、式神も、ひとつと和久を起こしてくれれば、あんなに苦労しなくてすんだといつのに。

直久から思わずため息がこぼれた、その時。

（！）

不意に、ぞくりと悪寒が走る。同時に、あの時の声が、直久のすぐそばで聞こえたような気がした。あの時聞いた、クスクスとあざけり笑うかのような何者かの声が。

ばつと、体をひねり四方を確認する。何も見えない。もう、声も聞こえない。

和久とゆづるを振り返るが、何も感じてないようだった。

（気のせい？…………でも）

「女の声だつた……」

「え？」

突然難しい顔をした直久に、和久はびっくりしたように聞き返した。

「いやなう。聞いた気がしたんだよ、女の笑い声」

「笑い声？」

和久の眉が寄る。

「必死で抵抗するオレらを見て、くすくす笑つている感じ？ まあ、聞き間違えかも知れないけどなあ。わけわからなくなつてたから」でも確かに聞いたのだ。

人の気配も感じたのだ。

意識を手放す瞬間に……。

「女の声……」

和久が考え込むようにあ、「に当てた右手を、何とはなしに直久は目で追つた。

その表情から、自分の話を真剣に受け止めてくれているのが伺える。それがまず不思議だった。

能力のない自分が、意識を失う直前に、『いなはづの女の声を聞いた』と言つたのに。

きつと、ゆずるなら「寝言は寝て言え」と切り捨てるだろ。間違いなく、本家の長老たちなら、鼻で笑つて終わりだらう。

「信じてくれんの？」

「だつて、聞いたんでしょ？」

何でそんなことを聞くの、と言いたげに首をかしげる和久。だから、直久も胸を張つて言つことができる気がした。

「聞いた」

直久は深くうなずいた。そつと、胸の中が熱くなるのを感じながら。

「じゃあ、確かに、僕ら以外の“誰か”があの時、あの部屋に居たんだと思う」

「……そうか……」

和久は、利き手で頭を書き上げた。そして、さらに難しい顔になつて、小さくため息をつく。

「何だろうね……ただ、僕も気になることがあるんだ。さつき気が

ついたんだけど、そのことに関係があるかもしない」「

今度は直久が眉をひそめる番だつた。

「気になること?」

「うん。 ゆずるの使つてゐる部屋、開かずの扉の部屋の真上だつたんだよね」

「え……あの?」

「そりなんだ」

そこで、和久は言葉を切ると、ふと笑顔に戻り、直久をしげしげと見やつた。

「でも、不思議だね。何で急に直ちゃんにも靈が見えたり、感じたり、聞こえたりするようになつたんだろうね」

急にニヤニヤと含みのあるアヤシイ笑みを浮かべ、自分を覗き込むもので、直久は何も身に覚えが無いのに、ぎくりなつた。

「な、なんだよ」

いぶかしげな顔をしている直久に、和久はさらに付け加えた。

「僕はいつかは、直ちゃんも力が目覚めるとは思つてたけど、何がきっかけだったんだろうなあと思つて」

「さあ?」

直久は、何が言いたいのかさっぱり理解できず、苛立ちをこめた短い返事をした。それを見て、和久が一瞬驚いた表情を見せる。鈍すぎ……、と弟がつぶやいたような気がしたが、氣のせいだと思つことにした。

(それにしても……)

直久は再び眉をひそめた。知らず知らず、和久の言葉が何度も反芻している。

僕はいつかは、直ちゃんも力が目覚めるとは思つてたけど。
ど。

不思議な力を持つ一族。現存する九堂家とその血族は、直久以外

全ての人が何らかの能力を持つている。

できるだけ、外部からの婚姻を避け、血族間で子孫を残し、何百年もの間その血が薄まらないようにしてきた。

部外者を忌み嫌い、まるで、己たちだけが別人種であり、己たちの国があるかのように外界からの干渉を拒絶する。

そんな孤高の一族 九堂一族。

直久にとつては、出来うる限り触れずにいたいアキレス腱であり、いくら切っても切り離すことはかなわない、もはや呪いのような存在だ。

そうだ、自分たちは呪われているんだ。このよく分からぬ能力も、きっと何かの呪いか祟りか、罰なのだ。そう思わなきや、やつてけない。

そうやって自分はこの十六年間を生きてきた。

けれど、結局自分もこの呪われた血から、逃げることはできないのかも知れない。

「なあ……」

直久は、前方を見ながら、ぽつりと言った。

「ウチつてさ……」

「口」もって、言葉が続かず、ついには閉口してしまった。

だが、直久のそんな様子から、和久は敏感に感じ取る。双子の兄が何を言いたいのかを表情を読むことなんて、紙に書かれた活字を読むのに等しい。

「もしかして、九堂^{ウチ}一族のこと聞きたいの？ どうして、うちの一族は妙な力を持っているのか……とか？」

直久は内心舌を巻きつつ、観念して頷いた。その兄の様子に、さも嬉しそうに和久はおどけて見せた。

「その言葉を待っていたんだよ、ずっと……」と付け加えながら。「でも何で急に？」

「だってさあ……見ちゃったんだぜ、俺。靈なんて存在しないなんて主張していた訳じやないけどさあ……本当言つと、半信半疑だつ

たつて言うか

実際、何度も田のあたりにしてきた。弟と従兄弟が死闘を繰り広げる姿も、両親が誰もいないはずの空間に向かつて話しかけている姿も。

だが、自分には見えない。

そこに靈がいるといわれても、何も感じない。

「でも、確かに見ちゃったんだ、オレも」

「あの手は、生きてる人間のものじゃなかつた。でも、本当に見えた。確かに存在してたんだ」

「うん」

一つ一つ、昨夜のことを確かめながら言葉にする直久に、和久は全てを受け止めるように頷いた。

前に誰かが言っていた。

靈の存在を信じるか否かという質問は、靈を見ている人にはナンセンスだと。なぜなら、彼らはいつも靈と共に生きているのだから。「靈も、僕たちの力もちゃんと認識したら、どうしてこんな力を持つているのだろうって疑問に思つたんだね」

自分のモヤモヤとした気持ちを、さらりと代弁され、素直に頷いた。

自分はいったい何者なのだ。何のためにこの世につまれてきたのだろう。

ずっと自分は、必要の無い人間だと思っていた。

でも、自分にも何か力があるのだとしたら、何か役目があるのだとしたら、それは何なのだろう。

「いいよ、教えてあげる。本当は、お祖父様か、お母さんに聞いた方が確かなんだけど、今知りたいでしょ？」

その覚悟はあるのか。

全てを受け止める覚悟はあるのか。

真実を見る目は持つているか。

そう問われているような気がした。

弟に、ではない。

“運命”といつものに、だ。

直久は「ぐりと生睡を飲み込み、それから、もう一度、ゆっくり頷いた。

「よし。まず……直ちやん、陰陽師あべのせいめいって知つてる? 安倍晴明とか聞いた」とない?」

「ない」

「じゃあ、そこからだね」

ちらりとゆするを気遣つ視線を送つてから、再び直久の目を見て、和久は説明しだした。

「陰陽師というのは、平安時代に活躍した、いわば占い師みたいな人たちのことで、安倍晴明は、その陰陽師の中でも最も力が強いと言われた人なんだ」

「はあ……」

いきなり平安時代まで話が飛んでいつてしまい、直久は拍子抜けした声で返事をした。

(せつかく勢いつけたのに……)

「だいぶ前に、占いブームになつた時、安倍晴明が注目されたから、彼についてはそこそこ知つている人が多いけど、陰陽師=安倍晴明みたいに思い込んじやつている人がほとんどなんだ。だけど、陰陽師つていうのは、仕事の一種なわけ」

「刑事さん、とか言つてるのとかわらないわけだな」

「そう。だから、彼の他に何人の陰陽師がいたわけだ。まあ、他の陰陽師が彼一人の影に収まつてしまつほどに、安倍晴明は強い力の持ち主だったんだ」

和久はいったん言葉を句切つた。足下の雪に目を落とす。

「彼の影で、歴史の波に呑まれ、消え去つていった陰陽師たちの中に、**大伴泰成**^{おおともやすなり}という人物がいたんだ」

「どつかで聞いたことがある気がする」

「そりや、僕たちの御先祖様だもん」

「なぬ？」

突然話が自分たちの一族につながつたので、直久は目を見張つた。「ところが、僕たちの御先祖は他の陰陽師たちみたいに、晴明の影で黙つているような人じやなかつたんだ。彼は晴明と同等、ううん、それ以上の力を手に入れようとして、様々な鬼たちと契約した」

「はあ？ 契約？ 鬼と？」

直久は顔を引きつらせた。

（鬼と契約つて……）

鬼というものを見たことはない。だが、その契約が良いものが悪いものかというのは、感覚的に想像できた。

よく西洋の小説や映画でも、自分の欲のために、悪魔と契約をした人間の話がでてくる。

（何となく……ショック……）

自分たちの「先祖さまは、実はあくどい人だつたのだろうか。

「そうなんだ。自分の死後、自分の体を捧げるから、自分の式神になれ、つて契約したんだよ」

「か、体を捧げる！？」

次から次へと、信じられない言葉が飛び出るので、若干ついていくてない。だが、なおも和久の言葉の攻撃は続く。

「鬼とか、妖怪たちの中にも、性格の違いがあるんだけど、大抵、捧げられたら、食べるよ」

「……た、食べる……！？ だ、誰を！？」

「だから、契約者を。実際、彼が亡くなつた瞬間、その死体が、髪の毛一本残さず消えちゃつたんだつて。つまり、彼に使役された鬼たちが契約通りに持つていつたからなんだ。ある鬼は右腕、ある鬼は左足みたいに、彼の死体からもぎ取つて」

「ひええええ」

小さく叫びながら、両頬に手を当てた。そんな直久に一コリと微笑む弟の姿が急に恐ろしいものに見えてきた。

彼にとって、それは日常なのだ。それが普通に行われている世界に、今まで生きてきた。

ヒトが動物の一部であり、弱肉強食という自然の摂理の中で生きているのと同じように。直久の知らない世界の厳しい掟を垣間見た気がして、どう飲み込んでいいか分からなかつた。

「彼は、より強い式神を手に入れるために、強大な力をもつ鬼を探し歩いてこの関東まで来た。そして一匹の雌狼と出会つたんだ。その妖狼は真っ白い毛並みの、本当にきれいな狼だつたんだつて。まあ……いろいろあつて、彼はその狼との間に女の子を儲けた」

「儲けたつて。狼だろ？」

「人間と獣の結婚つて、よくある話だよ。中でも狐の例が一番多いね。人間に化けた狐と、そうとも知らない人間の獣婚の話、昔話とかになつて語られてるでしょ」

「ぶ、物理的に無理だと思うのはオレだけだろうか……？」

「サイズとか、その他もうも……」

「あーハイハイつ！！ とにかくつ！！」

直久の頭の仲が、よからぬ方向へ突き進んでいくのを、寸前のところで食い止める。

「生まれてきた女の子の名前は、小夜^{さよ}」

小夜……妖狼と人の間に生まれた娘……。まるで、小説やB級映画か何かに出てきそうな設定だ。

他の人が聞いたら、「冗談でしょ？」と鼻で笑われるのがオチだ。

本当にそんなことが現実にあったというのだろうか。

いや、でもそれを本気で信じているのが自分たちの一族なのだ。（妖怪、悪霊、神。オレたち一族は、いつたい何者なんだ……）

自分たちこそ、ヒトの形をした“ヒトでないもの”なのかもしない。

「ちなみに、清明よりも小夜の方が強い力を持っていたと言われているんだ。それが証拠に、清明は自分を負かせた小夜に、幾度も求婚したんだけど、そのたびにフラれていったとか　もつとも、そんなことを言っているのは、うちの家だから、少々着色されてるだろうけど」

と言つて、和久は肩を竦めた。

「幼い頃、小夜は泰成ではなく、母狼に九匹の兄姉たちと共に育てられたそうだよ」

「もののけ姫っ！」

「……で、彼女は成長と共に、関東で名声を高めていくんだ」

「つてスルーかよっ！！！」

「その名声は、遠く都にまで聞こえるようになり、度々都へ呼ばれるようになる。まあ、ここで清明と対面したんだろうね」

「つてそれもスルーかよっ！！！」

「巫女として活躍した彼女は、九匹の妖狼を式神に持つていたことから、九狼の巫女と呼ばれるようになったそうだよ。九狼　その“くろう”という音がいつの間にか“くどう”になって、“九堂”になり、それが本家の姓となつたわけ」

「…………」

「どうしたの？」

「いえ……途中から消化不良で、胃薬欲しい感じなんデス」

「うん、一気に言い過ぎちゃつたかも」

幼い頃から、この話を何度も聞かされてきた和久にとつては、学校で暗記させられる『枕草子』よりもスラスラと言葉が出てくるらしい。

最後に弟は、要するに一族の人間離れした力は、自分たちの血にその雌狼の血が混じつていることが原因だ、と言つた。

「狼だけならいいんだけどね」

「え？」

「婚姻を重ねることで、血が薄まり、力を失うことを畏れた僕らの

祖先は、薄くなる度に妖怪と交じつたらしい「

そして、さらりと和久は言つてのけた。

「たとえば、お祖母様のお父様がイタチの妖怪なんだ」

「い、イタチ……」冗談をつ

「でも、曾お祖母様は未婚でお祖母様を生れたんだ。うちのようなお堅い御家で、未婚の母って普通じゃないと思わない？ 勘当するくらいはしそうでしょ？ なのに、その母娘は厚く礼遇され、娘が当主に嫁ぐんだ。おかしくない？」

確かに、和久の言つてることは筋が通つてゐる。

だけど、そうなると……。

「オレらイタチが混じつてゐるわけ……？」

衝撃に打ちのめされ、直久はその場に立ち尽くした。突然足を止めた直久の背中をよけるように、ゆづるが横へずれた。

「急に止まるな」

「……だつて、イタチ……ま、まさか、だからオレは天才的に運動が得意なのか！？」

「いや、でも、僕にも混じつてゐるんだけど。僕、体育2だよ」直久は、今、まさに気がついたというように、弟の顔を見ると、深いため息をついてから、同情をこめて弟の肩に手を置いた。

「……オレが全部、吸い取つちまつたんだな」

「そうかもね。でも、僕、赤点は一つもないし、体育もテストでカバーしてゐるし、それでいいよ」

「うつ」

「一の句が告げないでいると、ゆづるも弟を援護射撃する。

「運動だけで、勉強が壊滅的つてぢつよ」

「ぐはつ」

「だよね、飛び箱飛べなくとも、大学は入れるよ」

「かはつ。……オレ、今、吐血したところね」

直久は体を折り曲げ、口に手を当てた。

「……うぜえ……」

ゆずるは吐き捨てるよつに言つと、双子を追い抜き、先に行こうとした。その腕を、とっさに直久が驚づかみする。

「あんだと、てめえつ

唸るようにすごむ直久を、見ようとせずにゆずるは直久の腕を

振りはらつ。

「……触るな」

足を止めずに、一言だけ残し、ゆずるは心配そうにこちらを見ているオーナーのもとへと向かつていつた。今にも噛み付くそうな顔で、直久はそれを目で追う。

と、肩に弟の手が、ぽんと乗せられた。

「直ちゃん」

ぐるんと首をひねり、弟を見ると、弟は寂しそうな笑顔を返してきた。その物言いたげな表情に、直久の怒気がいつきに蒸発した。何があるのか。

自分の知らない、本家の事情。ゆずるの心をここまで冷たく凍りつかせてしまった、理由が……。

「行こう」

和久は前方で心配そうにこちらを見守つているオーナーに、今行きます、と会釈する。

「ほら、直ちゃん」

和久が促すので、しぶしぶ直久はオーナーの方へと歩き出した。

第八話 寒椿か……

屋敷を出て三十分はたつていないだろう。ずいぶんと森が深くなつてきた。

直久の頭上の太陽光は、幾重にもなる葉のわずかな隙間をすりぬけ、地面に到達するしかない。夜になれば闇が全てを溶かしこみ、際限のない漆黒の世界が広がるだろう。

それに肌寒い。

獣道の両サイドに積まれた雪も深く、腰の高さまである。しかし、最後に雪が降ったのが2日前だというのに、人がやつと一人通れるだけのスペースは道として確保してあつた。

ご苦労なことに、オーナーは毎日この道を通り、この先にある祠にお供え物を届けているという。信仰心の現れというべきか、それとも強迫観念からというべきか。

その根底にあるのは畏れであり、恐れであろう。

直久には、体格の良いオーナーの広い背中に背負っているものを思ふと、ひどく哀れに思えた。

彼のせいではない。

娘のせいでもない。

生まれた家を間違えたのだ

自分のように……。

「あの先です」

オーナーが前方を指さした。

三人は無言でその指の先を追うと、一本の太い木が目に入った。その木と木を一本の縄がつないでいた。縄には、稻妻のような形をした白い紙が垂れ下がっている。神社でよく目にするものだ。だが、どちらも汚らしく黒ずみ、神聖なものというより、まがまがしさが先立つ。

ゴールは目の前だといつのこと、森の薄暗さも手伝つて、直久の足取りは重い。

数分後、祠の目の前にたどり着いた直久は、足を止め、あたりを見渡した。そして、目の前に広がる光景に、思わず息を呑む。

「！？」

まず目に付くのは祠。

直久の目の高さに、さきほど離れた所からも見えた、一本の木を繋ぐ白い縄がある。その縄の一メートルほど奥に、小さな小さな古い祠はひつそりとたたずんでいた。まるで祠がこちらを睨みつけるようだと直久は感じた。

祠全体が古い石でできている。かつては何か装飾が施されていたようだが、原型を想像することもできないほど劣化していた。だが、それでも十分すぎる存在感に、直久は圧倒されていた。

しかし、直久が驚いたのは祠の寂れきった様子でも、威圧的な様子でもない。

（綺麗に雪がないしつ）

その祠を中心にして、半径二メートルほどの円を描くように、綺麗に地面が見えている。くり貫かれたように雪が無いのだ。

「こりやー 雪かき大変だあー」

オーナーはペンションだけじゃなくこの祠のオーナーでもあるのか、と一人で直久が納得していると、山吹オーナーは「違いますよ」と首を横に振った。

「ここだけ、なぜか雪が積もらないのです」

「えつ！？」

声を発した直久だけでなく、和久とゆするもオーナーを振り返った。

「毎年、たくさんの雪がふのですが、ここだけは絶対に雪が積もらりません。昔からずっとそうだったようです。私どもはこれも山神様の力だと、伝え聞いています」

改めて、直久はその祠を見た。

石で出来た祠は、浸食が進みなんともみすぼらしい。こんな祠に、周りの雪を溶かす力があるとは、到底思えなかつた。

(けど、じつやつて実際に不思議な現象を目にするとなあ……信じたくもなるよな、山神さまとやらを)

重たい沈黙が、一行を取り囲んだ。

ふと、ざわざわと風が木々を揺らす音が直久の耳に届いたかと思うと、蜘蛛の糸ほどの細い木漏れ日が、織糸のように幾重にも重なつて、祠を照らしだした。

幻想的というより、物悲しい。自分の胸に寂しい気持ちが入り込んでくるようで、直久は“寂しい”以外の言葉を見つけることが出来ないでいた。

ここに、一人で取り残された生け贋の娘たちはどんな気持ちで、ここに立ち、この祠を見下ろしたのだろう。

彼女たちを思うと胸がぎりぎりと痛んだ。

沈黙を破ったのは、それまで静かに辺りを観察していたゆずるだつた。

「注連縄に紙垂しめなわ じり……そして、それは封印符か」
ゆずるは縄のすぐ下の地面を指差した。そこには一いつ枚まいぎざられただのだろう、長方形の白い紙が落ちている。

ゆずるの言葉を受け、無言で和久はその紙を拾い上げると、つなぎ合わせた。切片はぴたりと一致する。

よく見ると、朱字で“封”と書かれているのが、かねて読めた。

「この祠は、神を崇めるといつよりも……ここに閉じ込めているといふわけですね」

オーナーを振り返り、返事をまつ和久。だが、オーナーは困った顔をした。そして、詳しいことは知らないのだと言つ。

本当に何も聞かされていないのだろう。直久の耳には、彼が嘘をついているようには見えなかつた。

「では、この祠について、知っていることを全て教えていただけますか？」

和久の言葉には、柔らかく微笑みをたたえていても、有無を言わ

さぬところがある。

「わかりました」

僅かに戸惑つたようにも見えたオーナーだったが、ついには深くうなずき、和久を見つめ返した。その表情には、覚悟がにじんでいる。

「かつて、生け贋は、ここまで村人に付き添われてやつてきました。

そして、こここの祠のすぐ向こうの崖から、神にその身を捧げます」

「……捧げるって」

直久は恐る恐る聞いた。先ほど弟から鬼に身を“捧げる”ご先祖様の話を聞いたばかり。少々過敏になつても仕方の無いことだつた。

「つまり、崖から飛び降りります」

「そ、そのあと食べられたりとかしないですよねっ！？」

「は？」

オーナーは訝しげな顔で、直久を見た。

「あ、いや、なんでもないテス……」

直久が引き下がつたので、オーナーはとくに気に留めずに、改めて祠を見やつた。

そして、手を合わせ、持つてきたオニギリを一つを供え、かわりに、昨日お供えしたのだろう、硬くなつてしまつた古いおにぎりをしまい込む。

直久はそんなオーナーにつられて、そつと手を合わせる。だが、和久とゆずるは違つた。ゆずるは刺すような視線で祠を睨み、和久はしきりに周囲を気にするように視線を泳がしている。

「さあ、戻りましょう

気が済んだのか、すつきりとした顔のオーナーが三人を振り返つた。

直久は、異議なしと、「クククと首を縦に振つた。

寒いし、薄暗いし、不気味だ。それに山の天氣は変わりやすいと聞く。とつとと帰ろう。今すぐ帰ろう。帰つて、あつたかいコタツに入り、みかんが食べたい。

(ペニションに「タツがないのが残念すぎるっ!!　なんで洋風なんだつ。冬は「タツとみかんだつつ

勝手に鼻息を荒くしていると、隣にいた和久がぽつりとつぶやいた。

「椿……」

今度は何だ。

そう思つたのは直久だけではなく、オーナーもだつたらしい。オーナーはぎくりと体を硬直させた。

一般人や直久が言うのではなく、和久やゆづるが口にすると、たゞえ植物の名前だったとしても、ひどく危険で、禍々しいもののような気がしてしまつ。

直久は、若干、怖気つきながらも周囲を見渡した。それで、初めて祠の周囲に真っ赤な花が咲き乱れ正在ことに気がついた。

「寒椿か……」

椿は普通その名の通りに、春に咲く花を付けるが、他の草木が枯れる真冬に鮮やかに咲くものもある。それを寒椿と呼ぶ。

園芸にも華道にもまつたく興味のない直久だとて、名前ぐらいは知つていた。

(寒椿)

なんと美しい花なのだろう。

美しきで、吸い込まれそうだ。

(妖艶つてこいつのことと言つのかな……うん、オレ今すごい頭よさげじゃね?)

直久が自己陶酔していると、ぱつと和久が彼を振り返り、にっこりと笑つた。そして、オーナーに向くなおる。

「帰りましょウ」

「椿は、不吉な花だとされているんだ。彼岸花に匹敵するくらいね」

帰り道、やはり和久は小声になつた。

兄が、椿がどうした、としつこく聞くのでオーナーに心配させないよう十分に配慮しながら、話をしなくてはならない。

「ふ、不吉？」

思わず聞き返した兄に、和久はこくりとうなずく。

「彼岸花は知つていてるよね？」まんじゅしゃげ曼珠沙華とも言つナゾ

「昔、墓地とかによく咲いてるヤツだろ？」

期待通りの答えに、和久はにんまりと顔を緩ませ、首を縦に動かした。

彼岸花。その名の通り、お彼岸の時期に咲く花だ。別の説には、毒を持つこの美しい花を食べた後は“彼岸（死）”しかない、ということからその名がついた、とされる。

「死人花、地獄花、幽霊花、なんていろんな別名を持つてるくらい、不吉だといわれている花なんだ」

「毒があったのか……綺麗な華には毒がある……綺麗な女は猛毒を吐く……」

急に、思いつめたような顔で兄がぶつぶつと言い出した。

「……どうしたの？ 何の話？」

「我が家の中の姉君の話。暴君とも言つ……」

「…………」

ほぼ同時に双子の頭を、『己の道に立ちふさがるもの全てをなぎ倒して突き進む、天下無敵の女性』が高笑いしている様子がよぎり、畏ろしさ無言になる。いや、怖ろしさか。はたまた、身の危険とも言つだらう。

「そ、そんなことより、椿は？」

「そ、そうだね、えっと椿は……」

椿は一見、可愛らしい印象すら受ける赤や白の花である。不吉なこと死とは結びつかないようと思われがちだ。

「人が死ぬ瞬間を表現するのに使われやすい植物、それが椿の花なんだ。椿の花って、咲きると花の部分がそのままの形で落ちるでしょう。ポトリって。その様子まるで、首が落ちるみたいだつて言うんだよ」

「誰がそんな不吉なことを一つ！」

「知らないよ。昔からそう言うの。 で、その椿の花が落ちるシンボンがあつたら、首を刎ねられて死んだんだなあ、と想像させる演出に使われているわけ」

「ひいいいい！」

息を吸い込むようにして、声を出さないよう悲鳴を上げる兄は、本当に器用だと思う。そして、ほほえましい。ここまで素直な気持ちを表に出せるのが和久にはつらやましくもある。

「それより

後ろからゆずるが声をかけてきた。

条件反射のようにゆづるを見返す直久の姿に少々目を丸めながら、和久もゆづるを振り返った。

「あの祠……」

ゆづるがちらりとオーナーに視線を送った。その瞳に、かすかに思いやりの心が見え隠れしているようにもみえる。

「うん。 ゆづるも何か感じたの？」

「いや。俺は今日は……」

ゆづるは口惜しそうに舌打ちすると、すっと目を伏せた。

今日は新月。

まるで月の光のように満ち欠けするゆづるの靈力。

夜空で身を潜める新月のように、ゆづるの強い靈力は、その一切が体の奥底で眠りにつく日だ。

つまり今日一日だけは、ゆづるは靈力を持たない一般人となる。「どうか。 しようがないよ、今日は。でも、ゆづるの想像通りだよ」あの祠にはもう……。

和久の目がゆづるにそう語った時、一人、相変わらず、わけが分

かつていなない直久は「何だ何だ？」と二人の顔を交互に見比べている。

和久は、いつものように、兄に向き直り懇切丁寧に説明し始めた。「あの祠の主は、もうあそこにはいないんだ」「いない？　あの祠の主が？」

「あの山の神といつてたね、オーナーは」そこでやつと兄は言葉を飲み込んだようで、目を丸々と見開いた。「ど、どこいつちやつたんだよつ！　だつて、オーナー一生懸命毎日拝んでるんだろう？　留守なのに拝んでるわけ、雪かきまでして！？」

「うん……」

だから、とてもオーナーには言えなかつた。

あなたが毎日娘のために祈つてゐる神は、そこにはいない、とは。「絶対に秘密にしておいた方がいいよな」

直久は、小声で確認する。

「そうだね。たぶん、オーナーの最後の頼みの綱　心の支えになつていると思うんだ」

和久は、申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、先頭を行くオーナーの背中を見つめた。

「でもよ、その神様はどこへ行つたんだ？」

「さあな」

直久の当然の疑問に答えたのは、珍しくゆづるだつた。ゆづるは小さくため息をついてから、面倒だな、と言つた。

「生け贋を捧げられていた程だ。よほど力を持つたヤツだらつたしかに、と和久は思つた。

今、完全に力を失つてゐるゆづるには分からなかつただろうが、あの誰もいなはずの祠に和久は何者かの気配を感じていた。

それはおそらく、祠の主である『神』の残像に違ひない。その残像だけで、祠の周りの雪を溶かすほどのエネルギーを保つことができているのだから、本体の力の強さは計り知れない。

できれば、かかわらずに済ませたい。

こちらがちよつかいを出さなければ、向こうからわざわざかまつてくることはないだろう。

よほど興味をそそられるものが、ない限りは……。

(ただ……)

和久は顎に手をやり、難しい顔になつた。

(あの祠が屋敷に影響を及ぼしているのは確實なんだよな……まいつたなあ……)

和久が押し黙つたので、直久も何となく黙つていなくてはならぬと思つたようだ。すると会話がなくなるのがこの三人の特徴だ。誰もが口を閉ざしたまま、山を降りきり、森を抜けると、ベンシヨンという名の伏魔殿が三人の前に仁王立ちするかのように、その姿を現した。

「とにかく……もう一度

和久が兄と従兄弟に向かい言葉を続けようとした時だつた。

(――!?)

背後に、射抜かれそうなほど強い靈気を感じたのだ。

和久は、険しい表情で、ぱつと体をひねり、屋敷の二階を見上げる。窓に映し出された人影を見とめ、睨みつけた。

数秒の後、人影はすっと窓から消えた。

(……あそここの部屋は確か……息子さんの……)

でも、なぜ。

これほどの強い靈力をあの部屋から感じるなんて。あの部屋はいつたい。

「どうした?」

兄が和久の様子に、何だぞうした、と従兄弟と顔を見合せている。

「わからない……」

ただ、今ではつきりしたことがある。

さつきの視線に含まれていたのは、靈氣。

あの部屋には、何かがいる　この世のものでない何者かが

「もう一度」

和久は三階の舜の部屋を再び睨みつけながら言葉を続けた。

「あの二つの部屋を、調べる必要があるみたい」

。

第九話 僕にかまうな（1）

「ちょっといいですか」

直久は、屋敷のエントランスに足を踏み入れたちょうどその時、背後で和久がそう言うのを聞いた。振り返ると、和久がまっすぐな視線をオーナーに向いている。

（な、なんか切羽つまつてない……？）

和久の声色は柔らかだし、物腰も落ちている。だが、どことなく緊迫感を含んだ笑顔に、生まれたときから一緒にいる双子の兄は、ただならぬものを感じ取っていた。

「わかりました。どうぞこちらへ」

オーナーの顔にも、緊張の色が浮かぶ。

案内されるまま、応接間へと足を進めようとした時、双子をゆづるが引き止めた。

「悪い。あとは任せる」

そう言つて客室に戻ろうとするゆづるの顔は真っ青だ。

ひどく具合が悪そだなと、直久が思つた瞬間、ぐらりとゆづるの体が揺れた。すかさず、和久が両手を差し出し、体を支えてやる。

「大丈夫？」

優しく声をかけ、ゆづるを覗き込む和久の顔は、心配そのものだつた。

だが、ゆづるは乱暴にその手を振り払い、自力で客室に戻ろうとする。

「俺にかまくなつ」

「…………」

和久はそれ以上強く言わず、ゆづるの背中を無言で見送った。そんな弟を見守りつつ、ゆづるを見みつける直久。

和久がこんなに心配してくれているというのに。

人の厚意を一切受け取らない、むしろ、ゆづるのために良か

れと思つて接してくる相手を「」でも見るかのように扱う態度も気に入らない。

「……無理して山を登つたから……ちょっと休めばまた良くなるよ」
そう言つて直久を振り返つたその顔は、困惑と寂しさが入り混じつているようにも見えた。

「さ、行こう。僕たちはやることをやろう」

和久は顔を引き締め、応接間へと足を踏み入れる。直久も、今にも噴出しそうな憤りを何とか飲み込み、和久に倣つた。

二人がふかふかソファーに腰掛けるなり、和久はすぐさま本題に入る。

「单刀直入にお聞きします。息子さんのこと教えてください」

「……え？」

オーナーはきょとんとした顔で、聞き返した。

(え?)

予想外の反応に、驚いたのは直久だけではなかつた。思わず弟の顔を見ると、弟も眉を寄せている。

「息子さん 瞬さんとおっしゃいましたか。三階にいらっしゃると聞きました。まだ一度もお会いしたことがないので」紹介いただきければと思ったのですが

もう一度、和久が事実を確かめるように問つ。

だが、オーナーは首をかしげ、わけがわからぬ」というように鶴返しする。

「息子? 私ですか?」

「……はい」

「……私には娘しかおりませんが……」

心底、不思議そうな顔で、オーナーはそう言い切つた。

「え! ?」

驚きの声を上げたのは、直久だつた。

「だつて、八重ちゃんがお兄さんがいるって言つてましたよ? 足が悪いから部屋に籠もつてゐて……」

「八重が？」

とたんに、オーナーは眉をひそめ訝しそうに顔をゆがめた。

「なぜあの子はそんな嘘を……。すみません。どうやら、娘が混乱させてしまつようなことを言つたようですね」

「……え、でもっ！　八重ちゃんが嘘をついてるよつてことは」

「直ちゃん」

納得のいかない直久を、弟が制した。

何で止めるんだよ、と憤りを感じながら弟を振り返る。すると、静かに首を横に振り自分を見つめる弟に、ぐつと言葉を飲み込まざるを得なかつた。彼の眼光に圧倒されたのだ。

「……瞬という名に覚えは？」

「ありません」

きつぱりとオーナーは返事をした。

彼の態度から、嘘は微塵も感じない。でも、確かに八重の言葉にも嘘は感じなかつた。

（いつたいどうなつてるんだ……）

応接間を後にするなり、弟は無言で階段を上り始めた。直久もそれに続く。

「どうじゅう」とだよ

「……おそらくだけど」

二人は一階の踊り場を大股でやり過ごす。

「三階にいるのは」

一階につき、和久の足はさらに上階へと加速する。

「人ならぬ、強靭な靈力を持つ
ついに、一人は駆け出していた。」

全速力で、三階の廊下を直進し、その部屋の一メートルほど手前へと辿りついた時には、ぜいぜいと息は上がりてしまう。

「あの祠の主だ」

(一)

和久の言葉に直久はぎょっとなったわけではなかつた。
触れただけで、全てを凍らせてしまうのではないかと思うほどの冷たい空気が、その部屋の扉から溢れ出ているのが“見えた”のだ。
明らかにその空気は周りとは違う。灰色の煙のように、うねり、揺らめき、それでいて上昇するわけでもなく、下部に留まり続けている。明らかに不自然だった。

もしかすると、これが靈氣というもののなのだろうか。

直久は思わず、ごくりと唾を飲み込んだ。

話に聞くだけだった異形の世界を目の当たりにして、明らかに自分の中の変化を実感する。

昨日までの自分とは違つ。

何がが変わつてしまつた。

今まで、何度も触れたかつた世界だったといつのに、自分の変化がどこか恐ろしい。

このまま、自分はどうなつていくのだろうか。

本当に喜ばしいことなのだろうか。

一族のみんなの仲間になれた、それだけで済むのだろうか。

「もしかして、直ちゃん、あの靈気が見えてるの？」

和久の声で、直久は我に返つた。

「灰色っぽい煙みたいなヤツのことか

「本当に見えているんだね」

和久のことだ、直久の能力について疑つていたわけではないのだろうが、今まで何の能力も見せなかつた直久に見慣れていたので、ものめずらしいというところだろう。

本当に、なぜ急にこのような状態になつたのか。本人も皆田検討もつかない。

「とりあえず、そのことは後でゆっくり考えよう。お祖父様に聞いた方がいいかも」

「じじいに？」

条件反射的に直久の顔が引きつった。

双子の祖父は、ゆずるの祖父でもある。つまりは一族の頂点に立つ、九堂家当主のことである。

「何でそこで嫌そうな顔するかなあ？ お祖父様に一番可愛がられているのって、直ちゃんでしょ」

「ばばあには、嫌われてるけどな」

「そんなこと」

和久は、最後まで言葉を紡ぐことができないようだつた。無いとは言い切れない微妙な事実に、和久も思い当たつたのだろう。

それもそのはず。

祖母は、なぜか直久を自分から遠ざけようとする。恐ろしいものを見るような目で。

本人の被害妄想ではなく、意識過剰でもない、周知の事実なのだから。

直久も、幼いころはそのことで、胸を痛めたことも少なくなかつたが、もう慣れた。それに、今ではあまり本家に近づかないようにしているために、祖母と接触することもほとんど無い。

「とにかく、その話は後にしよう。行くよ」

「よしつ！」

和久を先頭に、一步また一步、扉へ近づけつつ、三歩田の足を踏み出そうとした、その時だつた。

(――!)

ぴたりと、直久の足が止まつた。声を発したわけでもないのに、気配を察したのか、和久ががばりと直久を振り返つた。

「どうしたの？」

「……動けねえー」

「え？」

直久は顔を引きつらせ、切々に現在の状況を訴えた。

両足共に、石化したのではないかと錯覚するくらい、硬直している。

動かないのだ。自分の意思では、首から下を動かすことができない。

だが、弟は分かつてくれていない。ふう、とため息をついて、兄をたしなめるような言い方をした。

「何、遊んでるの？　こんな時に」

「遊んでない、遊んでない。マジ動けないって」

「ホントに動けないの？」

「うんうん。蜘蛛の巣に引っかかった蝶々って感じ。もしくは、ゴキブリっぽいに捕まったゴキブリ」

「……たぶん、直ちゃんなら後者だね。ちょっと待つて」
和久はきりりと顔を引き締め、両手を胸の前で合わせると、数秒、目を閉じた。そして、ぱちりと目を開けたかと思つと、直久の回りを見渡す。

再びため息を吐きながら、手を元に戻した頃には、和久の顔に新たな緊張が生じていよいよつだつた。

「結界が張つてあるよ」

「結界？」

「それも捕獲用の……」

「なんだそれ？」

「簡単に言つと、罠みたいなもの。悪霊とか妖怪専用の罠だから普通、人間は掛からないはずなんだけど」

「なんで俺、掛かつてんだよ！」

「……なんでだろう？」

こんな時に、弟は暢気に腕を組んで、考え込み始めたので、直久はたまらない。

「なんでもいいから、早く助けてくれよ……」

情けない声を出す直久。だが、弟は申し訳なさそうに頭を振るだ

けた
た

「結界を張つた本人にしか解けないんだよ。あとは掛かつた者が結界を張つた者の力を上まる力で破るか、第三者が圧倒的な力で破るか……。さつき直ちゃんが蜘蛛の巣に掛かつたゴキブリみたいつて

「ゴキブリじゃなくって、蝶

「それにしても、ゴキブリって蜘蛛の巣に掛かるんだろ？」「

「それは、ついでに議論は置いといて、一まいね。第三者が絶界を破るには、例えば、人間が蜘蛛の巣を破るくらいの力の差が必要なんだ。蜘蛛と人間くらいの差だよ。絶好調のゆづるなら何とかなるかも知れないけど、今、絶不調だし、僕には無理。この結界を張つた人かなりの力の持ち主だと思うよ」

「じゃあ、どうすんだよ。」

直久は大声を張り上げた、その時だつた。

ギイイイイイイ
.....

金属をこすり合わせたような音が、三階全体の空気を切り裂いた。ほぼ同時に、和久が弾かれたように振り返って、身構えた。直久も田を見張る。

(あれ?
扇が開いてる?
)

よく見れば、問題の部屋の扉が、わずかに開いているではないか。廊下には自分たちしかいない。その自分たちでなければ、この扉を開けたのは……誰だ！？

(中に誰かいるのか!?)

食い入るように直久はその扉を見た。

れ出し、廊下を満たしていく。まるで灰色のガスに氣化していくドラマ
アイスを見ているようだ。自分の膝下は、靈氣で完全に視野から
消えた。

「誰か来る……足音が近づいてくる」

かすれた声で、和久が言つた。

足音？

直久は耳を研ぎ澄ました。だが、何も聞こえない。

ただ、徐々に自分を取り巻く空気が、冷えていくのを肌で感じる。口から出る息も白い。まるで、三階全体が大きな冷凍庫になつてしまつたように。

7

バンッと激しい音をたて、完全に開け放たれた扉。同時に、体が吹き飛ぶのではないかと思われる衝撃波が、二人を襲う。首から下が硬直している直久は、難なくその冷たい靈気の衝撃波をやりすごしたが、和久はすさまじい風圧に、足を一、二歩後退させられてしまう。

先ほどまでとは、桁外れの靈氣だった。

今の直久なら、それが分かる。そのすごさが。

鳥肌が立つた。だが、不思議と恐怖はない。

こんなにも、脅威的な靈気を放つ相手を前にしているところの、胸が高鳴つて一
呼吸する。

自分の中で、確実に何かが目覚めようとしている気がした。

「何やつじや

それは、若い青年のような、澄んだ声だった。

直久も和久も開け放たれた扉の先にいる人影を見据えた。

初めて見るその青年だった。長くサラサラと揺れる亜麻色の髪を持つ、背の高い青年は、切れ長のグレーの目で、いまだ動けずにいる直久を見上げて、ふつと笑つたのだった……。

俺にかまつな（2）

「あなたがあの結界を張ったんですか？」

和久は、男に隙を見せまいとしつつ、疑問をぶつけた。だが、答

えは聞くまでもない。そして、男も答えるつもりはなさそうだ。

「……ほう。そなたたちには、アレが見えておるのか」

面白いものを見つけたというように、男がじろじろと直久を見る。そして、不気味な笑みを浮かべ出した。

「それにしても、面白いモノが掛かったものよ」

男は、ついに、くくく、と声を出して笑ったかと思うと、すっと片手を僅かに上げた。途端に、直久の体がぐらりとゆれ、床に崩れ落ちる

「直ちゃんつ！？」

何かされたのかと、肝を冷やし、和久は声を荒げた。

「縛を解いてやつただけじゃ」

明らかにからかうような声で、男が言った。

あの強力な結界を、たつた一瞬で解くことができるということか。自分との力の差をさまざまと見せ付けられ、和久は体の震えを止めることができない。

「……どうした？ 我に用があつて参つたのではないか？」

くくく、と笑いながら、男は部屋の中へと戻つていった。

これほどの力の差を見せつけられてたあとでは、部屋に入れ、と命じられたのと等しい。

和久は、床の上に尻餅をついたままの兄に田配せした。静かに兄は立ち上がり、自由になつた体を確かめるように手首、足首を回してから、こちらを見て頷く。兄の体の異常はなさそうだ。

内心ほつとしつつ、視線を部屋へと戻した。

そのまま部屋に入つて大丈夫なのか。

異ではないのか。

相手の正体も、その狙いもわからない状況では、判断がつかない。もし、相手が殺意を見せた時、自分ひとりで兄を守れる自信がない。いや、無理だろ。自分の靈力の範疇を明らかに越えている。しかし、断り相手の機嫌を損ねるのも利口とは言えまい。味方につけることができずとも、せめて敵にしないように、逆鱗に触れぬようにしなくてはならない。

そのために、『これからあなたの縄張りで、悪靈と一緒に戦えるけど、気にしないでね。やつつけたら、さっさと帰るから』と、悪靈討伐の許可をもらつておくのが得策だろ。誰だって、自分の家の庭で、猫と犬が取つ組み合ひの喧嘩を始めたら、うるやく思つものだ。

覚悟を決め、ぎりっと唇を噛みしめた和久は、兄に田で合図し、部屋の中へと足を進めたのだった。

部屋の中は、意外にも片付いていた。明らかに掃除され、カーテンやベッドカバー、クッショングやソファーにいたるまで、清潔が十分に保たれている。

どういうことだ。

やはり、オーナーはこの部屋に、この男がいることを容認し、世話をしているということだろうか。だが、彼が八重の言う“兄”であることはない。確かにヒトの形をしてるが、人ではないことは明らかだ。

「あなたは……何者ですか？」

和久の声は、かすれた。

「我が家に問うたのだがのう」

面倒くさそうに、男は言う。だが、和久も引き下がらない。

「なぜ八重ちゃんは、あなたが見えるのですか。あの子はあなたを“瞬”という名の兄だと言つた」

「八重……おう、あの娘か」

口端を少し上げ、男はにやりと笑つた。そして、高そうな皮製のソファーにその長身を沈めた。

「まあ、よい。結界を見破つたことに免じて、答えてやるかのう」「あなたは、あの祠の主、山神 そうですね？」

ごくりと、喉がなる音がした。和久のではない。すぐ隣にいる兄のものだろう。いや、自分のだつたかもしれない。

そう混乱するくらい、和久は自分が緊張していることに、気がついた。

「山神か……そうじゃのう、ついこの前までは、我をそう呼ぶ人間もいたのう」

「やつぱり、あの祠の主のかつ！…」

怖いもの知らずの直久は、あろうことに山神を人差し指で、びしつと指差した。

和久はぎょっとして、思わずその兄の腕を叩き下ろした。まるでハエ叩きでもするように。

「ちょ、ちょつと直ちゃん！！ 神様だつてばだからっ！…」

「いつてえつ。何だよ、カズつ！…」

二人は同時に大きな声を上げた。

「あ、そうか。神様つてエライのか」

「エライつていうか……」

和久は口ごもつた。

兄はわかっていない。

神がどれほど恐ろしいか。

神といふものを敵に回すといふことが、どれほど愚かなことであるのか。

神は、気まぐれに人を助け、暇だからという理由で人の命を奪う。そして、一度機嫌を損なえば、自分の命は愚か、末代まで祟られる。（出来れば……かわりたくなかつたのに……）

そんな和久の心配をよそに、無敵の直久はさらに和久の度肝を抜

くよつなことを言つ。

「ていうかさ、神様なんだつあんた。こんなとこで何してんだよ
「な、直ちゃんつー！」

しかし、自分を畏れずにまっすぐぶつかつてくる直久が珍しいのか、山神は笑顔を崩さずに返事をする。

「この家の娘が、我を解き放つた。その礼に、この家で悪さをして
いる輩ヤカラを始末してやろうと思つたのじや」

「娘……？ ハ重ちゃんか？」

「今はその娘に、少し細工をして、ここを住みかとしておる。なあに、余興の一つと思うて、娘に世話をさせておつたら、なかなか甲斐甲斐しいものでのつ。ほんに、ヒトとは、けな氣なものよ

そう言つて、ふふ、つと山神は笑つた。

なるほど、と和久は思つた。

きつと、姉のよしのを心配したハ重が、祠に祈りを捧げに行き、何かの拍子に祠の封印を解いてしまつたのだろう。久しぶりに自由の身となつた山神は、礼としてハ重の願いを聞いてやろうとしているのだ。つまり、この屋敷に住み着く悪靈と化した、生け贋の少女たちを始末してやろう、と。

「ということは……結界で捕らえようとしていたのは、生け贖になつた少女の靈」

和久は、確認するように山神を見つめた。

「予定外のモノが掛かつたがな」

再び、くくく、と山神が笑い始める。それにカチンときたのか、直久は山神に食つて掛かつた。

「ほほ～。あんた、良い神様なんだな。よおく分かつた。分かつたが、分からん！！」

もはや何でもありだ。和久は、頭痛を覚え、額を手で押された。兄の無謀さも、ここまでいくと、尊敬の念すら生じるというものだ。「何で、靈ホイホイの結界に、オレが引っ掛かるんだよ。もつと、ちゃんとした結界を作れよ、神様だろうあんた」

「靈ホイホイ……くくくくく……」

我慢の限界というよに、山神はついに体をくの字に折り曲げて笑い出した。

「な、直ちゃん、失礼すぎぬ……」

「そうか？ 失礼なのはそつちだらう。オレが何で悪靈と間違えられなきやなんねえーんだよ。どつからどう見ても、オレは善良な一般ピーピるだらうが」

「一般ピーピる……どこがだらう……」

「まあ、運動能力は天才的だけどな」

自信満々に、胸を反らす兄に、小さくため息もつきたくなる。だが、そんな直久を、山神はますます氣に入つたようだつた。

「そうじやのう。わびに、そこに一つ教えてやるう」

山神はまっすぐに直久を見た。そして、少しだけ右へと視線をずらす。

「我的結界が粗悪だつたのではない。そのその器の中で飼つておるモノに、結界が反応したのじや」

「はあ！？」

「！？」

二人は同時に眉を寄せた。

「どういう事ですか？」

「なんだ、何をそんなに驚いてある。そもそも飼つてあるではないか」

山神は和久を顎でしゃくり示した。

(僕が飼つてる……？)

思い当たるものといえば、蛇の式神『雲居^{くもい}』。

確かに雲居は普段和久の体内にいる。いると言つても正確に体のどの部分に収納している、というわけではない。多くの式神を所有する者は全ての式神を体内に入れておけないので、石など物体の中に入れておいたり、必要としている時だけ呼び寄せるなど形を取ることもあるが。いつも影のよに、傍らにあるのが式神である。(まさか……)

和久は恐る恐る、山神に尋ねた。

「兄も……式神を持つていると？」

「それをそちたちが式神と呼ぶのならば、そうなのであらう。されど、見たところ、そちたちに御しえる類のものではないように思うが」

「まさか……そんなことが？」

ありえない。

式神を自分の使役とするには、一度は式神と対峙しなくてはならない。それは、式神が主と認めるほどに強い靈力者に仕えるからである。

和久も雲居を使役するために、深手を負うほどの大鬪を制したのだ。

つまり、ある日突然、式神が体内にいました、などということは有り得ないのである。それなのに、靈力を持っていなかつた兄が、気がつかないうちに、しかも、御し得ないほどの強力な式神を使役することができるはずがないのだ。

「なんだよ？ どういうことだよ？」

直久が不安そうに和久を見た。

「僕にも分からぬ」

もし、兄の体内に何かがいるとしたら、それは式神などではない。そんな有益なものなら、どんなにいいだろう。

だが、おそらく、居るのはそれと相反するもの。しかも、自分やゆづるがまったく気配を察することができないほどの、強大な力をもつモノ。

どちらにしても、山神が言つよう、自分では太刀打ちできない。

「兄に害はないのでしょうか？ そんなモノが体内にいて、兄は丈夫なんでしょうか？」

不安に、語尾が震えた。

しかし、思い悩む和久に、山神は意外にも優しく笑いかけた。彼は、この時初めて、和久に笑顔を向けた。

山神に自分の存在を認められたような気がして、不思議と落ち着いた気分になつていいのが分かる。

「害は無いじや るつ 今のところはな」

「今のところ?」

「どうやら封印を施されているようだ。だが、解けかかっている。ごくわずかだが……そやつから妖気が感じられる」

「妖氣!?」

「おそらく、その妖気が我の結界に掛かつたのだろつて」和久は愕然とした。

すぐに、全てを飲み込むことはできない。でも真実に違ひない。神が嘘をつくことはない。真実を全て言わないことはあっても。「なあ、何の話かさっぱりわかんないんだけど」

実際に申し訳なさそうに、説明を求める兄を完全無視して、和久は腕を組んで考え込みだした。

(妖氣……直ちゃんから……)

何か邪悪なものが、兄の体内の奥底に潜んでいるのだ。

それに、一つ引っかかることがある。さつきから、封印が施されている、という山神の言葉が、和久の心をざわめき立たせていた。凶惡なモノを封印できるほどの、力の持ち主を、和久は多くは知らない。

(……本家は、まさか、このことを知つて……いる?)

その時、和久の視界がゆらりと揺れた。否、目の前の空間が歪んだのだ。はつと我に返る和久。

『ぬじどの
主殿』

女性の澄んだ声が聞こえたかと思うと、すつーっと姿を現したのは和久の式神、雲居だった。平安時代の姫を思わせる着物姿をしているのが特徴だ。

だが、鮮やかな紅色着物よりも、目を惹くのは彼女の長く流れる

銀髪だらり。そよ風が吹くだけで、キラキラと輝き、思わず手を伸ばしたくなる美しさだ。和久が直久にいつも自慢するように、絶世の美女と表現するのが適切であろう。だが、いつも無表情なため、どこか冷たい感じがする美人である。

和久は雲居から知らせを受けると、一瞬にして青ざめる。

「直ちゃん、ゆするが危ない！」

俺にかまつな（3）

直久が弟の言葉を聞き返そうと思つた瞬間、視界から和久が消えた。

「！」

素早く首をひねり、部屋中を二六〇度見渡すも、弟の姿はビニにも見当たらない。

直久は一呼吸おいて、心を落ち着かせる。

大丈夫だ。心配することはない。

姿を消す前に、弟は、ゆづるがビニのいつのと言つていた。式神の雲居から一報を得て、とっさに一階の客室へ瞬間移動したのだろう。

瞬間移動　直久の一族のうち和久クラスの能力者では、よく使われる能力で、靈力の強い者は瞬時に地球の反対側へ移動できるらしい。鉄道、船舶、航空会社の敵であり、実に便利で非科学的な力だ。

だが、いくら直久が何度も瞬間移動を図にするとはいえ、「瞬間移動するから！」とか宣言してから行つてほしい、といつも思う。突然、消えないでほしい。

「ほう。そなたたちはそのようなこともできるのか。ほんに、面白いのう」

ニヤニヤと笑みを浮かべ、足を組み偉そうにソファーにふんぞり返りながら、山神が言った。

そんな山神の方をぎろりと見ただけで、直久は返事をするつもりはなかった。すぐさま和久を追つてゆづるのところに行かねば、という気持ちで頭がいっぱいだつたからだ。

しかし、今にも全力で走りだそうとしていた直久を、山神が「待て」の一言で止める。彼の言葉は、まるでそれ自身が威力を持つかのように、直久の足をその場に縛り付けた。

「何なんだよつ！－ オレも助けに行かなきゃなんねーんだよつ！」

苛立ちを隠さずには声を荒げる直久に、彼は飄々とした表示で、涼しげな視線を返してきた。何をそんなに慌てているのだ、愚かなことよ。その視線がそう言つていた。

直久がぎりりと歯を食いしばると、彼は口元をにやりとゆがませ、すうすうと流れるような仕草で、片手を肩まで挙げた。

「この方が早い」

山神がそう言い終えるが早いか、天井から何かが落ちてきた。しかも、直久の真上に。当然、直久は落下物の衝撃で、バランスを崩し、ドサリと音を立てて床に倒れこむ。

「いてててて……」

軽く床にぶつけた後頭部を抑えながら、半身を起こそうとした時、目の前に誰かの足の裏が見えた。

「うわっ！　え、ゆずるつ！？」

ぎょっとなった直久は、自分のすぐ横に折り重なるようにして倒れているゆずると和久に詰め寄る。

「大丈夫……突然、ものすごい力で上に引っ張られたからびっくりしたけど……」

半身を起こした和久が、そう言いながら山神の方を見た。

「山神さまが、こっちに僕らを呼んでくれたんだろう」

(そうか、それでさつき、『こっちのが早い』って言つてたんだな)直久が一階のゆずるの部屋に駆けつけるより、一階の一人を三階のこの部屋に瞬間移動させたほうが『早い』という意味だったのだ。(そしたらそつと、ちゃんと説明しろつて、だから！　てか、だいたい何でオレの上に落つことすんだよ……オレはクッションかつうのつ！－)

直久は山神を睨んだ。そんな直久の視線を、山神は軽くあしらうように笑う。あくまでも、直久をおちょくろつということらしい。うすら笑いを浮かべる彼の憎らしい顔が、ますます直久の敵意に油

を注いでいく。

「気にいらねえな……」

ぼそりとつぶやいた直久の声を受けて、和久が再び直久を振り返り、力なく笑いかける。

「でも……正直助かつたかな……」

そう言って和久は、ゆっくり首を動かし、ゆづるに劳わりの視線を送った。つられて、ゆづるを見やつた直久は、その痛々しい姿に釘付けになる。

(……ゆづる……)

ゆづるは、昨夜の悪霊の襲撃時のように、ぐったりとしていて意識がない。そればかりか、肩で息をして苦しそうに眉をしかめ、額には汗が噴出し頬まで伝っている。何も知らない人が見れば、高熱にうなされていると勘違いしただろう。

だが、それが風邪の症状でないのは、あきらかだ。ゆづるの顔は死人のように土気色をしていた。

きっと、救出がもう少し遅かったなら、このままゆづるは息を引き取り、本物の死人と化していただろう。今のゆづるの様子から、ただの死した細胞の塊となってしまったその姿が容易に想像でき、胸が痛んだ。

「そやつを心配している余裕はないと思つがのう。早う何とかせぬと、そなたたちも同じ運命をたどるじゃうつて」

くくく……。

まるで、山神の笑い声が部屋を寒々しくさせていくようだった。

直久の腕に鳥肌が駆け上がる。

凍えそうなほど寒い。

なぜ、急に。

(……この感覚……あの時と一緒に……)

直久がごくりと唾を飲み込んだ時だった。何かを感じ取った和久

が、勢いよく立ち上がったかと思うと、一瞬で廊下の方に向き直り、臨戦態勢をとる。慌てて立ち上がった直久も、和久の見据える方向へと視線を這わした。

開け放された部屋の扉の向こうには、まっすぐに続く廊下が奥の階段付近まではつきり見渡せた。

廊下の両壁飾られた、同じ大きさのはずの少女たちの肖像画が、だんだんと小さくなつていいくつに目に映る。まるで廊下の長さを不気味に強調させるように。

だが、それ以外のものは見えない。何の異常もない。

それでも、この凍てつくような寒さは間違になく悪霊が近くにいる証。

(どこだ！ どつからきやがるつ！…)

直久はじつと目を凝らした。口の中が乾いて、喉の奥がひりひりする。

「来る」

和久の声が、音の無い部屋に重く響いた。その瞬間、部屋の入り口の五メートル程先の床が黒く盛り上がつたように見えた。

直久は思わず、目をしばたいた。見間違いかと思ったのだ。

だが、その盛り上がりは、ゆっくりと大きくなつていく。

「……」

直久の背中を、一滴の冷たい汗が流れていった。それを合図に、体中の皮膚が、ざわめくように鳥肌を立たせていく。

その間も、盛り上がりは床から大きく伸び、ギョロリと見開かれた二つの目が姿を現した。

その血走った目が直久を一瞬とらえた。心臓がとまるかと思つた。

だが、直久では悪霊のお眼鏡にかなわなかつたらしい。生氣を吸い尽くされそうなほど恐ろしいその視線は、直久から外され、和久を素通りし、ゆづるのところでぴたりととまる。

大きく裂けた真っ赤な悪霊の口がゆっくりと床から現れ、だんだんと口端が上がり、不気味にゆがんでいった。

見ツケタ……。

そこからは、一瞬だつた。

頭部に続き、首、肩、胸部、腹部、そして下半身が、一気にぬう一つと姿を現したかと思うと、悪靈はものすごいスピードでゆづる目掛けて突進してきたのだ。

(一)

とつさに、両手を打ち鳴らし、部屋に結界を張ろうとする和久。だが、悪靈はものともせずに、進入を果たす。そして、あつとう間に三人に手が届きそうな位置に来る。

直久は何も考えていなかつた。
ただ、勝手に体が動いていた。

(つ ! !)

間一髪で、ゆづると悪靈の間に体をねじ込むことに成功する。そして、必死にゆづるの体の上に覆いかぶさつた。
次の瞬間。

直久は目を見開いた。

ズズズズズ……。

不気味な音をたて、何かが直久の体内に入り込んできた。あきらかに、異物が背中から体中の骨の髓にめり込んでいくような違和感だつた。たとえよつのない不快感と体が発火しそうなほど熱さが直久の体を襲つ。

「うわああああつ！」

背を反らしたまま硬直させ、声のかぎり絶叫する直久。

「直ちゃんつ！」

血相を変えて、和久が駆け寄ろうとするも、強い力に弾き返され、床に吹き飛ばされてしまつ。

「ぐあああああああーっ！…」

耳を覆いたくなるような悲痛な直久の叫びが、部屋の空気を引き裂いていく。

体の中をぐちゃぐちゃにかき混ぜられたような気持ち悪さに、強い吐き気を覚え、息をすることも出来ない。

頭から血の気が引く音が聞こえる。

心臓の音が大きく不規則になる。

体中から汗が吹き出る。

「直ちゃんーー！ 負けちゃだめだつーー！ 直ちゃんつーー！」

遠ざかる意識の中で、そんな弟の声を聞いた気がした。だが、遅かつた。

抵抗する間もなく、直久はついに、何とかつなぎ止めていた意識とその命の炎を、吹き消された……。

「直ちゃんんーー！ 目を開けてーー！ 何でこんな……直ちゃんつーー！」

「…………カズ？」

泣き叫ぶ和久の声に、床に横たえていたゆづるが意識を取り戻したようだった。悪霊が姿を消したため、ゆづるの頬に赤みがさしており、明らかに先ほどよりも状態が良くなっている。

「…………どうした。何を泣いているんだ……」
ぽんやりとしたゆづるの視線が、ぐつたりとした直久へと移るな

り、ゆずるはがばつ、と半身を起こして、直久の顔を覗き込んだ。

「な……えー？ ど、どうして！？ 直久つ！！」

愕然として、動かなくなってしまった直久の体に手を伸ばすゆずる。その震える手が直久の頬に触れたかと思うと、ぱつと再び離れる。ゆするも、直久の体の冷たさに驚き、恐怖を覚えたに違いない。直久を永遠に失う、という恐怖を……。

そして 全ての状況を飲み込んだはずだ。

「直ちゃんが、ゆするをかばつて……」

ギロツ、とゆするが和久を睨んだ。

「そんなはずない！ この馬鹿がそんなことをするわけがないっ！」

「…………僕のせいなんだ……僕の結界では防げなくて……」

わなわなと唇を震わせ、ゆするは直久を見下ろしている。

「だつて……直久は……俺を嫌つてたはずだろ？……なのに、なんでこんなっ！！ 僕の代わりに死ぬなんて嘘だつ！！ ありえない……！」

ゆするの大きな瞳が揺れ動き、徐々に涙が溢れ出した。だが、泣くまいとするよひに、ぐつと唇をかみ締め、再び和久を睨みつけてくる。

「カズ、すぐに直久から悪霊を引き離せっ……」

「…………うん」

ゆするに領いて見せた和久だったが、靈を祓うだけの余力などなかつた。それに、靈を払ったところで、直久が息を吹き返すことはない。決して生き返らない。それはゆするにだつてわかっているはずだった。

それでも、できないなどと、今のゆするに言えなかつた。

和久の頬を汗が伝う。小刻みに震える手で印を結ぼうとした時、それまで静觀していた山神が口を挟んだ。

「やめておけ、今のそなたには無理だ。下手に靈を刺激すると、事態はよけいに悪化する。そやつが必死に守ろうとしたそなたまで、

食われるぞ」

ぎりっと、矢のような視線を、ゆずるは彼に浴びせた。どうやら、そこで初めて彼の存在に気付いたようだつた。

「黙れ、部外者っ！！」

「ゆずる、この方は山の神だよ」

「それがどうした？ 僕は九堂家次代当主だ。そこらの神々よりも強い力を持つている。だいたい、その程度の力で神だと？ 昔は、生け贋を捧げられていたらしいが、今は見る影もないではないかつ！」

「ゆずる、口が過ぎるよー」

口をがないゆずるに、和久は肝を冷やし、慌てて制した。
たしかに、ゆずるはこの山神をしのぐ力を持っているが、それは絶頂期の時の話。今日はまったく靈力をもたないのだ。そんな時に、いたずらに神に喧嘩を売つて、無事ですむわけがない。

「いや、いい」

青ざめる和久に山神は柔らかく微笑んで、ゆずるに細くした手を向ける。

「なるほど、九堂の者であつたか。靈がその身体を器にしたがるもの分かる。だが、確かに九堂家の次代ならば、そこらの神々 我などよりも強いであろうが、そなた、まことに次代か？ なにやら汚れた血の臭いがする。さては、そなた、おん」

「黙れ！」

顔を赤らめ、山神の言葉を遮るゆずる。

「それ以上言ひと、吹き飛ばす」

肩で荒々しく息をするゆずる。

山神は実に面白いものを見るかのように笑いながら、ゆっくりと首を横に振つた。

「まあよい。我にはかかわりのないことじや」

それよりも、と山神は和久の腕の中の直久に目を移す。

「そなたが次代ならば、知つていいだろ？ そやつは体内にいつ

たい何を飼つておるのだ？

「……」

ゆずるは無言で山神を睨み続けた。

「答える氣は無い、か。まあ、良い

良いのだが、そやつ、

そのままにしておつてよいのかのう？」

「ニヤニヤと笑みをたえながら含みのある言い方をする山神に、

チツとゆずるが舌打ちした。

「もつたいつけるな。何がいいたい

「やれやれ。短気じやのう」

わざとらしく山神は肩をすくめてみせた。

「そやつ、生きておるべ」

部屋に一瞬の静寂が広がる。

「何つ！？」

「えつ！？」

和久とゆずるの反応はほぼ同時だつた。

「何だ。死んだと思うておつたのか？ 確かに息はしておらぬし、心の臓も止まっておる。だが、まだ完全に死んだわけだはない」

「！？」

和久は愕然として、腕の中で冷たくなつている兄を見た。
信じられるわけが無い。いくら神の言葉だとしても。

生きている？

こんな状態で！？

あんなに強い悪霊をまともに体内に入れて、なおも兄は生きていられるというのか！？

田覚めたての僅かな靈力しかもたない、あの兄が！？

「そやつが余計なことをしているがために、死に瀕しておるが

「……どういうことですか？」

和久はまっすぐに山神を見据える。ゆずるも、今にも歯み付きそうな顔で山神を睨み上げている。

「そやつの飼つてるアヤカシが、中に入ってきた悪霊を喰らおうと

したよ「ひじや。そやつは、そのアヤカシから懸念を守りつつしておる。いやはや、まったくもつて、実に面白いのう ヒトの子といふものな……」

「ひひひひと曰神が声を出して笑つた。

「 はあ！？」

「 なんだつて！？」

和久とゆずるは、再び、同時に眉をしかめ、素つ頓狂な声を上げるしかなかつた。

俺にかまつな（4）

『直久は、ここで待つてなさい』

『なんでっ！？ ぼくも一緒にいく』

『だめだ。ここから先は、直久には入れないよ。そこで母さんと一緒に待っているんだ、いいね』

『やあっ！ ぼくも一緒にいく……』

小さい頃から、いつもそうだった。

必要とされるのはカズばっかりで、オレは何の力も持たない、『いらない子』。

なんで、神様はオレとカズを双子にしたのだ？

同じ顔。

同じ声。

同じ服を着て、同じ髪型にすれば、普通のヒトには見分けがつかない。

でも、うちの一族のやつらは違った。どんなことをしても、すぐ

に見分けてしまう。

“和久”と“その片割れ”。

自分に向けられた侮蔑の漂う顔。ため息とともに吐き捨てられた落胆の言葉。

『ああ、なんだ、双子の兄の方か』

いつだって、そうだ。

オレはおまけ。

オレは必要ない。

生まれる必要などなかつた。

オレは何で生まれてきたんだろう。

『私は何のために生まれてきたんだ？』

どうして、オレじゃないんだ。

どうして、オレじゃなかつたんだ。

『どうして、私じゃないの』

何で？ どうして？

オレだつてちゃんと生きてるんだ。

生きてるんだよっ！！

……「何言つてるのよ、当たり前でしょ！」

(え？)

直久はぱぱちりと目を開けた。

見知らぬ天井に、だんだんと焦点が合つていぐ。

(……？)

首を少しだけ動かし、自分のおかれた状況を把握するための情報

収集にとりかかつた。

手も足もある。動く。痛くない。怪我はなさそうだ。

視野を広げるとアンティーク調の高そうな長ソファーに自分が横たえていることに気づく。よく見れば、他の家具も同じように西洋風でそろえてあるようだ。

か。
神社住まいである双子の家は純和風。我が家ではないことは明らか。

なにせいろせんだ?

寝ころんだ姿勢のまま、直久はうなりながら腕を組み、細い記憶の糸をたどる。

(あーそうだった)

和久とゆすると一緒に、雪山に悪靈退治に来ていたんだった。

(ハ重ちゃんの元貴とか嘘ついて、ちやこかり夕夕飯食うてやかる
山神の部屋について。んで、和久が突然きえて、オレも追つかけよう
としたら、どーんとかアイツらがオレの上に降ってきて……そのあ
と何があつたつけ？　ああ、そうだ。ぬーって床から悪霊が生えて
きてグワーッて襲つてきたから、やべーってなつて……で、何で才
レ、寝てたんだ？　までまで、オレつてば、どつかで記憶すつ飛ば
したか？)

直久が、まだ正常とはいえない“残念な脳”をフル回転させ現状把握に努めた結果だったのだが、最後に行き着くところがやはりずれていた。普通なら、『「そうだつ！ ゆずるはー？」とか叫びながら飛び起きそつなものだ。

「あ、やつと起きた？ それにしても大きな寝言ね。まあいいわ。

それで？ あなた誰なの？ 突然私の部屋で、ぐーすか寝てるからびっくりして、思わず叫ぶところだったわ。まったく、どこから入ったの？」

聞き覚えの無い少女の声に、完全に我に返り、直久はがばりと体を起こした。そのせいで、すぐ目の前の椅子に姿勢正しく腰掛けた少女が、びくりと硬直する。

じつと黒髪の少女を覗き込む直久。

彼女が身にまとう真っ赤な着物に、黒艶の長髪は、実によく映えた。大きな瞳は黒曜石のように黒々として、直久の顔を映しこんでいる。そして、雪のように白い肌に、赤みがかった頬が愛らしく、

ふつくりとした唇は大きすぎず、形も良い。

(「の娘……どこかで……見たことあるようないような……）

自分を凝視したまま動かなくなつた直久に、彼女は怪訝そうな顔をした。

「あなた……口が利けないの？」

小さくため息をついて、彼女は立ち上がつた。そしてソファーの前にある円卓においてあつたコップを手に取る。

「水、もつて来るわ。のど渴いたでしょう？」

ふつと笑つた瞳が、どことなく儂げで。それで直久の記憶の糸が答えを導き出した。

「……ツバキさん？」

部屋を出て行こうと、体の向きを変えた彼女の動きがぴたりと止まる。

驚きに見開かれた黒曜石の瞳。その光が、一瞬だけ曇つたような気がした。

「ああ、なんだ……私はアヤメの方よ」

「あれ、違つたか。似てたからってつきり。自信あつたんだけどな」

ツバキ　あの廊下に飾つてあつた肖像画の少女。

最後の生け贋となるはずだつた少女。

「似てるに決まつてゐるでしょう。双子だもの」

「え？」

「え？」

「双子なの？」

「……あなた、何しに來たわけ？　姉に用があつてうちに來たんじやないの？」

「え？　え？　話が見えないぞ？　どうこう」とだ？

「私が聞きたいわ」

「うん。整頓しよう。そつしそつー」

直久は腕を組み、うんうん、と一人で納得するようにうなずいた。

そして、彼女に再び座るように促す。まるで、自分の部屋であるか

のよう」。

「えっとまず。オレは直久。君は？」

「…………え？だからアヤメ……ってそっからやり直し？」

「いいから、いいから。えっと、アヤメさんは、双子なんだね」直久の強引なペースに戸惑いつつ、アヤメは諦めたように頷いた。

「そーよ。双子の姉が、ツバキ」

「ふむ。その双子のお姉さんのツバキさんが、生け贋になるはずだつた方なんだな」

たいしたことを言つてないのに、まるで天才を演じている俳優気取りで、直久は顎をさすつた。いわずと知れた、直久のここ一番のキメ顔というやつで。残念なことに、というか、相変わらずというか、案の定というか、当然効果はない。

「……生け贋のことは知つているの？ 变ね。双子の私のことは知らないのに？」

「ああ。それは、絵を見たからね」

廊下に飾つてあった、肖像画にはツバキの名しかなかつた。だから双子だなんて知るわけがない。

「絵……ああ、清次郎さんが今、描いている絵のことね」

「…………え？」

今度は直久がきょとんとする番だつた。だが、アヤメはそれに気がつかずに話を進めている。

「今日にも、その絵が完成するといつので、みんな、儀式の準備に忙しいの。だから、あなたみたいな不審者が入り込んでも、まるで気付かないんだわ。これつてちょっと問題よね」

アヤメはそう言ってくすくす笑つてゐるが、直久はすでに聞いてない。今頃になつて、自分の置かれた状況が、普通は考えられないことになつてゐる氣がしてきたからだ。

(待て待て待てっ！！ 今、なんつた？ 今書いてるつて言わなかつたか？ ……ていうか待てよ……ふつーにスルーしてきたつていうか、考え方いけないような気がしてたんだけど、何で肖像画

の女の子が田の前にいるんだ？）

ふと直久の頭に、非科学的な答えが浮かぶ。

（いやいやいや、んなわけねーだろう）

すぐさま頭を勢い良く左右に振り、直久は腕を組み直した。

もう一度最初から考え直そう。落ち着いて考えれば何てことないんだ、きっと。そうに決まっている。非科学的なことに包囲された日常を送る彼ですら、全力で否定したくなるような、絵空事。起こるわけない タイムスリップなんて。

だが待てよ、と直久は低く唸つた。

肖像画が描かれたのは明治時代。つまり、その絵のモデルの少女が生きていたのも明治時代。

それなのに絵は今、描かれている最中で。そして、田の前にいるのがアヤメで、ツバキの双子の姉。その事実が意味することは、どう考えても。

「えええええーっ！？」

絶叫する直久の口を、慌ててアヤメが両手で覆う。

「ちよっ、声が大きい！！ 誰かに聞かれたらいじりするのよっ……」

それでもかまわずに、何かを訴えようと、もがもが言つているもので、アヤメのほうが観念した。直久の口からアヤメの手が外れる。

「なあ、いま何年？ 何年何月何曜日？ ついでに何日？ あああ～っ！ もしかしたら、これってタイムスリップってやつ？ タイムスリップかよ！ おーおーおーおー！ しちゃったのかよ！ マジでえかっ！？」

「…………」

質問されているのかと思えば、自分で答えて納得している直久に、アヤメはぽかんとするしかなかった。

「どうすりやあ、帰れるんだ？ なんかの映画だと雷に当たると車がウイーンって動いて帰れるんだけどなあ。いや、別のドラマで同じ衝撃を受けたら帰れたって話があつたな。同じ衝撃、同じ……っ

て言つても何が原因かまったくわからね……！ んがあああああ
つ！」

頭を両手で抱えこみ、体を反らして再び絶叫する直久。

わりと適応力があるのが、彼の救いだつた。非科学的なものに対する順応性は九堂家の一員として生きるには、必須能力と言えるかもしれない。

ただ、黙つて考えられないのが“残念な脳”と称される理由の一つかもしない。脳内思考駄々漏れである。これは、うるさい、とゆずるに何度も蹴られても直らない。

「待て待て。よく考える。こうなつたのは、悪靈がゆずるを襲つたからで。その悪靈のせいに間違いない。するつてーと、悪靈を探さないといけないつーことだよな。あーっ、でも、ここではまだ生きてるんだっけ？ しかも、あの悪靈がツバキだつたか、アヤメだつたか分からねえーっ！！ ひょえええええ～～！」

今度は、頬に手を当てて、『ムンクの叫び』と見紛うづく表情で、乾いた悲鳴を上げている直久。

一部始終を、ぱちくりぱちくりと瞬きの回数を増やしつつ、静観していたアヤメだったが、ほとほと困りきつた顔で、むしろ、かわいそうなものを見るような眼差しを送り始めた。

「ホントに、あなた何なの？ さつきから、分けがわからなうことを一人で……大丈夫なの？」

だが、アヤメの心配をよそに、直久は突然、きりりと表情を引き締めた。

「アヤメさん」

「は、はい」

改まつて呼ばれ、アヤメはびっくりした顔になる。

「何かお困りではありませんか？ この僕がつ、何でもつー力になりますつー！」

がばりと、直久が両手を、アヤメの両肩に手を置く。目をキラキラと輝かせながら。

だが、対照的にアヤメは氣の抜けきった顔になる。

つまり、直久の単純明快な思考回路はこうだ。

自分は、悪霊たちに呼ばれて、この時代のこの場所に来た。だから、悪霊つまり、アヤメかツバキか、その両方かとにかく、願いをかなえてやれば、もとの時代に帰れるはずだ。とすると、手つ取り早く、目の前にいるアヤメから片付けてしまおう。さあ、何が望みなんだ。言つてみる。さあ、さあ、さあつ！――

だが、突然そんなことを言われても、誰だって戸惑う。むしろ、怖い。アヤメじゃなくても、後ずさりしてしまう。

「なんだ、どうした？　なんでもいいぞ？」

「……な、ないわよ」

「そんなはずない。だつて俺、アヤメさんを救いに来たんだ。だから困っていることがあるはずだろ？　俺を助けるつと思つて何でも言つてくれ」

「はあ？」

アヤメはますます怪訝な顔をする。

「何それ。いつたい、どっちがどっちを助けるのよ？」

そう言つて、アヤメは彼女の肩に置かれた直久の手を振り落つた。「とにかく、私、全然困つてないから。助けるのなら、ツバキの方でしょ。ツバキ、明日の儀式で、生け贋にされちゃうのよ。きっとツバキの方が救われたがつているわ」

「儀式！？　生け贋！？　明日つ！？」

確かに、それは大変だ。大変だけど、何かが直久の中で引っかかる。

もし、生け贋になりたくないで、助け出してほしくて自分を呼んだのなら、目の前にいるのはツバキであるはずだ。

しかし、彼女は自分ではつきりと名乗った　ツバキではない。自分はアヤメだと。

「でもね」

直久は素直に感じたことを口にした。

「君は、さつきオレが目覚める前に、泣いてたんじゃない？ 瞳が少しほれていたから」

アヤメの顔がカーと赤くなる。その反応から、直久はやっぱりなと思つた。

「泣いてない！！ 想像でものを言わないで」

否定しても、もう遅い。仮説はすでに直久の中で確信に変わつていた。

やはり、自分はこの娘に呼ばれたのだ。生け贋になる予定のツバキではなく、アヤメに。

直久は、もう一度、アヤメの両肩に手を置き、自分の正面に立たせた。まっすぐな強い視線が、アヤメの黒曜石の瞳をとらえる。

「力にならせてよ」

アヤメが直久から逃げるように視線をはずす。

「……本当に、私は何も困つてないわ。ツバキの力になつてあげて「君の、アヤメさんの力になりたいんだ。だから、なんで泣いていたのか話してくれないかな？」

「だから、泣いてないってば！ もういい加減にしてっ！！ 出で行つて！！」

「え、あつ、ちよつと、まつて、ねえ」

アヤメは直久の背を押して、部屋の出入り口まで運ぶと、力いっぱい廊下へ突き飛ばした。そして、勢いよく、バタンと音を立てて扉を閉めてしまう。

「ちよつ、ちよつとアヤメをーん。開けてよお～」

しばらく直久の間延びした声が廊下に響いていたが、アヤメがふと、廊下が静かになつたのに気がついて、部屋の扉を僅かに開け、のぞき込んだ時には、直久の姿はどこにも見当たらなくなつっていた。

第十話 ツバキとアヤメ

……物語の主人公は、いつも可哀想なお姫様。悪い魔女に虐められる哀れなお姫様。

お姫様は無垢で可愛らしい。

疑うことも、恨むことも、知らない。

愚かで無知なお姫様。

誰もが哀れる。

私はお姫様ではない。

彼女を哀れむ立場であり、実際、彼女の不運に涙した。

だけど、なぜ？

なぜ、物語の最後にきて、彼女を羨ましく思うのか。

物語の最後だけ、彼女に入れ替わられたらと思つてしまふのは、なぜなのだろう……

彼女 アヤメの日常は、扉を叩くことから始まる。

屋敷の、他のどの扉よりも分厚く、暗く重いその扉をノックしようとして、彼女の手が止まった。

いつも躊躇う。扉の前でしばらく体が動かなくなる。怖い。

もし返事が返つてこなかつたら？

確かめるのが怖い。

もし。

もしも、ツバキが逃げてしまつていたら。

生け贋になるのは自分 アヤメなのだから。

でも、姉の在室を確かめる瞬間の不安は、確かめないでいる時間の長さと恐怖に比べたら、小さなもの。

大丈夫よ、昨日はちゃんと返事が返つてきた。自分にそういう聞かせ、アヤメは今日も、その扉を静かに叩く。

廊下に乾いた木の音が、コン、コン、と響いた。

アヤメは、自分の乾いた喉を潤そうと、意識的につばを飲み込むように試みる。だが、うまくいかない。それで、声がかすれてしまう。

「ツバキ……私よ……」

しばらくして、扉の向こう側からコンコンと返事が返つてきて、アヤメはホッと息を漏らした。

(ああ……)

涙が出そうになる。

この瞬間が、いつも幸せだった。

この瞬間だけ、安心できた。

その気持ちを心の奥底に、必死に閉じ込め、アヤメは扉の向こうに居る妹に労いの言葉をかける。

「大丈夫……？」

声をかけるだけで、アヤメがその扉を開くことはない。毎朝、毎朝、彼女はただその扉を叩くだけだった。

アヤメには、その扉が怖くて、それ以上触れなかつた。

自分ではないのに、その扉の中にいる、同じ顔のツバキが鏡の中の自分の姿であるような錯覚にとらわれるからだ。

生け贋になるのは、私じゃない。

私じゃないのよ、ツバキなの。

そう自分に言い聞かせていないと、頭がおかしくなつてしまいそうだった。

「姉さん」

アヤメは、はつとなつて、声のする方を見た。きっと、自分の顔は真っ青だったに違いない。

「おはよう姉さん」

そう言つて、一点の曇りも無い笑顔を携えた幼い弟と目が合ひう。弟はまだ十歳にも満たない。その弟の屈託の無い表情は、アヤメの心の奥深くまで突き刺さつた。それでも、何事も無かつたかのように、アヤメは微笑んだ。

「おはよう、アカネ」

胸に飛び込んできたアカネを、しつかりと抱きとめる。

「おはようござります」

その心地よい声色に、アヤメの全身がそつとぞわめきたつた。アカネが連れてきたのだろう、そこには背の高い、よく整つた顔立ちの青年が立っていた。年は二十代前半といつたところだろうか、まだまだ笑顔にあじけなさが残つている。

青年は、アヤメと目が合ひうと、ペコリと、頭を下げた。

その拍子に、無造作に伸びた前髪がさらさらと揺れ動き、アヤメは目を奪われる。

触つてみたい。きっと、彼の髪は、柔らかくて、絹のような肌触りに違いない。思わず手を伸ばしそうになり、自分の髪をかきあげるフリをして、必死に誤魔化した。

「おはようございます」

ほんのり赤らんだ頬で、アヤメは青年を見上げた。

「清次郎さま、こんなに早くからお仕事ですか？」

「ええ」

青年 清次郎は上着のポケットを探り、銀色に輝く鍵を取り出した。

「あと、どのくらい？ 今日には、描き終わるのかしら？」

知らず、アヤメの声が上擦る。1秒でも長く彼と話したい。
彼を独り占めしていたかつた ツバキではなく自分が。

「ええ。今日中には、描き终りますよ」

冬だというのに、花が春だと間違えて、咲き急いでしまった
微笑みをアヤメに向けると、彼は言い終えるより早く扉の中に消え
ていった。

バタン。

彼の背後で、扉が大きな音を立ててしまった。

部屋の中に入ると、地下へと続く階段に出迎えられる。部屋自体
は地下にあった。

階段には、照明器具や明り取りなどは一切なく、清次郎が手にす
る明かりのみが、むき出しのまま薄汚れた土壁を照らしている。無
数に走る壁のヒビや穴、シミなどが不気味に彼に笑いかけているよ
うにも思え、何度も肝が冷える。薄気味悪い、の一言では片付
けられない。

一段一段降りていくにつれ、かび臭さが強まり、ひんやりとした
肌寒さを伴う風が、下から階段を上ってくるようだった。通気口は
確保してあるのだろう。おかげで、息苦しさや、空氣の籠もつたよ
うな匂いはない。

だが、雪深きこの地方。真冬に隙間風が通る部屋で、暖房もなく
過ごさなくてはならないというのは、拷問である。そうでなくとも、
一応、人が住めるような造りをしているが、そこはまるで牢獄。
こんなところに閉じ込められなくてはならない理由が、この少女
のどこにあるというのだろう。

何が罪だというのか。

「ツバキ」

清次郎が優しく名前を呼ぶと、その囚われの少女がふわっと微笑

んで迎えてくれた。

彼女は、生まれてから、一度もこの部屋から出たことのない。おかげで、どんなに外の世界が汚れていようと、人の心がいかに醜かろうが全く関係なく、清らかにそこに存在している。

無垢で、可愛いツバキ。

ツバキを前にすると清次郎は堪らなくなる。

なぜ。

なぜ、彼女は笑えるのだろう。

こんなにも優しく。こんなにも美しく。

「どうしたのですか？ 浮かない顔をして」

「ツバキ……」

清次郎は力いっぱいツバキを抱きしめた。

彼女がこの牢獄にとらわれることになつた罪。それは この家に生まれたこと。

だが、それは彼女のせいではない。彼女の選んだことでもない。それを、誰も彼女に教えるものがいない。村人や、家族、彼女の双子の妹までも、硬く口を閉ざしている。

彼女がもし、それを知つてしまつて、『いやだ』と泣き叫ぶのが怖いからだ。

彼女がもし、逃げてしまつたら、その代わりとなるのが嫌だから。だから、彼女はこの部屋に閉じ込められている。眞実から遠ざけるために。生け贋となつて死ぬその日まで。

実際、ツバキはこのまま生け贋となることを受け入れるだろう。その他に自分が生きている理由を知らないからだ。幼い頃から、『おまえは十七歳になつたら、村のために神に召されるのだ。これは名誉で、ありがたいことなのだよ』と、言い聞かされて生きてきた彼女にとって、生け贋になることは『ごく当然のこと』で。彼女の大好きな父親から、褒めてもらえる唯一のことだった。

(こんなことが……許されるのか)

清次郎は血がにじむほど、唇をかみしめた。

(生け贋など、何の意味がある)

山の神に生け贋を捧げないと村が滅亡[する]などと、本気で信じている者など、どこにもいない。儀式を主催者である彼女の父親自身さえ、信じていらないだろう。

たかだか、家のため、利益のために実の娘を殺そつとしているだけの話だ。そんな馬鹿げたことがまかり通つて良いのか。

「……清次郎さん……痛いわ」

腕の中で、清次郎を優しく睨むツバキに、彼女を抱きしめる腕に思わず力がこもつてしまつていたことを気づかされる。

「じめん。嬉しかったもので」

「まあ、昨日もこつしてお会いしたでしょ」

そう言つて、彼女はまぶしい笑顔を彼に見せた。

ああ、彼女を助けたい。

ツバキを助けたい。

そして、自分の手で、今までの分までも、幸せにしたい。
生まれたことが彼女の罪だというなら、生きることが死ぬためにあるというなら。

自分がこの少女に教えてやりたい。

“生きている”ということを。

幸せを実感する日々を……。

清次郎がまた険しい顔になつたので、彼女は彼を元氣付けるように笑つた。

「清次郎さんは、寂しがりやですね」

その笑顔が、今でも十分幸せです、とても言い出しそうな気がして、彼は切なくなつた。

「ああ。君が居ないと、僕は生きていけなんだ」

そう言つてアヤメの額に、そつと口付けた彼の口には、いつしか強い決意が浮かんでいた。

バタン。

アヤメは扉が閉まるその音に、もう何度目かの絶望に打ちのめされていた。

「…………」

分かつていた。

今の笑顔は自分に向けられたものではない。

彼はツバキの絵描き。

今は、ツバキだけを見つめる絵描き。

以前、彼はアヤメの絵も描いてくれていた。赤い椿の花が咲く庭を背景にしたアヤメの肖像画を父親が気に入り、ツバキの生前の姿を描くようと、清次郎に依頼したのだ。

絵が描き終われば、ツバキは死ぬ。生け贋にされる。そのことを知った彼の筆はひどく遅かった。

（……清次郎さま……）

アヤメは清次郎の背中を隠した扉を恨めしそうにみつめた。

清次郎がアヤメの熱い視線に気付くこと決して無い。きっとこれからだつて、絶対に無い。

彼の目にはツバキしか映っていない。

ツバキだけを見つめ、ツバキのために生け贋となる儀式の日を遅らせ、ツバキのためだけに微笑みかける。

もう、ずっと前から知っていた。

気付いていたのに、認めたくなくて、目を閉じて、見ない振りして、耳を塞いで、聞こえない振りをして、そして、自分に嘘をついていた。

だけど、どうしようもない。彼はツバキを愛しているのだから。

だけど、でも、どうして！ 私とツバキは双子なのに！
同じ顔、同じ声、同じ、同じ、同じ、同じ、同じ……。

なぜ、私じゃないの？

私のどこがダメなの？

私とツバキとどこが違うの？

可哀想で、哀れなツバキ。

それなのに、なぜ？

私がツバキを羨ましく思つてしまつのは、なぜ？

第十一話 どうかがりむつみても、オレはイケメン高校生でしょっ! (1)

持ち前の切り替えの早さと、筋金入りの楽天主義が、実は何度も直久の命を救つてきたのかもしねりない。

実際、アヤメの部屋から、半ば汚いもののような扱いでつまみ出された直久の次の行動は早かつた。いくら騒いでも目の前の扉が再び開かれることはないと悟つた直久は、一変して静かになり、難しい顔で腕を組んでいた。

確かにアヤメは、何か悩みを抱え込んでいた。その問題を解決してやれば、自分はもとの時代に帰れるかもしねりない。だが、直久の中で何かひつかかるものがある。

『助けが必要だとすると、ツバキの方よ』

不意に、アヤメの言葉がこだました。

自分をここに呼んだのは、本当はツバキだったのだろうか。アヤメが断言するからには、何か根拠があるはずだ。

(……一方聞いて、沙汰するな。喧嘩両成敗。文武両道。四民平等
……だな)

意味がわかつていて使つているのかと疑いたくなるような単語で、自分を納得させるように一人うなずいた直久は、次にきょろきょろとあたりを見回した。

見覚えのある長い廊下に、真新しい額縁で飾られた少女たちの肖像画が並んでいる。それで、直久は自分の現在地を把握することができた。

直久たちが訪れた山吹家のペンションは、明治時代初頭、山吹家の先祖が日常生活を営む民家だった、と和久が言つていた。つまり、ここが明治初頭ならば、このアヤメの部屋は“瞬”がいた部屋に違いない。

ということは、ずいぶん色が鮮やかだつたので気がつかなかつたが、さつきまで直久が寝ていた長ソファーは、あのインチキ山神がえらそうに踏ん反り返つていていたソファーだったのだ。

そう考えるとなんだかむしょうに癪に障る。ガムでもつけて置けばよかつた、と扉に向かつて直久は舌を出す。ガムなんぞ、持つていなのが。

(こうしちゃいられないっ！！ ツバキちゃんだっ！！)

直久は、色々な邪念を振り払うように、首を勢いよく左右に振ると、アヤメの部屋の扉に向かつていた自分の体をぐるんと方向転換させる。そして、迷いの無い一步を踏み出した。

直久の向かうべき場所は一つしかない。

ツバキという少女が、あの肖像画の少女であるなら。生け贋となる運命にあるのなら。今、彼女がこの広い屋敷のどこに居るのか、考えるまでも無い。

彼女がいるのは 開かずの扉の向こうだ！

直久は、アヤメの三階の一番奥の部屋から、長い廊下を大股で通り、階段を一段抜かしで一階まで降りる。なぜか徐々に駆け足になつてしまふので、もつれて転ばないようにするのがやつとだつた。そうして、あつという間に一階に片足を着地させたとき、直久は違和感を覚えた。

(?)

首をかしげ、辺りを見回す直久。一階の廊下は、エントランスまでもつすぐ見渡せた。

村上げての大イベントである、生け贋の儀式の準備で忙しいと、先ほどアヤメから聞かされていただけあって、確かに何人の人が、バタバタと足音を立てて直久の前を往来していく。

だが、誰一人として明らかに不審者である直久を指差し、騒ぎ立てる者はいない。そればかりか、誰とも視線が合わないのだ。

(……なんだ？)

それだけ、準備が切羽詰つていて、だから自分の存在に気がつか

ない、ということなのだろうか。それにしては 。

(オレ……見えてない?)

そう。まるで、直久などそこに存在しないかのように、人々は通り過ぎていくのだ。不思議とぶつかることなく、風を切るように。

そういえば、と直久は眉を詰めた。

階段でも何人もの人とすれ違つたが、やっぱり誰も直久に気がついていなかつた。ぶつかりそうだと思つて避けたのは直久の方だから、全然気にしていなかつたが。

これはもう確かめるしかない。そう意を決した直久は大きく息を吸い込んだ。そしてありつたけの声で叫ぶ。

「すいませえ——んつ！」

これだけの声量なら、さすがに皆に聞こえるはずだ。だが 。

「……まじかよ」

誰一人として、茫然としている直久を振り返る者はいない。やはり、自分のことが見えていない。聞こえていない。

(でも……アヤメさんは見えてたし、しゃべってたよな……)

とすると、やはり自分を見ることができるアヤメが、自分をここに呼び寄せたと考えるべきだろうか。

うーん、と腕を組み、唸りながら、直久は開かずの扉の前に仁王立ちしているしか、なすすべが無い。

(でもまあ、せっかくここまで來たしい？　扉の向こうがどうなつてるのかも気になるしい？　ツバキちゃんにオレが見えなかつたら、アヤメさんで決まりつてことになるしい？)

直久の目が扉に釘付けにされる。

見たくない。

見てはいけない。そう思つのに！

直久が凝視する中、扉の床上十センチほどのところから、す一つ、白く美しすぎる手が現れた。扉は一切開いていない。その手が扉を突き抜けているのだ。

白い手は、その手首までゆっくりと姿を現すと、ぴたりと動きを

止めた。

逃げなきや。今、すぐ、ここを離れなきやー！ そう思つた時だつた。

白い手は田にもとまらぬ速さで「ぐ」のよつに伸び、直久の腕を齧づかみにした。反射的に直久は息を呑む。

「つー！」

次の瞬間、ぐつと強い力で扉のほうへ引っ張り込まれた！

「うわあああ……あれ？」

田をつぶり、恐怖に震えた直久のあげた悲鳴は、意外にもすぐに止まつた。

「ん？ どうなつたんだ？」

直久はきょろきょろとあたりを見回したが、先ほどの不気味な手も、恐ろしい気配も、どこにもない。

（ドア抜けしちゃつた……の？）

五体満足であることを確かめるように、両手で体中をパタパタと叩いて見る。どこも痛くない。

わけがわからず首をかしげる直久。とりあえず、無事ならいいのだ。

（ていうか、なんだこ？ 真っ暗でよくわかんねえし……）

薄暗い部屋を照らしているのは壁に取り付けられた小さなランプの光。少しがび臭い。それに、うすら寒い気がした。
いつたいここはどこだろう。

明らかに、あの開かずの扉の前ではない。あのまがまがしい扉は見当たらぬし、地下室のような気がした。それが証拠に窓は見当たらない。だからか、まだ昼間なはずなのに、夜中だと錯覚しそうだ。

直久は少し手を壁に手を伸ばしてみる。壁紙も張られていないむき出しの土壁が、じつとりと指に触れた。

「清次郎さん？」

「！」

直久の心臓が、どきりとはねた。反射的に、背後を振り返る。

暗闇の中、必死に目を凝らすと、確かに人らしき輪郭が浮き出て見えた。誰かがいる。声からすると女の子だ。

「まあ、清次郎さんなの？」

「え、清次郎？……うわっ！」

嬉しそうな声をあげ、誰かが直久に飛びついてきた。お互いの鼻がくっつきそうな至近距離になつて、やつと少女の顔が認識できる。そして、直久ははつと息を呑んだ。

つい先刻まで、別の場所で目にしていたアヤメとまったく同じ顔が目の前にあつたのだ。

(　まさか、この子がツバキ！？)

直久の目が驚きに見開かれるのと、ほぼ同時に、彼女も自分がいま抱きついているのは思っていた人と違う人物であることに気がついたのだろう。小さく悲鳴をあげて、直久を突き飛ばした。

「だ、誰なの！？」

彼女の声はおびえたように震えていた。

「君つてツバキちゃん？」

「……私のこと知ってるの？」

「君、オレが見えるんだよね？」　ていうか、今オレに触つてたよね、思いつきり

「え？」

「その前に、オレの声ちゃんと聞こえてる？」

「あ、あたり前でしょ？」

どうやら、普通に会話ができるらしかった。

といふことはどういうことだろう。

直久は、唸りながら腕を組み、右手で顎をさする。

直久が見えている人物が、自分をこの時代へ呼んだのだと思つたのに。アヤメもツバキも自分が見えているらしい。とすると、他にも自分のことが見えている人物がいるのだろうか。すっかりあてが外れてしまった。

これで、自分が見える人物全ての悩みを解決しなくては帰れないとかだったら、どうしよう。いつになれば帰れるのか分かったものではない。

「あなた……誰なの？ わかつた、神様ね？ 待ちきれなくて、もう私を迎えてきたのですか？」

「はあっ！？」

すっかり考え込んでいる時に、話しかけられ、しかも、とんでもないことを言い出す彼女に、直久は思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。

「どつからどうみても、オレはイケメン高校生でしょう？」じく普通の一般人です」

「こーこーせー？」

「そ。平成生まれ平成育ちの高校生っ！ 大伴直久っていうのよ。直ちゃんて呼んでくれていいよん」

「へイセイ……？」

「そうそう。オレってばね、なぜか明治にきちやつたかわいそうな子なの」

「あなたの言つていることはよく分からぬけど、へイセイつていう町があるのね。でも、どうしてここへ？」

「……町じゃなくて、ええつとなんて説明したらいいんだ。あ～なんか面倒だから町でもなんでもいいや。とにかくだ！ 君がオレを呼んだんじやないかと思つて聞きにきたんだけど」

「え？ わたくしが？」

「そう、君が」

「あなたを？」

「そう、オレを」

「…………なぜ？」

「…………だよね。知らないよね～」

直久は、深いため息をついて、真っ暗闇でその高さがわからない天井を仰ぎ見る。その拍子に背後の壁に頭を軽く打ちつけ、ごつん

と鈍い音が響いた。

(この美人姉妹じゃないのか、オレを呼んだのは……)

彼女たちの他の人物の可能性がある以上、直久にはお手上げな気分だった。

だいたい、自分は和久とは違つて頭脳プレイは向かないのだ。駆けずり回つて、相手を捕まえるとかなら、いくらでも対応可能なのが。

(でもさ、オレのカンだと、一人のうちのどっちかだと思うんだけどねえ)

それにしても……。

いつたいこれから、自分はどうしたらいいのだろう。

「オレ……帰れないかも……」

完全に途方にくれている直久の肩に、そつと暖かいものが触れた。その温もりに、はつとして振り返る。ツバキの小さな手がそこに置かれていた。

「……家に帰れないの？」

心配そうに直久を覗き込む大きな瞳が、ランプの光でキラキラと煌いた。

「……ねえ、君はオレに何かしてほしいことない？」

「え？」

彼女の顔は、きょとんとなつた。そこで直久は質問を変える。ゆっくりと、はつきりした声で。

「君は何がしたい？」

そういうながら、直久は腹をくくつた。

もう、自分が見える人物の望みを全て叶えてやるしかない。他に方法があるのかもしれないが、自分には思いつかない。もう、これしかないのだ。

「何でもいいよ。片つ端から叶えていこつ。一つ残らず」

「……したい事？」

「そう。君は何がしたい？」

直久はまっすぐにツバキを見つめた。ツバキもその真剣な眼差しを、しつかり受け止める。

壁にあるランプの一つが、ジジジ……という小さな音を最後に、揺らめきながら消えていった。

ツバキの視線がそのランプへと移り、ふわりと彼女は微笑んだ。コツコツと足音を立て、消えてしまったランプを手にとると、ツバキが口を開いた。

「やつぱりあなたは神様なのね」

机の上にある金属製の器を手にとるツバキ。ビリヤリ油をじのうだ。

「でも、神様。わたくしは何も望みません」

ツバキがマッチを取り、ランプに火をともす。ジュッとマッチが擦れる音がして、ツバキの顔がはっきりと映し出された。その表情から、彼女の真意がまつたく読み取れない。

「え、だつて！！」

君はもうすぐ死んでしまうんだろう、という言葉を飲み込んだ。死にたくない。ここから出して。そう言われるにちがいないと思つていた。

そうでなくとも、死ぬ前にどこへ行きたいだとか、何がしたいだとか。自分だつたら、山のように出てくる。

「わたくしは、十分に幸せですね。だから何も望みません」

「そんな……」

本心から言つているのだろうか。

こんな部屋に閉じ込められ、ただ死を待つだけの人生が幸せ？
たつた十六年間の人生か？

「君は……」

直久は、続く言葉をみつけられなかつた。確かに、彼女は満面の笑みを浮かべていたからだ。

ああ、本当に。

心のそこから、彼女は微笑んでいる。それが分かつた。

直久は暗闇の中だというのに、自然と目を細めている自分に気がつく。

幸せだ、と言い切れる彼女が、

その言葉の一つ一つが。

なんだかうらやましく思える。まぶしかつた。

自分はどうだろう。同じ十六年を振り返り、胸を張つて幸せだったと言えるだろうか。

でも、と直久は思う。

それは、彼女が何も知らないからではないか。

こんな暗い部屋に閉じ込められて、外界を知らずに、他の楽しいこと、興味深いことから遮断され。与えられたものだけを消化する毎日であれば、探求する楽しみを知らないのは当然だ。

欲しいものを手に入れるために、人は努力する。手が届かないのならば、届くような人になろうとする。

でも、生きていくに事欠かないだけのモノを与えていれば、それで満足するのではないだろうか。その現状で、幸せを感じるのではないだろうか。草原を知らない動物園のライオンのように。生きる苦しみを知らない彼女だからこそ、幸せだと言い切れるのではないか。

(……こんなのは、本当の幸せじゃない。これでいいはず無いんだ)

彼女にだつて、生きる権利がある。

友達と笑い合い、恋人と愛し合い、我が子を抱いて、孫と遊ぶ。そんな当たり前の人生があるはずなのだ。いや、彼女の人生にその選択肢があるということを知る権利がある。

誰も知らせないまま、彼女が笑つて生け贋になつて行くのは間違つていて。卑怯だ。村人も、彼女の家族も。町中がグルになつて、事実を隠しているに違いない。

「……大丈夫ですか？ とても辛そうな顔をしているわ」

「……」

彼女は再び、春の陽だまりのようなまぶしい笑顔を直久に向けた。

だが、今の直久にはその笑顔をまっすぐに見ることができそうになかった。胸に、小さな針がいくつも突き刺さるような痛みを覚え、顔をしかめる。

「……オレが、君の力になるよ」

直久は確信していた。

自分を呼んだのは、この少女だと。

「ひからむのも、オレはイケメン高校生でしょ！」（2）

「アヤメさん……」

窓の外をぼおっと眺めていたアヤメは、突然背後から声をかけられ、びくりと体を震わせた。ソファーに座つたまま首だけを動かすと、情けない顔の少年がこちらに歩み寄つてくるのが見えた。

「…………あなたはさつきの…………」

「今、ツバキちゃんに会つてきたよ」

彼はアヤメに笑いかけた。ビことなく、影のある笑顔だった。

「ツバキに……」

「うん」

アヤメはそつと彼から視線をはずす。なんとなく、彼の瞳がまつすぐ見られなかつた。

（あの部屋へ行つたのね……）

窓の外に目をやりながら、アヤメは小さくため息をついた。

どうやつてあの部屋の中へ入つたのかは分からぬ。でも、彼の表情から姉に会つたのは真実であるう。誰だつて、あの部屋に閉じ込められた姉を見れば、今の彼のような顔をする。

誰もが自分を責めている気がした。

卑怯者と。

全てを知つてゐるくせに、姉を見殺しにする自分を。

「それで……用がすんだんでしょう？」

「ううん。何をすべきなのかはわかつたけど……オレ一人じゃ、どうしていいかわからないんだ」

彼は、ため息をつきながらアヤメのすぐそばまでくる。そしてク

ルリと体を反転させ、そのまま床に座り込んだ。

「彼女を助けたいんだ」

「……………そ、う」

やつぱり、とアヤメは思った。

だから言ったのだ。助けが必要なのは姉の方だと。

彼が何者なのかは知らない。今だつてどうやってこの部屋に入ってきたのか、わからない。部屋の扉が開いた気配はなかつたし、だいいち、鍵がしまっている。先ほどだつて、彼はいつのまにかこのソファーの上に寝転がっていたのだ。不審人物というよりも、この世の人ではない気がした。きっと山の神が使わした使者なのかもしない。

主である神にふさわしい生け贋を連れて行く。それが彼の使命なのでないだろうか。

ツバキか。それとも……自分が。

清き心をもつツバキは可哀相だから、アヤメを連れて行こう。そんなふうに彼は思ったのではないだろうか。

（もう、どうでもいいわ……もう……どうでも……）
樂になりたい。

幸せになりたいとは言わない。

生け贋のツバキが逃げないかどうか、怯える日々を早く終わらせたい。

「ツバキを助けてあげて……」

アヤメの声がかされた。でも、本心だつた。

この生活から開放されるなら。

自分が生け贋としてツバキの代りに死ぬのもいいかもしれない：

。

そう思つたら、自然に口元がほころんでいた。

「うん。助けるよ」

遠くで彼の返事が聞こえた。

一緒に、彼女を助けよう、アヤメさん

「ええ……そうね。助けましょつ……」

そうつぶやいたアヤメには、窓の外の真つ青な空に浮かぶ雲が、ひどくまぶしく見えた。

「ンコン。

ふいに部屋の扉が鳴いた。

アヤメは、窓を見上げたまま返事をする。

「アヤメさん……私です」

どきりとアヤメの心臓が跳ねあつた。一瞬にして、アヤメの体中の血が猛スピードで巡りだす。

「は、はい。今、開けます」

彼に物陰にかくれるように指示すると、パタパタとはしたなく着物の裾を揺らしながら、アヤメは扉に駆け寄る。ガチャリと軽い音を立て、その部屋の扉は開かれた。現れたのは、さわやかな笑みを浮かべた青年だった。

「お話があるのですが、今よろしいですか？」

「はい、どうぞ」

「こりと柔らかに微笑む彼に、アヤメは嬉しさを抑えきれない。彼は今、自分に微笑みかけている。ツバキではなく、自分に。

「今、お茶をご用意しますね」

「いえ、お構いなく。すぐに済みます」

扉から一步部屋に踏み入れたものの、清次郎は部屋の奥には足を進めようとした。なかつた。

「そう言わずゆつくりなさつてください。さあどうぞ」

「嫁入り前の娘さんの部屋に、こんな、しうもない男が長居をして、変な噂がたつたらこります。ここで。それより」

どうしても、用件だけを済ませて退散しようとする清次郎に、アヤメの胸がズキリと痛んだ。それでも、アヤメは微笑んだ。（いいの。こうして会いにきてもらえるだけで。それだけで、胸が

弾むのよ。あなたはそれを知らないでしうけど）

「アヤメさんにお願いがあるんです」

「なんでしょう。私でお役に立てることだといいのですが」

「アヤメさんにしか出来ないことです」

真剣な清次郎の眼差しに、アヤメは嫌な予感がした。

「ツバキさんが、どうしても明日の儀式で、アヤメさんの着物が着たいとおっしゃつているのです」

「……私の着物を？」

「はい。アヤメさんのいつも着ている赤い着物を着て、山神様の元へ行きたいと」

ツバキは清次郎をじっと見つめた。

彼の瞳が、かすかに揺れ動くのが分かつた。その瞬間、ツバキの全身が、ぞわぞわとざわめき立つた。

（……清次郎さま……まさか……）

返事をしないアヤメに、置み掛けるように清次郎は続けた。

「大好きな妹と、神の世界へ旅立つた後もつながつていられるように、とツバキさんは言つていました。私には、この彼女の願いをかなえてあげることしかできないのです。お願ひできますか？」

彼の必死な思いが、アヤメに流れ込んで、首を絞め上げられているように苦しくなる。

あなたは、やはりツバキしか見ていない。

私ではなく、ツバキのことしか考えていない。

私の着物をツバキに着せて、どうじょうと言つのですか？

ツバキを“アヤメ”だと、周囲に思に込ませて、どうじょうと言つのですか？

そして、それを私に言つのですね。

ツバキを連れて逃げる手伝いをしてくれないか、と。

ツバキの代りにお前が死んでくれ　　と。

「わかりました」

アヤメはにこりと微笑んだ。

「今晚、私が彼女のところへ手渡しに行きます」

「え？　あ……いや、私が頼まれたので……」

「いえ。私もツバキの生きた証として、彼女の白い着物がほしいわ。だから、私が持つていきます。だ大丈夫、こっそり行きますわ。お父様に知れたら大変ですものね」

有無を言わせぬアヤメに、困ったような顔をした清次郎。だが、アヤメの満面の笑みに安心したのか、それともつられただけだったのか。彼もしだいに笑顔になつていく。

「だつて……ツバキを助けてくれるのでしきつ？」

「……えつ！？」

どうしてそれを！？

完全に凍りついた清次郎の顔に、はつきり書かれている気がした。なんてわかりやすい人なのだろう。もう少し、嘘の上手い、ヒドイ男だつたらどんなに良かつただろう。

アヤメは、倒れそうなほど激痛を胸に感じながらも、必死にそれを笑顔で隠す。

「私の着物を着たツバキを連れて、逃げてくださるのでしきつ？」

私も手伝います」

「……アヤメさん……」

「ツバキは私のたつた一人の姉です。生きていてほしいと思つて当たり前でしょう？　もう一度と会うことができなくとも、どこかで幸せに暮らしていくさえくれば、それで十分ですわ」

清次郎はアヤメをじっと見つめている。真意を伺おうとしているのだろうか。

でも、そんな彼の視線など、今のアヤメには怖くない。この醜い心が彼にあはけるわけが無いのだから。

ついに、清次郎は観念したように、ふわりと笑つた。

「わかりました。ではお願ひします」

「ええ。私が今夜1時に私のこの赤い着物を、ツバキに着せます。

そして、屋敷の外へと連れ出します。清次郎さまは、裏門のところ

で待つていて

「わかりました」

そして、アヤメは今まで生きた中で、最高の笑顔を彼に向けた。それを見て、安心しきったように、彼は部屋を出ていく。その清次郎の背中を見送りながら、アヤメは自分の心はどうんどんと黒い闇に侵されていくのを感じていた。

「……清次郎さま！」

振り向いた清次郎の笑顔が、まぶしくてアヤメは思わず目を伏せる。

「ツバキを……お願いします」

「はい。幸せにしてみせます。」「安心ください

「…………ありがとう」

アヤメは深々とお辞儀した。もう隠しきれる自信がなかつたから。自分ではなく、ツバキのために生きようとしている彼に対する憎悪を。

何も知らずに彼をひとりじめできる、ツバキに対する妬みを。そんな一人を自分一人の幸せのために利用しようとしている、醜い自分を。

力チャ……。

静かに閉じられた扉。

顔を上げたアヤメの目には、決意がにじんでいた。

もう誰にも止められない。動き出してしまった運命を。

これしかもう方法はないのだから……。

「ねえ、そこあなた、まだいる？」

背後を見ずにアヤメは話しかけた。

「直久。オレは直久」

返事があつた方向を、勢いよくアヤメは振り返った。そして、はつきりとした口調で言い放つ。

「直久さん。助けましょう、ツバキを」
そのアヤメの顔には吹っ切れたような、すつきりした笑顔があつた。

あなたがツバキがいいというのなら。
どうしても、ツバキがいいというのなら。

望みどり逃がしてあげるわ

あなたと“ツバキ”を。

「かりゆしても、オレはイケメン高校生でしょう。」（3）

アヤメはその扉の前に立っていた。一階にあるというのに、奥までた場所にあるせいか、それとも生け贅として死んでいく娘たちへの罪悪感からか、この扉の前に姿を見せるものは、ほとんどいない。アヤメたち双子の両親だとて、自分の娘が生け贅となるというのに、年に数回ほどしかこの部屋の鍵を開けることはない。

この十六年間、ほとんど毎日のように、汚物を片付けたり、部屋を掃除したり、食事を運んだりと、ツバキの世話をしていたのは、口の聞けない村の老婆だった。

もちろん、今までアヤメがこの扉を開けて中に入ったことは、一度も無い。

そして、それは今日が最初で最後になるのだ。

「…………開けるわよ」

アヤメは背後をちらりと振り返った。アヤメの一歩後ろにいた直久が、彼女をじっとみつめたまま、深く頷いた。それを受けて、アヤメも頷き返す。

自分の手の震えを直久にばれないように必死で隠し、鍵穴に差し込んだ鍵をゆっくり回す。

ガチャリ……。

不気味に静まり返った廊下に、鍵の回る音が、妙に大きく響いた
よつに感じた。

「…………

これから自分のしようとしないことがどんなに醜いことなのか、それは自覚していた。

でも、心はもう止められない。

もう、後戻りはできない。するつもりもない。

「行こう……一時になつちやつよ」

なかなかドアノブに手が伸びないアヤメを、直久は促した。

「そうね。ぐずぐずしてはいられないわ」

意を決したように、アヤメは扉を押し開いた。

扉の向こうに見えたのは、地下へと続く階段だけ。

「地下室……だったの……？」

アヤメは「くつと喉を鳴らさせた。

「……この下かな」

「会つたんじやないの？」

「まあ、その、色々省略したみたいで……てか、君こそ、部屋に入つたことないの？」

「ないわ」

ひしゃつと言い放ち、アヤメは階段を降り始めた。だが、階段は

暗く、足元も見えない。

壁伝いに行こうと、手を伸ばせば、土壁の冷たさに、どきりとした。た。

「…………」

それでも、震える足を、なんとか前に進める。

「シン、……シン、……。

アヤメの足音だけがこだまして聞こえてきた。結構、深い地下室だ。

(……こんなところ……本当にツバキはないの……?)

暗闇。

寒氣。

孤独。不安。

絶望。

アヤメが過ぎててきた地上の日常は、ここにくらべれば楽園かもしれない。

「大丈夫……？」

なかなか思うように進まない足を、引きずるようにしているアヤメを、直久が心配そうに覗き込んできた。

「大丈夫だつたら！」

「…………」

きつと今、自分は真っ青な顔をしているに違いない。

怖い。

怖い、怖い、怖い！　怖い！！

ツバキに会うのが、怖いっ！！

アヤメは、涙腺が勝手にゆるみ、涙がこぼれそうになるのを必死に耐えた。

ガタガタと音を立て震えそうな歯を、必死にかみ締めた。

「あ…………」

直久の声に、アヤメははつとなつて、前方を見た。もう少し階段を下つたあたりだろうか。急に、前方がうつすらと明るくなつた気がしたのだ。そして、その薄明かりの方から声がした。

「誰？」

アヤメは息を呑んだ。自分の声が聞こえたからだ。でも自分は声を発していない。

つまり、今の声は

。

(…………ツバキつ！)

「あ、やっぱりこの先だつたんだね」

ツバキの声を聞いた直久は、急に元気を取り戻したように、足も

軽やかになつて階段を下りていった。そして、薄明かりの中に消えていく。

「やあ、ツバキちゃん。オレのこと覚えてる?」

「まあ、えつと、イケマンさんでしたからしら」

「おっしゃい。イケマンてなんだよ。イケメン、イケメン!…」て
いつか、それ名前じゃないから。オレは直久!」

「あら、名前ではなかつたのですか。申し訳ありません。直久さま
ですね」

「“さま”はやめてよ。なんかくすぐつたいや。直ちゃんでいい
よ、直ちゃんで」

ひとり真つ暗な階段に取り残されたアヤメは、放心したよつてそ
の一人の会話を聞いていた。

(……な、なんなの、この軽いかんじ……)

アヤメは急に、ひとり怖がつて前に進めなかつた自分が、馬鹿み
たいに思えてきた。

ふう、と小さくため息をつくと、今度は軽やかに階段をくだり、
アヤメも部屋の中に足を踏み入れた。

「ああ、アヤメちゃん、遅い遅い! やつと来たよ」
直久の声に、ツバキがゆっくりとアヤメを振り返つた。

アヤメの心臓が跳ね上がる。

「ツバキ……」

暗闇に目が慣れたせいか、部屋の中は意外と明るく感じた。ツバ
キが夜着をまとい、長い髪を下ろして、直久の前に立つて、じつと
アヤメを見つめている姿も、はつきり見える。

アヤメは自分が石になつてしまつたのではないかと思つた。
足が動かない。それ以上部屋に入ることが出来ない。

そんなアヤメとは対照的に、ツバキはアヤメから視線を離さず、
ゆっくりとアヤメに近づいてくる。

「シ……シ……。」

木製の床が、乾いた音を立て、ツバキの後にっこりへる。

「…………」

畠の前にたゞつゝと、ツバキはピタリと足を止め、まじまじとアヤメを見つめた。

アヤメはぐくりと睡を飲み込む。

怖かった。

全てを映し出す鏡を見ているようだ。

今から自分がしようとしていることを、すべて見透かされてしまつていいようだ。

何か言葉を繰り出そうと、アヤメは口を開く。

「…………」

が、声が出てこない。

と、そんなアヤメを観察するように見つめていたツバキが、ふいに笑顔になつた。

「アヤメね」

「…………」

「いつも、アヤメは心配して声をかけてくれる。だから、好き。会いたいとずつと思っていたのよ」

満面の笑みを浮かべたまま、ツバキはがしつとアヤメの腕を掴んだ。そして、ぐいぐいと部屋の中へと引っ張りこむ。

「あつ」

慌てるアヤメにかまわず、ツバキはアヤメを部屋の中央にあるテーブルセットの椅子に座らせた。

「来てくれて嬉しいわ！ お茶でも飲みましょ~」

「ま、待つて！ 話があるのよ~」

「ええ、だからお茶を入れるわ。話をするときは、お茶を飲みながらだと清次郎さまで教えてもらつたもの」

「清次郎さま……？」

「ええ。清次郎さまはいつも色々な話をしてくれたるのよ。ほら、

いつも来る、ばあやは口が利けないでしょ?」

ツバキは直久にも椅子に座るように促す。一時までは、さほど時間がないのを自覚している直久は困ったような視線をアヤメに向けてきた。だが、アヤメはその視線に気づいてやれるほどの状態ではなかつた。

「清次郎さまは、いつも本当にいろんな話をしてくださるの。甘いお菓子も持ってきてくださるわ。それで、星の話や、花の話。ああ、今は冬だから寒いのじょう? 冬には雪がふつて。雪は冷たい。白い。アヤメは雪を見たことがある?」

「…………

アヤメは言葉を返すことができなかつた。
怖い。

この子は、どこまで知つているの?

(でも……ツバキ……あなたには清次郎さまは渡さない……)

アヤメは、静かに目を伏せた。

「……じゃあ、今からその雪を見に行きましょ?」

「え?」

「あなたをここから外へ出してあげるわ」

アヤメは自分の組んだ指を見つめながら言った。それで、かすかに指が震えていたことに、気がついた。

「オレらは君をこの部屋から外へ出すために来たんだよ」
直久がアヤメに口裏を合わせてくれた。

「でも……

彼女がこの部屋から出ることは許されない。彼女の中では神よりも絶対的な存在である父の命令だ。けれど、外の世界は見てみたい。そんなツバキの葛藤が、手にとるよひにアヤメには伝わってきた。

「雪を見に行きましょう?」

アヤメは笑う。必死に笑う。

その笑顔のアヤメと直久に安心したのか、やつと首を縦に動かし

た。

「そうと決まれば、急いで着替えなきや！」

直久は薄着のツバキに着替えを促した。

「オレ、部屋の外で待ってるから、早くね！！」

アヤメが振り返った時には、直久の姿はすでになかった。まるで、壁や天井をすり抜けたかのように、消えていた。

しかし、直久のことのかまつている余裕はない。アヤメは、ツバキの着替えを手伝うことに専念する。

「でも、まつて！」

ツバキは自分の白い着物に手を通しながら、アヤメを止めた。

「やつぱりダメよ。儀式は明日ですもの。私が居なくて儀式ができるなかつたお父様が悲しむわ。私はここに残る。アヤメは直ちゃんと雪を見てきて、ね？」

「大丈夫よ。心配いらないわ」

「ううん。私は明日の儀式を成功させて、神さまのお嫁さんになるのよ。お父様はそれだけを楽しみに私を育ててくださつたわ。私もお父様の喜ぶ顔が見たいの。だから、行けない」

「楽しみに育てた？」

娘が死ぬことを？

十六歳になつた娘を殺すことを？

「……」

アヤメは駄々つ子のようなツバキをまつすぐ見つめた。いつの間にか清次郎との約束の時間は過ぎてしまっていた。このままで、心配になつた清次郎が様子を見に、ここへ現れるのは時間の問題だろう。それでは、何もかもおしまいだ。

清次郎が、ツバキだけを連れて逃げ、置き去りにされた自分がツバキの代りに生け贋にされてしまうのは、子供でも考え付くこと。だから、何がなんでも、ツバキを外へ出さねば。

その後のことは、それから考えればいい！

アヤメの瞳に、一瞬、強い光が灯つた。

(……清次郎さまと一緒に逃げるのは、ツバキ あなたじやない

（のよ！）

「わかつたわ！ 私が残る」

「え？」

「私がここに残るわ。あなたが戻つてくるまでの間、ここで待つているわ。もし、あなたが間に合わなくても、儀式は行われる。それなら安心でしょう？」

「……でも、儀式は私がずっと楽しみにしていたのよ？」

ツバキは心のそこからがっかりしたような顔をした。まるで、大好きなおもちゃを取り上げられた子供のように、しゃんぼりと肩を落としている。

「それなら、戻つてくればいいわ、明日の儀式までに。でしょ？」

「……そうね。それならいいわ」

実際に嬉しそうな顔をしているツバキを見て、アヤメは小さく息を吐いた。

（とにかく、なんとか外へでてくれそうね。あとは直久さんに任せよう）

直久との計画では、ツバキを山奥の小屋に住む、ばあやのところへ預けることになつていて。ばあやにはもう話をつけてあった。小さな頃から自分の孫のよに育ててきたばあやは、二つ返事でこの話にのつてくれた。きっと、ばあやが大切に育ててくれるはずだ、今までもそうだったのだから。

「さあ、いこちよ！」

ツバキに白い着物を着せ終わると、階段を上がり、部屋の扉の前へと急いだ。扉を開けると、直久が待っていた。

「私はあとから行くから、先にばあやのところへ！」

直久にだけ聞こえるように、言つとアヤメはツバキを部屋の扉の外へと押し出した。

「さあ、ツバキ。行くのよ」

「…………」

不思議そうな顔をして、ツバキはアヤメを振り返った。

「……楽しんで。あなたの人生を」

そう言つたアヤメは、自然に微笑んでいた。

なぜだろう。

穏やかな自分がいいる。

全てが、これで終わるのだ。

これで、自分たち姉妹は全てから開放される。

馬鹿げた生け贅からも。

この家からも。

ツバキは山奥でひつそりと隠れて暮らさなくてはならないけれど、ここにいて死を待つよりはずつといいだるう。

自分も、生け贅の“万が一のため”として生きてきた人生から、開放される時がきたのだ。もう、十分だと思う。十分すぎた。

これからは、姉妹ともに、新しい人生を歩んで行こう。

そしてまたどこかで会えたなら、その時は、一緒に笑い合おう。

「行こうつ、ツバキちゃん！」

直久に腕を引っ張られるようにして、ツバキが廊下を走り抜けていく。

白い着物を着たもう一人の自分の姿を、アヤメはじつと見つめていた。ツバキもずっと視線をはずさない。

（さようなら、ツバキ。幸せに。どうか幸せに……）

ついに、玄関からその一人の姿が消えたのを見届けると、アヤメも行動にうつった。

「清次郎さま……」

急いでアヤメは裏庭の方へ走り出す。

清次郎との待ち合わせ場所は、裏庭を抜け、裏門を出たところだった。

赤い着物の裾がはだけても、気にせずに全力で走った。

彼が待っている。

彼は自分を待っているのだ。

そう、私は今、この時から ツバキなのだ！

「ツバキ！？」

裏庭を抜けたところで、アヤメは誰かに手を掴まれた。ぎくりとなつてアヤメは身を縮ませる。だが、その人の顔を見て、これ以上の無い幸せをかみ締めるような笑顔になつた。

「清次郎さま！」

アヤメは迷わず、清次郎の胸に飛び込んだ。清次郎もそれをしつかりと受け止める。

（ああ……暖かい）

夢にまで見た、清次郎の腕の中は、なんと心地がいいのだろう。見た目によらずたくましい腕が、ぎゅっと自分を包み込んでいる。こんな幸せを手に入れるためならば、一生自分はツバキとして生きていこう。

「よかったです、ツバキ。遅いから、迎えにいこうと思つてたんだ」「まあ、心配性ですね」

アヤメはふふふと笑つた。それにつられたように、清次郎も微笑んだ。彼も、ずっと緊張していたのかもしれない。

「さあ、行こう」

差し出された清次郎の手にアヤメはそつと手を添えた。本当に本当に、嬉しそうに。

「ええ。行きましょう」

一人は駆けだした。輝かしい未来と自由の待つ、外の世界へ。

第十一話 寒椿（1）

「見て～！ すごいわ、すごいわ～！」

空から降り注ぐ雪に大はしゃぎで、くるくると踊りまわるツバキを横目に、直久は地面にへたれこんだ。

「んだあああ、つかれたっ！」

今も昔も、この屋敷ときたら、玄関から表の門扉までの距離が、並み外れて長い。そこへ、目にするもの全てに心を奪われて、またく前に進まないツバキ。いいかげん痺れをきらした直久が、ツバキを背負つて門扉まで全力疾走した、というわけだ。

「もうひ……ちょっと……狭くていいと……思ひ、この屋敷――！」

息が切れてもなお、誰かに文句を言いたくてしかたない。直久は今現在そんな状況といったところだ。

まだ、ぶつぶつと何かを言いながら、直久は雪の上にじろりと仰向けになる。すると、雪が降り注いでくるのが見えた。

そういうば、こんなふうに雪が降るのを見たのは初めてだなあ。直久は暢気にそんなことを考えはじめた。

真つ暗な空から降つて来る雪は、自分の生きている時代でも、彼女たちが生きている時代でも同じ。永遠にその姿を変えることなく、静かにあたりの音を消しながら降り積もる。そう考えると不思議だ。

「ねえ、直ちゃん！ 雪つて食べてもいいのー？」

無音の世界にひたつていた直久の耳に、無邪気な声が飛び込んできた。見上げると、ツバキが両手を大きく広げ天を仰いでいる。

「食べてもいいけど。味しないよ？」

「ホントね、よくわからないわ」

「でしょ……って、食べたんかいっ！」

「落ちている方を食べてもいい？」

「それは止めなさい」

思わず、幼稚園児をたしなめる保父さんのように直久は言った。

「ケチつ！」

「け、けちつ！？ デリでそんな言葉をひつ！」

「ヒミツーーつ！」

ツバキは本当に楽しそうに、走りまわった。

「あ、ちょっと、遠くにいっちゃダメだよ～？」

なんだか、お父さんになつた氣分だな、と直久は思つた。手がかかるし、目が話せなくて危なつかしいし、疲れるけど、それ以上に、ほほえましく、胸があたたかくなるから不思議だ。

一つ一つの反応が、無邪氣で、新鮮で。そういう見方があつたのかと、再発見させられる。

彼女を好きになつた清次郎の気持ちが少しだけ分かるきがした。

(……それにしても遅いなあ、アヤメさん)

直久は、じつと屋敷の方を見た。いくら田を凝らしても、赤い着物の少女の姿は見えてこない。

「誰かを待つているの？」

小さくため息をついて、背後を振り返つた。

ツバキはきょとんとした顔で、直久を見つめ返す。

「うん、ちょっとね」

アヤメはすぐに追いかけると言つていた。だから、直久はツバキの手をひっぱり、屋敷を取り囲む高い鉄柵の外に出たところで、彼女を待つことにしたのだ。

アヤメは先に山小屋の老婆のところへ、ツバキを連れて行けと言つていたけれど。アヤメのことだって、直久は心配なのだ。(それでも、結局オレをここへ呼んだのは誰なんだ？)

直久の知る結末は、ツバキが絵描きと駆け落ちし、銃殺されるというものだ。

だからそれを阻止し、ツバキを無事に逃がせば、自分はもとの世界に帰れるにちがいない。そう思つてここまでやつてきた。

本当にそれでいいのだろうか？

（なんか引っかかるんだよなあ。……よし、落ち着いて最初から考えよう。今はカズがいないけど、オレだっておんなじDNAだ！やればできるはずっ！ 多分！ きっと、おそらく！）

こと頭脳面においては、驕らず、謙虚に、自分を過大評価しないところが直久のいいところだと、言う人もいるにはいる。しかし、今はその知能に頼るしかないのも事実。直久は、自分を励ますよう、大きく息を吐いた。

（オレがここへ来たのは、悪靈のせいだ）

悪靈が、自分の体内に入り込んだのは分かった。その時に、感じた強い感情は、“悲しみ”と“孤独”。

怒りや、妬みではなかつた。悪靈は、誰かを恨んでいるというわけではなさそうだ。

もしかして、きっと悪靈は、この時代、つまり自分が生きていた時に感じていた苦しみを無限にループするように味わい続けているのではないか。

だつて、過去にタイムスリップするなんて、そういうあることじやない。そんな映画や小説みたいなこと。

（たぶん、これはタイムスリップじゃなくて悪靈の記憶なんじゃないか？）

悪靈は、この悲しみの無限地獄から抜け出したいくて、助けを求めていたのではないだろうか。

ずっとずっと。直久たちがこうして屋敷を訪れる今日までずっと。助けて、助けて。そう訴え続けて。

では、そうとして。

誰が悪靈になつたといつのだらう。いや、どちらが、といつべきか。

自分たちはずっと、生け贋になるはずであつたツバキが悪靈になつたものだと思っていた。それは本当に正しいのだろうか。

ツバキが生け贋になることを嫌がり、恋に落ちた絵描きと逃げ出

す。そして、その駆け落ちの途中で射殺。生きたくても生きられない
かつたツバキは、全てを怨んで悪霊になる。

それが和久やゆずるが考へていたシナリオだ。

けれど、直久の知つてゐるツバキは生け贋になることを嫌がつて
いるようには、これっぽっちも見えない。そればかりか、生け贋に
なるのを心底楽しみにしているようで、今だつて、「早く雪を見た
ら帰りましょう」と何度も、うるさいぐらいだ。

だから、直久にはどう考へても、ツバキが恨みを晴らすために悪
霊になるとは、考えられないのだ。

一方のアヤメは、双子の姉が生け贋にされることをずっと気に病
んでいた。それを止めたかった。でも止められない。どうしていい
か分からぬ。それで、ツバキを逃がすこととした。といふところ
だろうか。

これまた、アヤメが悪霊になる要素は見つからない。

(でも、よく考えたら、アヤメさんはどうなつたんだひつ)

“最後の生け贋”のツバキに、双子の妹がいたことは、現代まで
伝わつていなかつた。そもそも、結局、生け贋の儀式は行われたの
だろうか。

(まさか……アヤメさんがツバキちゃんの代りに、生け贋にされた
なんてことは……?)

つまり、こうだ。運悪く、ツバキが逃げたことが、すぐにバレて、
逃がしたアヤメが捕らえられる。そして、アヤメが代りに生け贋と
され、ツバキはツバキで逃亡に失敗し殺される。これが過去に起きた出来事だったのではないだろうか。

もし、自分の考へた通りだとすると、アヤメはもつ捕らえられて
いるのではないか。

そして、何も知らず、ずっと生け贋を心待にしていたツバキと違
い、“死”を知つてゐるアヤメが、無理矢理生け贋にさせられたら、
それこそ悪霊になるほどの苦しみを生むのではないだろうか。
直久は、自分の出した結論に、ぞつとした。

「つてことは……やつべえつ！…」

勢いよくツバキを振り返った。そして、すでに足を走らせながら、叫ぶように言い放つ。

「ここについて！　すぐに戻るから待って！…　絶対にここを動いちゃだめだからね、いいねつ！？」

ツバキの呆然とした顔が、不安を呼ぶ。

けれども、直久は全力で屋敷の方へと急いだ。今はアヤメのほうが優先だ。だから、後ろを振り返ることなく。必死に走つた。自分の後をツバキがついてきていることも知らずに。

やっと広い裏庭を抜け、裏門が見えてきたところで、アヤメの手を引いていた清次郎の足が、不意に止まつた。辺りは闇に覆われ、降り積もる雪の音だけが、アヤメにはやけに大きく響いて聞こえた。どうしたというのだろう。

この門を抜ければ、自分たちは自由。

もう、この家からも、生け贅からも束縛されない、夢のよつな世界が広がっているというのに。

アヤメは清次郎の行動を理解できずに、首をかしげ、清次郎を見上げる。彼の顔から明らかな戸惑いを感じた。

何をいまさらためらつているのだろう。まさか、追われる身になるのが怖くなつた、とか言うのではあるまいか。

一瞬の不安がよぎり顔を曇らせるアヤメを、清次郎はじつと見つめた。そして思いもよらぬことを口にした。

「あなたはツバキじゃない」

その言葉はアヤメの心臓を一瞬で止めるほどの威力がつた。自分を取り巻く世界の全てが凍りつき、音までもが雪にかき消されたように感じた。

彼を振り向いた瞬く間の自分の動きですり、自分のものでないような感覚。

永遠とも感じじる、無の時間が雪とともに降り注いでくる。どうして？

なんで？

わかるはずない。自分だって鏡を見るよつて、そつくりだと思つた。気持ち悪いほど、同じだった。全てが同じだったのよ。

違うのは、この着物の色だけだった！

それなのに、家族でもない彼に自分と姉との区別がつくわけがない！

動搖を隠し切れずにいるアヤメの手を、清次郎は振り落つた。黙つたままのアヤメの表情を肯定と読み取つたのだろう。

「違和感がありました、あなたのを抱きしめた時。それは次第に強くなりました。あなたはツバキではない」

「なんで！」

アヤメは咽が裂けるほどに叫ぶ。

「私とツバキなんて、どっちだっていいじゃない！　どっちだって一緒にじゃない！」

「アヤメさん……」

「顔も、声も、背の高さも、すべて同じよ！　何が違うとこいつのよつ！？　あなたがほしいのはこの器かうじでしようーー？」

清次郎は寂しそうな目をした。そして、ゆっくり首を横に振る。
「違いますよ。反応のひとつひとつをとつても。そうですね……確信したのは、この雪です。彼女は雪見たことが無い。きっと彼女ならば、ふわふわと舞うこの雪に目を奪われていたことでしょう。僕の存在を忘れるほどにね」

清次郎は嬉しそうに目を細め、天を仰いだ。その笑顔は、ツバキに向けたもの。雪を見て、はしゃぐツバキに向けられたもの。それがわかるから、アヤメはますます、惨めな気分にさせられる。

この人は絶対に私には微笑みかけてくれないのね。

一緒にいても、私を見てくれないのね。

田の前にいるといふのに、私を通してツバキを見ている、いつも、

いつも……これからもずっと。

「僕が愛しているのは、あなたじゃなくて、ツバキなんです
悔しさに唇をかみ締めていたアヤメに、駄目押しのような清次郎

の一言は大きかった。アヤメの嫉妬に油を注ぐ。
「だから！ 私がこれからツバキとして生きるわっ！ ビツして私

じやだめなの！？」

「……違いますよ、アヤメさん。あなたがだめなんじゃない。僕が
だめなんです。ツバキじやなきや、だめなのは僕なんです」

アヤメは頭を殴られたような衝撃を受けて立ち尽くした。胸も張
り裂けそうなほど、痛い。

そんな……。

どうして……。

「だから……私がツバキになるって……言つてゐるじゃない
ぽたり、ぽたり。大粒の涙が、アヤメの足元の雪を溶かしていく。

「……すみません、ツバキを迎えに行きます」

清次郎がゆっくりと体の向きを変える。

「まつて……清次郎さま！」

彼が行ってしまう。

アヤメはすかさず彼の背中に声をかける。けれど、彼の足はまた
一步前に出された。

「お願ひ……行かないで……」

もう彼が振り返ることはない。そう確信した。もつ、どうするこ
ともできないのだと。

私では、あの人を止めることすらできない。

「いやあ……」

いくら懇願しても、清次郎の足は屋敷の方へと進んでいく。
ツバキの元へと。一步、一步。

後から後から流れおちる涙が、止められないのと一緒。
もう手が届かない。

自分のものにはならない。永遠に。

自分が欲しいのは、あの人だけなのに……。

あとの人の腕の中にいられるなら、どんなことだつてしたのに……。

「清次郎……やま……」

お願い、私の前からいなくならないで。じつちを向いて。もつ一度だけ、最後に一度だけ、私を……アヤメを見て。

「ツバキなら……屋敷にはいないわ……」

消え入りそうな声で、なんとかアヤメは言った。とたんに、清次郎の足が止まる。振り返った彼の瞳の中にアヤメがいた。

……ああ、なんて残酷な人。

ツバキのこととなると血相を変えるのね。酷い。ひどすぎる。どうして……。

なんで、私じゃないの……？

アヤメは、あふれる涙を押さえ込むように顔を両手で覆つたが、耐え切れず、ついにそのまま声を上げて崩れ落ちた。

なぜかは分からぬ。直久は、いつの間にかそこにたどり着いた。体中がアヤメを探し出すためのコンパスになつたのではないかと思うほど、何かに引っ張られるようにして一人の元にたどり着いた。裏門の目前にして、泣き落ちるアヤメ。それを、冷ややかに見つめる青年。

その二人の間には、空よりも高く、地よりも深い隔たりを感じた。
「アヤメさん……」

不思議な感覚だつた。アヤメの心がなだれ込んでくる。彼を愛してしまつたこと。彼と逃げるために、今日のことを計画したこと。そして、ツバキとして彼に愛されようとしたこと。自分を殺して、ツバキになろうと決めたこと。

次々に、彼女の心が入り込んでくる。直久の心がアヤメに共鳴するように、自分が彼女になつてしまつたように。

悲しみ。妬み。怒り。孤独。不安。絶望。

そして、確信する。

彼女だ。自分を呼んだのは。

ツバキじゃない。アヤメのほうだ。

直久が、そう思った瞬間だつた。

助けて！ 私はここにいるの！

直久ははつとした。

今、一瞬、何か聞こえた気がした。アヤメかツバキの声だつた。しかし、アヤメは泣くばかりだし、ツバキはここにはいない。

(なんだ? 今の?)

「ツバキはどこにいるつていうんです、アヤメさん」
清次郎の声に直久は我に返り、一人を見ると、嗚咽をもらして泣くアヤメの肩を支えるように、清次郎がアヤメを立たせてやつていた。

「ツバキさんは大丈夫ですよ!」

直久は、アヤメに駆け寄りながら清次郎に伝えたつもりだったが、反応がない。やはり彼には直久の声も姿も意味を成さないらしい。しかし、アヤメは直久の声に顔を上げる。

「……直久さん?」

アヤメがそう声を上げたのと、清次郎が驚いたように目を見開いたのが同時だった。

「……ツバキ!」

(え!?)

直久はぎょっとした。清次郎がアヤメから手を離し、駆け出す。その様子を目で追うと、息を切らしたツバキの姿が目に入った。

「な、ちょっと、ツバキちゃん! 何で来たんだよ!—」

直久が、どうやら彼女は自分の後をずっと追いかけてきたのだと、気がつくのにそう時間はかからなかつた。

だが、やっぱり幼児と一緒に、一人で留守番なんてできるはずないよね、とも、納得せざるを得ず、がくりと肩を落とした。

「ツバキ!」

清次郎は実に嬉しそうな顔で、ツバキを抱きしめようとした。だが、その伸ばされた彼の腕を、ツバキは拒絶する。そして、アヤメを見て言つた。

「アヤメさん。どうしてここに?」

「…………」

直久はぞくりとした。ツバキが怖かった。彼女の顔が怒りに満ちているからではない。無表情だからだ。

あんなに今まで、いろいろと表情を変え、笑つたり、不思議がつ

たり、直久を心配そうに覗き込んだりと、表情豊かだった彼女の今
の顔から、なんの感情も読み取れない。まるで、人形のようだと直
久は思った。

と、それまでアヤメを見つめていたツバキの視線が、ゆっくり直
久に移動する。

(――――)

直久の全身を、悪寒が走り抜けていった。この悪寒は、初めてで
はない。

そう、これは あの悪霊のつ――

(まさか、そんな！　ツバキさんが！？)

恐怖に体中が岩のように動かなくなつた直久は、ツバキから田を
そらすこともできない。背筋を冷たいものが走つていく。

ふつ、とツバキの口元が不適に笑つたように見えた瞬間、ツバキ
は自分たちに背を向けた。

「私は戻ります。明日の儀式をするのは私よ、アヤメ！」

そう言って、彼女は屋敷へと走り出す。

「え、あっ！　ツバキ！！」

慌てて、清次郎が後を追つた。

直久も、後を追おうとしたが、小さく振り返るアヤメの手がしつ
かりと直久の洋服の裾をひつぱつって、前に進めない。
「い……いかないで」

このまま、ツバキが戻れば。

ツバキが生け贋になり、清次郎が自分のものになる。

そんなアヤメの心が、再び直久の心中に流れこんできた。

「……アヤメさん……」

確かに、このままツバキが部屋に戻れば、アヤメは生け贋になら
ない。でも、それは彼女の命を救つたことになつても、心を救えな
い。

自分を呼んだ彼女の魂は、命を救つて欲しくて助けを求めたのか？

(いや、違う。オレを呼んだ、本当の理由は……！)

自分を認めて欲しい。

ツバキはツバキ。

アヤメはアヤメ。

そう言つてほしい、自分が心から信じる人に。

直久がそう思つてきたように。

自分はおまけじやない。和久の残りカスでもない。

一人の人間として、ちゃんと認めてほしい。大事な人から。

(そんな 孤独を理解して欲しいからオレを呼んだ、違う?)

「ねえ、アヤメさん。君は本当はどうしたいんだ?」

「え……?」

直久はそう語りかけながら、ゆっくりとアヤメに歩み寄り、その肩にそっと手を置いた。

「ツバキちゃんをあの部屋に閉じ込めて、生け贋にさせたことが、本当に君のしたいこと?」

「…………」

アヤメは直久が何を言いたいのかわからない、という顔をした。それでも直久はかまわずに続ける。

「アヤメさん。やっぱり、俺さ。どんな格好をしていても、君がどんなにうまくツバキちゃんの振りしていても、アヤメさんはアヤメさんでしかないと思つ」

「……そんなことない。お父様やお母様は絶対に気がつかないわ」

「オレも双子の弟がいるから、わかるよ。入れ替わつて遊んだことは何度もある。でも絶対ばれるんだ。だつてね、ツバキちゃんががこの世にツバキちゃん一人しか存在していないように、アヤメさんだつて一人しかいなんだから」

アヤメは無言で直久から目をそらした。まだ納得いかなそうだ。

「じゃあさ、逆だつたら?」

「逆?」

「もし、何百つていう人がさ、清次郎さんの振りをしていて、それがもう、すっげえそつくりだつたとする。アヤメさんは、清次郎さ

ん捜し出すことができると思つ?」

「！」

アヤメは悔しそうに直久を見上げた。直久が何が言いたいのかわかつたようだ。

「でしょ? 君なら清次郎さんを見分けられるよね。大切な人だから。大好きな人だから。清次郎さんにとってはそれがツバキちゃんだつたんだよ。だから、アヤメさんが、どんなにうまくツバキの振りをこなしていても、清次郎さんにはバレてしまうんだ。ダメなんだよ」

「…………」

「アヤメさんを見つけてくれる、たつた一人の誰かが、必ず現れるから。その時に、アヤメさんがアヤメさんとして、胸を張つて生きていなきや。『これが私なのよ。何か文句ある!?』って

どんなに、他人に嘘を突き通して自分を偽つたとしても、自分だけにはその嘘を隠すことはできない。

自分は自分。

他人にはなれないのだから。

「やめようよ。オレもやめるから、一緒にやめよう。自分に嘘をつくのは。まわりに認められようと頑張つて、自分を押し殺すのは」直久は空を仰いだ。アヤメもつられたように天を見上げる。その瞬間に、彼女の瞳から一筋のキラキラとした涙が零れ落ちた。

「自分をもう少し好きになつてやろうよ。オレは弟みたいに人を救う力も無い。頭も悪いし、一族からは『ゴミかお菓子のおまけみたいな扱いさ。でもね、何もできない、誰も助けてやれないオレだけど、誰かを少しでも笑わせてやれることができれば、オレはそれでいいよ。それで十分、オレは生きている価値があるんだと、思えるよ

「……好きになれるかしら……こんな醜い自分を」

直久はアヤメを振り返り、にっこり笑つた。

「だって、君は十分に魅力的な女の子だよ。優しいし、笑顔が可愛い

アヤメは、直久の言葉に少しだけ表情を和らげた。

「今だつて、君はツバキちゃんの幸せを願つている。いや、ほんとうはずつとずつと願つてたんだ。あんな地下室に閉じ込められた姉をずっと心配して、出してあげたくて、でもどうしていいかわからない。そう、悩んで、悩んで、苦しみぬいてきた。そりでしょう？」

「……だつて……可哀相で……私のたつた一人の姉なの……でも、怖くてできなかつた……じゃああなたが生け贋になりなさい、って言われそうで……できなかつたの……」

再びアヤメははらはらと涙をこぼし始めた。

「それが普通だよ。オレが君でも、そう思つと思つよ。ま、その前に、オレは後先考えるのなんて苦手だから、まず暴動を起こすね。家をぶつ壊すつ」

直久はにかつと歯を見せて笑いかけた。それを見たツバキが泣き笑いになる。

「……でもさ、こんなのおかしいって思わない？ 生け贋なんて、本当に信じているの？ 止めるべきは、ツバキちゃんたちの駆け落ちじやなくて、生け贋の儀式のほうだと思うんだけどな、オレ」直久が何気なく言つた言葉だった。でもそれは、アヤメにとつては考えもしなかつたことのようで、まるで狐に摘ままれたような顔をになつた。

「え？ だつて何で死ななきやなんないんだよ。おかしいだりつ」生まれた瞬間に、十六歳で死ぬことが決まるなんて。

あんな地下室に閉じ込められなきやいけないなんて。

「……確かに」

アヤメはまっすぐに直久の顔を見た。そして、もう一度、はつきりと言つた。

「確かに生け贋なんて、おかしいわ」

「でしょ？ 生け贋の儀式 자체を無くせばいいんだ。誰も死ぬ必要はないし、逃げる必要もないんだよ」

「……そうね。やうなんだわ。でも……」

言葉を切つてアヤメが顔を曇らせた。

「そんなこと、できるかしら……お母様だつてずっと、生け贋を止めさせたいつて、泣いてらしたわ。でも『しかたないの』、『無理よ、止められないわ』って」

「やつてみたの？ オレ、何もしないくせに、『無理』とか『しようがない』とか言つてる人つて嫌いだ。だつてさ、やつてみなきやわかんぬくない？ やつて後悔するより、やらなくて後悔するほうが損した気分になるよ、オレはね」

直久は思つたことを言つただけなのに、アヤメは、再び、はつとした顔になつた。

「そうね……その通りだわ」

「え？」

「やらないで、『やつとけば良かつた』つてずつと思つているより、『やつてみてダメだつた。なら今度は』『ちだ』つて思つたほうが、次があるわよね」

「そ、そ、そ、そ、そすがアヤメさん！ オレが言いたかつたのはソレよ」

「まあ、調子いいのね！」

ふふふ、とアヤメが笑顔になつた。

何度か見るアヤメの笑顔とは少し違つて、本当にすきりとした青空に浮かぶ暖かな太陽のような笑顔だと直久は思つた。

「いい顔」

「え？」

「惜しいなあ、君がもうちょっと若かつたら、オレの女にしたのに」

「まあ、若かつたらつて同じ年じゃないの？」

「うん、まあ、さつと君が百五十歳くらい年上かな」

「……ええー？」

アヤメは目を丸くし、絶句した。そして、すぐに声を上げて笑う。直久もにつじりと微笑んだ。

よかつた。その笑顔で、オレも救われた。そんな気がして、直久は胸がほんわり温かくなつていいくのを感じた。

「……私、ツバキを助けるわ。でも、逃がすためじやない。一人で父を説得して、生け贋なんてやめさせる」

「うん」

直久は、柔らかな表情でうなずいた。

「やるわ！ 何とかする。時間はかかるかもしれないけど。まずは、ツバキを私の部屋に連れていくわ。それで、朝になつたらお父様のところへ一人で行くわ」

そして、直久の方をしつかりと見て、言った。

「見てて、直久さん。まずは私が、やつてみせるから。次はあなたの番よ。約束ね！」

きつぱりと言い切つた彼女の顔は、すつきりとしていて、本当に綺麗だった。

直久とアヤメはツバキの部屋にたどり着くと、扉の前で顔を見合させ、一呼吸おいた。

「いきましょう」

直久は深くうなずいた。それを受け、アヤメがその部屋の扉を一気に押し開ける。

直久がアヤメの後に続いて、足早に階段を降りて行くと、ベッドに腰をかけたツバキと、彼女を必死に説得する清次郎が見えた。

その様子にさすがの直久も驚いた。だいぶ動搖しているようで、オロオロとツバキの前を行つたり来たりしている。

直久も彼をよく知つてゐるわけではないが、ついさつきまでの清次郎とはまるで別人に見えた。こうも人はパニックになると、回り

が見えなくなるものなのかなと、直久は一人しみじみとなってしまつた。

「……アヤメ」

ツバキはしつかりとアヤメを見据えた。そして、直久とも目が合う。その瞬間、あの悪寒が直久を襲う。

「ツバキちゃん……君が つー？」

直久は最後まで言葉を続けることができなかつた。突然ツバキの目が妖しく赤い光を放つたのだ。

(なつー?)

次第にツバキの背後に何かが見え始める。それは部屋の闇より更に深い闇が霧のようにうごめいていた。

呆然とその闇に目を奪われ、恐怖に飲み込まれそうになりそのままを瀬戸際で耐えていると、不意に不気味な声が直久の耳に飛び込んできた。

ジャマヲ スルナ

(これは、悪靈の声! ? やつぱり……ツバキちゃんがあの悪靈なのか! ?)

ということはここは悪靈であるツバキの記憶が作り出した世界だといふのか。

直久はやつと自分のなすことだが、なさねばならぬことがはつきりと見えてきた気がした。

今、自分が目にしているのは、まさにツバキが悪靈になるまでの出来事で、このまま直久が何もせずにいれば、ただツバキが悪靈になるのを繰り返すばかり。

どこかで、自分がこの悪循環を断ち切らねばならないのだ。

では、どうやって断ち切る？

とにかく落ち着こう、と直久は唾を飲み込もうとした。が、できない。そればかりか、口も顔も動かせない。

(あれ?)

直久はまさか、と思い、足を動かしてみようとおもつた。だが、どうやっても自分の意思では足が動かせない。いや、指一本動かなによつだ。

(まじかよつ! -)

アヤメに助けを求めよつとした。

「

が、声もでなかつた。これは、本格的にやばい気がする。気がするが、同時に悪靈が自分が邪魔に思つてゐる何よりの証拠ではなかろうか。

(ツバキちゃんつ! -!)

心の中で、叫んでみたが、ツバキからの応答も、わずかな表情の変化も見受けられない。これでは、直久の声が届いてゐるのかどうかもわからぬ。

このまま。動けないまま。

自分は、何もできずにツバキを助けられなかつたらどうなるのだろつ。

そんな、不安ばかりがどんどん膨らむ。モヤモヤとした気持ちを払拭するために、いつもなら、水をかぶつた犬のように、ぶるぶると頭を振り回すといふのに、それも今はできないときた。苛立ちにもにた焦りの中、直久は、じつとツバキを見つめる。

「もう、この部屋にいる必要はないわ」

アヤメがそんな直久にはまったく気がつかずに、ツバキに対峙する。

「どうこいつ」となの？ 儀式は明日よ？

「それは後で話しましょ。とにかく外へ出で

「だめよ。儀式が行われなければ、お父様が悲しむわ

アヤメは小さくため息をついた。

「だから、私が代りにここにいるから。やつかもそいつたじゅない」

「…………わかつたわ」

ツバキは意外にあつさつとベッドから立ち上がった。それで、直久は、違和感を感じた。

……おかしい！

何が、どうおかしいのかは説明できない。でも、直久の肌がちくちくと、ツバキの中の悪霊を感じ取っている。ツバキの中の黒い闇を察知している。それだけは、断言できた！

直久は必死でもがく。つもりだった。実際には、髪の毛一本動かせていない。

なぜ。

どうしていつも自分は、大事な時に何もできないのだろう。

今。

やらなければ。

そう感じているのに！

見ているしかできないのか。

また自分は、何もできないのか。

直久が胸を締め付けられるような痛みを感じた。その痛みがどんどんと強くなる中、ツバキが清次郎に肩を抱かれながら、直久の、つまり部屋の出口へ、と歩み寄ってくる。

（ダメだ、ツバキちゃん！！ オレは君を助けに来たんだ！ 悪霊になつたらだめだっ！！）

唯一動く眼球の筋肉をフル稼働させ、ツバキを田で追つた。

（くつそう！ この呪縛さえ解ければっ！！）

ついに、ツバキが直久の横を通りすぎる瞬間、再びツバキと田があつた気がした。

そして

。

（なつ！？）

直久は目を疑つた。見間違いだと思ったかった。

だが、確かに見たのだ。

彼女が、にやりと笑つたのを

大きな虫が体中を這いずり回るような、ぞくぞくとした寒気が直久を襲う。

オマエモ ノコテ 死ヌガイイ

胸が、どくん、どくんと大きく脈打つた。

再び直久だけに聞こえた悪靈の声に、恐怖よりもさらに強く、嫌な予感がした。

悪靈は今、なんと言つた？

おまえ“も”ここで死ね！？

「行くわよ、直久さん」

続いて直久の横を通過したアヤメは、階段を途中まであがつたところで、直久がついてこないのに気がついたらしい。不思議そうな声が聞こえた。

直久の体はピクリとも動かない。それなのに、額から嫌な汗がたらりと垂れていった。

「直久さん？」

危険。

キケン、キケン！

体中が、警報を大音量で鳴らしているというのに…！

この危険をアヤメに伝えるすべがないなんて…！

「アヤメ」

ツバキの声がした。振り返らなくても、直久にはその恐ろしい無表情な顔が、手に取るように分かつた。

「ありがとう」

「ツバキ？」

困惑したようなアヤメの声。

「え!?

あつ、ちょっと、鍵を返してっ!

「ありがとう、もう一人のツバキ。あなたはもう要らない」

「え？ わ、わ、わめせり……」

直久の背後で、争う声が聞こえたと思うと、ドンという鈍い音が

「やめやめやめやめ

L

頭が割れそうな悲鳴が、部屋の冷氣を切り裂く。かなりの質量のあるものが転がり落ちてくる重い音。後続く、慌てて部屋を出て行く一人分の足音。

それでも直久の体は動かない。

アヤメにいつたい何があつたというのだ！

(畜生、アヤメさんつ！？「アヤメさんつ！！！」
動け、動け、動けええええええええええええ！…)

パ
リ
ン

心中で必死で叫んだ瞬間、まるで鏡でも割れるような、大きな音が直久の頭の中で響いた。ふわりと、体が軽くなつたように感じたかと思うと、バランスを失つた直久はその場に崩れ落ちた。

間髪いれず、直久は背後を振り返る。階段の下に横たえる赤い着物が目に入った。

「アヤメちゃん...」

慌てて駆け寄り、抱き起こす。アヤメがかすかに、うめき声を上げた。

よかつた生きてる。

小さく息をついた。

「アヤメさん、しつかりして！」

「大丈夫よ、直久さん……あつ！」

体を起こして、立ち上がるやつとしたアヤメは、小さく悲鳴を上げた。

「どうしたつ！？」

「足をひねったみたい……」

なんだ、その程度か。直久は大きな脱力感を味わった。
とりあえず、無事でよかつた。本当によかつた。
せつかく、いい顔をするようになつたのだから。アヤメには少し
でも長く笑つていて欲しい。素直に直久はそう思うのだ。
「それにもしても、どうして階段から落ちたの？　なんかもめてたよ
うに聞こえたけど」

直久が聞くと、アヤメは顔を曇らせた。

「ツバキに、突き落とされて……鍵も取られたわ」

直久は、自分の頭から、さあつと血が引いていくのがわかつた。

悪霊の言葉が意味していたのは、このことだつたのではないか？

「閉じ込められた！？」

直久の言葉に、アヤメも顔色を変えた。ひねつた足を這つようにして階段をあがり、扉の前に急ぐアヤメ。

「開かないつ！　開かないわつ！！」

「まじかよ……」

アヤメは完全にパニックになつているようだつた。このままでは、清次郎がツバキを連れて逃げてしまう。そうなつたら、自分が生け贋にされる。そんな恐怖が直久にも流れ込んでくる。

怖い！　怖い！！

静かな闇に支配された部屋。

怖い。

嫌、こんなところにいたくない。

誰か、お願いだから出して！ お願いよ！

そんな悲痛な心の叫びが、直久を襲う。苦しい。胸が痛い。心が

壊れてしまいそうだ。

「いやあああつ！！ ツバキ、ツバキ！ 誰か、助けてつ！！」

アヤメは何度も扉を叩いた。何度も、何度も。

直久はそんなアヤメの心に完全に同調していた。

胸が痛くて、息も出来ない。勝手に目頭が熱くなつてきた。

死にたくないー

死にたくない！！

ツバキを助けようと思ったのに！！

どうして私が死ななければ

ひどい。こんなのがひどい。

嫌だ、ここから出してーー

私は死にたくない——つ！！

お願い、出して！」「から出してえええっ！」

アヤメさん、落ち着いて！！

直久は、泣き叫ぶアヤメを力い

クになつてゐるアヤメは、余計に苦しそうに咲いて泣き叫んで。

「いやあああ――――う――」

「アヤメさんっ！！ オレが助

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ମହିନେ ପରିଚୟ

だから、そんなに、心をなくすほど、壊れそつなほど悲しまない

七

やへき、君は笑っていたじやないか。

「お願いだ、アヤメさん。オレを信じて……」「

ほつり。
。

アヤメの頬に暖かな雨が落ちてきた。
涙だ。

「…………なお…………ひささん…………？」

泣いているの？と驚きに目を見開いたアヤメが直久を見つめ返すと、直久の潤んだ瞳にふわりと包み込まれたような気がした。

「君は、オレが助ける。そう約束したろ？…………？」

直久は、アヤメの頬を両手で挟むようにして、アヤメの涙をふき取った。

「だから、君は笑って。オレのために」

直久は、そつとアヤメの瞼に口付けした。閉じたアヤメの瞼から、再び、ひと筋の涙がこぼれた。その雫は部屋の薄暗いランプを反射してキラキラと輝いて、床に落ちていった。

「…………うん」

弱々しく直久に微笑みかけたアヤメは、どんな高価な宝石よりも美しく感じた。

寒椿（3）

時刻は深夜2時を回っている。いつの間にか、日付けは、生け贋の儀式が行われる予定の日になっていた。

アカネはベッドの上で、何度も分からぬ寝返りを打った。今日は儀式の日。アカネにとって、もう一人の姉であるツバキが、神に召される日だ。

幼い彼には、一緒に遊んだ記憶のない姉だとは言え、大好きなアヤメと同じ姿をしているツバキの死は、やはり受け入れがたい。

「あ…………」

アカネから、今夜何度もため息がこぼれた。ふと、窓の外を眺めると、雪が音もなく降り注いでいることに気がついた。いつから降っていたのだろう。

「…………？」

その景色の中で、何かうごめくものを見つけ、アカネは目を凝らす。よく見えない。

しかたなく、窓辺に張り付くよつとして、もう一度目を凝らす。

「あれは！！」

清次郎と……連れているのは、髪の長い女性……まさか……アヤメ！？

「た、大変だ！！ 清次郎お兄ちゃんが、アヤメお姉様を連れて行っちゃう！！ お父様っ、お父様ーーっ！！」

アカネは慌てて部屋を駆け出した。

すぐに、アカネの報告は、父である屋敷の主人を通じ、あつとうまに全村人へと伝わった。

屋敷の主から村人たちに清次郎とアヤメの行方を捜すように命令が下つたのだ。男が抵抗する場合、殺してもかまわない、しかし娘は生け捕りにしろ、というもの。そのため、村人たちの全員に屋敷の主から銃が貸し出された。

彼は、娘の心配をするでもなく、

「そのうち、どこかの金持ちに嫁がせようと思つていたが、なんて恥知らずな。よりによつて画家なんかと駆け落ちするとは」

と、苦々しく言い捨てた。

彼にとつて、娘はツバキにしても、アヤメにしても、御家発展のための手駒でしかない。だが、絵描きなんかと駆け落ちしたという傷を負つたアヤメは、金持ちの家に嫁に出すという望みを失つてしまい、駒としては使い物にならない。これが、腹を立てずにいられようか。

そもそも、あの男もあの男だ。高額を支払つてまで雇い入れてやつたというのに、なんと恩知らずな。こんなことならば、娘思いの父親なんぞ、演じなければよかつた。

ブツブツと不満を垂れ流しにして、彼は銃を片手に、屋敷の外へと出た。

雪がひどく降つてはいても、今さつき、付けられた一人の足跡を隠すには、足りない。しかも、追われているとは気がついておらず、女連れ。追いつくのは時間の問題だ。

「行くぞ」

父は、背後にいる村人たちに声をかけ、積雪の中に足を踏み出した。

だが、このとき、誰も考えもしなかつたのだ。いくら、発見された娘が白い着物を着ていたとしても。まさか、外にでているのがツバキの方で、あの地下室に閉じ込められている方こそが、アヤメであるとは。

直久はツバキの部屋の扉からすり抜けると、ふわふわと落ちてくる粉雪を頬に感じた。なぜか、そこにはもう屋外だった。林道らしい。

何が起きたのかわからず、一瞬放心してしまつ。慌てて振り返るが、先ほどまで居たはずのツバキの部屋の扉は、どこにも見当たらぬ。

あるいは一面の銀世界。

ただひたすらに降り積もる雪。

「ええっ!? ワープしちやつた?」

まさか、用済みになつて現代に戻されたなんてことはないだろうか。一瞬期待した直久だが、遠くに、豆つぶよりも小さく一つの人影が見えて、それがだんだんと誰だかわかつてくると、完全にその期待は消え去つた。

人影は、深い雪に足をとられながらも、必死に走つてこちらへ向かつてくる。いや、こちらへ逃げているのだ。

「……………ツバキちゃん」

ついに目の前に現れた少女を、直久は静かに見据えた。アヤメそっくりな少女。だが、アヤメではない少女。

少女はピタリと足を止める。

ところが、止まつたのは彼女の足だけではなかつた。雪も宙に浮いたまま、動かない。よく見るとツバキの隣にいる清次郎も、走る姿勢のままピクリとも動かない。止まつている。まるで、直久たちの周りだけが、時が流れていないように見えた。

ここがツバキが作り出した世界だとしたら、何がおきてもおかしくないだろう。直久は妙に納得していた。だが、今はそんなことに気をとられている場合ではない。

ツバキが悪靈だと分かつた今、直久のやるべれりとは決まっている。

ツバキを救う。悪靈になじさせない。そして、アヤメも救う。あの部屋から助け出す。ついでに生け贋の儀式もぶつづぶす。これしかない。

「ツバキちゃん……帰ろう」

どんな硬いものでも貫いてしまうのではないかと思つほど、鋭い目つきでツバキが直久を睨んだ。その気迫に押され、思わず「ぐく」と唾を飲む。

「帰つて、それで私に死ねといつの？」

先ほどまでのツバキとはまるで別人だつた。抑揚のない声、無表情な顔だといふのに、彼女の心の叫びが体中からあふれていふように感じられた。

私は悪くない。

私は死にたくない。

なんで私が死ななくてはならないの？ 私は彼ともつと一緒にいるのよ。

ツバキの全身がそう叫んでいるのが痛いほど伝わつてくる。

「…………ツバキちゃん。違うよ。君が死ぬ必要はないんだ」

「そうよ、アヤメが代りに死んでくれるから、私は死ぬ必要なんてないわ」

そう言つたツバキの目が赤く輝きだした。

（悪靈が表に出てきているのか？ もしかして、今、ものすごいチャンス？）

ツバキが悪靈だとわかつてから、直久にはずっとその理由がわからなかつた。

直久がついさつ今まで見てきたツバキは、純粹無垢を絵に描いたようだ。まるで、幼児のように、見るもの全てに目を奪われ、笑顔の堪えない少女だった。

しかし、目の前にいるツバキが本当のツバキだとすると、それら

は全て偽りの姿。嘘をついていたことになる。

本当は、ツバキは全てを知っていたのだろうか。

自分はただ死に行くために生まれてきたこと。その死を受け入れやすくなるために、薄暗い部屋に監禁されていたこと。それは決して、人間らしい生き方ではないということ。

知っていたのだとすれば、それほど恐ろしいことはない。自分の運命を呪い、ほぼ同時に生まれた妹に対して、妬みや恨みを抱いていてもおかしくない。

どんなに苦しかつただろう。

誰一人自分の味方はいない。

死んで当たり前、と誰からも思われる人生なんて、直久だつたら耐えられない。

そして、肉体が滅んだ今も、こうしてあの地下室に心が囚われたままだとしたら……。

直久は、ぎゅっと拳を握り締めた。

自分が。なんとかしてやりたい。この手で救つてやりたい。

これ以上ツバキが、そしてアヤメが、泣き叫びながら助けを求める続ける姿を見てはいられない。

助けるんだ。

二人を、この手で。

約束したんだ。助けるつて。

まっすぐにツバキを見据えた直久の目に、強い光が灯った。

「逃げる必要なんてないんだ。儀式を中止しよう」「え？」

思いもよらなかつたのか、ツバキの顔に小さな戸惑いが見える。

「アヤメさんが言つてたよ。ツバキを助けたい。だから、お父さんを説得して、生け贋をやめさせるんだって。ツバキと一緒に説得するんだって」

直久はじつとツバキの返事を待つた。

ツバキは直久の真意を伺おうとしているかのように、こちらを見

つめている。

近くの木の枝から、自身の重みに耐えかねた雪が重力にしたがつて、どさりと落ちた。

「ふふ……」

ツバキが短く笑った。

「アヤメがそんなこと言つはずないわ。アヤメが望むのは、私が生け贋になること。アヤメは自分が助かることしか考えてないのよ」「そんなことないっ！」

直久は思わず声を荒げた。が、間髪いれずに、「あなたに何がわかるのよっ！」とツバキの悲鳴のような声が返ってきた。

「アヤメが私を助けたい？ 笑わせないで。あの子がこの十六年間、私に何をしてきたと思う？」

ツバキの顔が、苦々しくゆがんだ。

「たしかに、毎日、毎日、アヤメは私のところに来たわ。でも、顔を出すわけでも、話し相手になるでもない。ただ、私が生きているかそれを確かめるために。なぜか分かる？ 私が死んだら生け贋になるのはアヤメだからよ！ 自分が死ぬのが嫌だから、ただそれだけなのよ！！」

直久はぞくりとした。ツバキの背後に再び黒い靄が立ち昇り始め、不気味にうごめきながら、それはみるみるうちに成長し始めていたのだ。

ツバキの表情が、すっと無表情に戻った。

「言つたでしよう、邪魔しないでつて！」

直久が「ごくりと唾を呑んだのと同時に、ツバキの目が赤く、妖しく閃光を放つ。その瞬間、ツバキの背後から黒い靄が、一斉に直久にむかって伸びてきた。あつという間に直久は靄に捕らえられ、一気に飲みこまれた。

「うわああああ

叫びながら、直久は目をぎゅっと閉じた。反射的に、次に来るだろう衝撃や痛みから身を守るために、体が反応する。

あら、ツバキが動かないわ

体にどこも痛みを感じないまま、代りに直久の耳に飛び込んできたのは、幼女の声。

完全に意表をつかれた直久は、目をつぶつたまま「……はい？」と首をひねった。いくら待っても、何も事が起きなううので、おおそる瞼を上げてみる。閉じている時とさほどかわらない闇が見えた。

あたりを見回すまでもなく、幼女が椅子に座っているのが直久の目に飛び込んできた。まるで闇の中に、そこだけスポットライトでも照らされているかのように、浮き出して見える。

それにしても、ここはどこだろ？ 首を左右にひねって確認するが、どこまでも闇が続くばかりだ。

寝ているのかしら？

五、六歳だろうか。その横顔が、すぐに直久の記憶の中の人物に思い当たり、また白い着物を着ているために、幼女はすぐに特定できた。ツバキだ。

よく見れば、ツバキは膝の上に置かれた鉢を、食い入るように見ている。

(金魚鉢?)

鉢には水がはられ、紅白の金魚の姿があつた。しかし、白い方は水面に仰向けになつて浮いている。

記憶だろうか。自分はツバキの幼い頃の。

直久は、まるで再現映像を見ているかのような感覚にとらわれていく。

ふと、自分に何か伝えたいことがあるのではないか、という考えが直久の中に沸いてきた。

なぜかわからないが、直久にはツバキから殺意を感じない。さつき対峙してから、ずっと。

だから、きっと何か直久に分かつて欲しいことがあるのではない

か、そう思えてしょうがないのだ。

「ねえ？ どうして動かないの？」

不意に幼女がこちらを振り返った。

直久と目が合つ。その拍子に心臓が跳ね上がった。

見えている。

自分の存在が認知されている。どうなっているのだらう。ツバキの記憶じやないのか？

直久が戸惑いから反応できずにいると、ツバキが椅子を降り、直久に走り寄ってきた。

胸の鼓動が早くなる。どうなっているんだ。何度も問いかけても、答えは出ない。

「ほら、見て。ツバキだけ動かないのよ。アヤメは動いてるでしょう？」

「くくりと直久の喉が鳴つた。

言われるまま、直久は幼女の両手に抱えられた金魚鉢と、彼女の顔を数回、視線を往復させる。

なるほど、赤い金魚と白い金魚にそれぞれ“アヤメ”と“ツバキ”という名をつけたのだな、と納得した。しかし、その白い金魚がすでに死んでいるのは、誰の目にも明らかだ。

そう、死んでいるのは“ツバキ”……。

直久は、どうしてもそれを口にすることが出来なかつた。

「……これ、どうしたの？ 誰にもらつたの？」

「お父様よ。お父様が、くれたわ。アヤメとツバキだつて

「……」

なんて事を。

無神経にもほどがある。

よりによつて双子の名をつけるなんて、どうしてそんな悪趣味な

「ことができるんだ。

ぎりりと奥歯をかみ締め、直久は思わずツバキから田をそらした。

「ねえ、どうしてツバキは動かないの？」

「ツバキはもう……動かないよ」

「どうして？」

直久は、搾り出すように、言葉をつむいだ。

「死んでしまっているんだ」

静寂があたりを包む。

ツバキの反応がない。おかしいな、どうしたのだろう、と直久が思い始めた時だった。

先ほどまでは違つて、少し落ち着いたツバキの声が返ってきた。

「そう。これが死ぬことなのね」

はつと、直久は息を呑んだ。目の前のツバキが、あきらかに成長していたのだ。中学生くらいだろうか。

直久にはわけがわからなかつた。先ほどの幼女の時の記憶とは、また別の記憶に飛んだのだろうか。

明らかに動搖の色が濃くなつた直久に、ツバキは容赦なく質問を続けた。

「人は死んだらどうなるのかしら。ねえ、私は死んだらどうなるの？」

怖い。

直久はそう思った。

決して、殺されそうになつてゐるわけでも、怒られているわけでもない。

無表情な、人形のように美しいツバキの姿を、怖いと感じた。

動けないでいる直久から、ツバキの方が先に視線をはずす。そして、立ち上がり、右を向いた。その横顔の先を直久は目で追う。ぼんやりと、部屋の入り口が見えた。そうか、ここはあの地下室なのだ、とそこで初めて認識を改める。

「最近、お父様もお母様も、いらしてくれないのよ。きっと死んで

しまつからなのね。もうすぐ、この部屋から居なくなるからだわ。でも、だったらどうして人は生まれてくるのかしら。この部屋にずっといるために生まれてくるの？ 儀式で死ぬために生まれてくるの？

寂しげに入り口を見つめるツバキ。

「アヤメもそうなかしら。アヤメも私と同じようだ、思っているのかしら。寂しい思いはしていないかしら。暗闇で怖がってはいいなあしら。アヤメ……私の妹……もう一人の私……」

ツバキは、直久を振り返った。

「ねえ、アヤメに会いたい！ ちょっとでいいの。アヤメにあわせて！！」

ツバキに急に詰め寄られ、直久はぎょっとする。しかし、すがりつくように泣き出されれば、やるせない気持ちで、胸が張り裂けそうになる。

どうあることともできない。どうしてやることもできない。ツバキを毎日世話していたという、口の聞けない老婆はきっと今の直久のよくな気持になつたにちがいない。

肩を震わせて、泣き崩れるツバキ。

直久はいてもたつてもいられず、ついに、ツバキを力いっぱい抱きしめた。

なんて言葉をかけていいかわからぬ。だから、ただ、ただ、抱きしめた。

やっぱり、ツバキは知っていた。

もうずっと、死への恐怖におびえながら、この闇と孤独に耐えながら、長い長い心細い時間を過ごしてきたのだ。

アヤメもきっと自分と同じような境遇にある。そう信じて、心配しながら。

(もういいよ……もういいんだ)

もう誰も苦しむ必要などない。

もう生け贋なんかで死ぬ必要はないんだ。

ツバキもアヤメも、好きなことをして、好きなところで、好きなように生きればいい。

「わがまま、そう 我が心のままに。」

「そうだったのね、アヤメはこんな暮らしをしていなかつたのね」直久はぎょっとした。自分の腕の中にいるツバキが、驚くほど低い声で、ぼそりとつぶやいたのだ。

思わず引き離したツバキの顔を覗き込み、直久は目を見開いた。また成長している。目の前にいるのは、今の、十六歳のツバキだつた。

「今度は、いつたいどんな記憶だというのだろう。」

少しだけこの状況に慣れてきた直久は、じつとツバキを見守ることにした。

「……外の世界は、本当にすばらしいのね。本当に。私、雪も食べてみたのよ！ ああ、もつともつと、外の世界で生きていたらどんなに素敵かしら」

直久はあれ、と思つた。目を輝かせるようにして何やら物思いにふけるツバキの顔を、じつと見つめる直久。

「外の世界？ 雪を食べた？」

これはいつの記憶だろう。そう考えたが、すぐに先ほど直久と一緒に逃げた時のことだと気がつく。

「でも、清次郎さま。逃げるなんてそんなことできるわけないわ。お父様が困るもの」

「清次郎？」

明らかに、自分にむかつて清次郎とツバキが言つた。

ツバキは、直久を清次郎だと思って話しているということだらうか。

つまり、これは、ツバキがアヤメと清次郎の言い争い現場に鉢合わせし、その後ツバキが清次郎と一人で部屋へ戻った時の記憶だということだらうか。

「でも、そうね。アヤメが私の代りに生け贋になつてくれれば、逃

げられるかもしれない。私とアヤメが入れ替わればいいのよ。そうすれば、私は清次郎さんと、これからもずっと一緒にいられるわ」直久はもうツバキの顔を見ていられなかつた。

そう、こうして、ツバキはアヤメをあの部屋に閉じ込めたのだ。今まで、自分と同じように、別の地下室に閉じ込められて生きてきたのだと信じて疑わなかつた妹は、自分とはかけ離れた、天国のような世界に生きていた。それを知つてしまつた。

どうして、自分がだけが、こんな思いをしなくてはならないのか。

そう思つたに違ひない。それを証明するように、ツバキは続けた。

「今までの私の苦しみを、味わつて貰わないとね」

ふふつ、と可愛らしい笑みを浮かべるツバキに反して、直久は青ざめ縮み上がつた。

どうして、清次郎は彼女を止めなかつたんだろう。怖くなかったのだろうか、アヤメを殺す共犯になつてしまつことが。大切な人に殺人を犯させてしまうことが。

直久はそう思つたが、すぐに首を振る。止められなかつたんだ。きつと、こうなつてしまつては、誰であつても止められなかつたのだ。

「ねえ、直ちゃん。あなたもそう思うでしょ？」

え？

急に名前を呼ばれ、直久は固まる。

「あなたをここに呼んだのは、私よ。あなたを必要としていたのは私。べつに、私に協力してくれるのなら、あなたじやなくとも良かつたのだけど、結果的にあなたで正解だつたかもしれないわね。ありがとう」

そう笑つて、ツバキは直久に背を向けた。

ひんやりと、直久は自分の頬に何か冷たいものが触れた気がした。雪だ。

いつの間にか闇が消え、代りに銀世界が直久の視界いっぱいに広がっている。

「さあ、ツバキ！ 急いで！！」

声のほうを見ると、ツバキの手を引いて清次郎が直久の前を通過しようとしている。

ツバキの記憶の呪縛が解け、直久の周りの時間が元に戻つたらしい。

一瞬、直久の前を通り抜けようとするツバキの視線が直久を捕らえた。

邪魔をしないで。

このまま行かせて。

強い意志を直久は感じた。

だが、直久は両手の拳に力を入れる。

「ダメだ！ 今逃げても、何も変わらないんだ！」

声の限り、直久は叫んだ。

「あっ！」

まるで、直久の思いがそうさせたかのように、ツバキが直久のすぐ側で足を滑らせ、転倒した。清次郎が慌ててツバキを助け起こそうと手を差し出す。

（今だ！ 今しかない！）

直久はそれが最後のチャンスだと察した。

寒椿（4）

「アヤメさんは、ただのんびり生きてきたわけじゃない。ずっとずっとツバキちゃんを助けたかったんだよ！！でも、怖くてできなかつたんだ」

清次郎の手を取るのも忘れたように、ツバキが直久をじっと見つめている。

「一人ではできないから、だからっ！！アヤメさんはツバキちゃんと一緒にならできるって、一緒に説得しようってっ！！」

「嘘よっ！！」

直久のことが見えていない清次郎は、ツバキが突然叫びだしたので、びっくりと体を硬直させる。

それでもかまわず直久は続ける。

「嘘じやない！！だつたら、なんでアヤメさんは戻ってきたと思う！？」

ツバキの顔に小さな動搖が見えた。

「あのまま、アヤメさんが君の部屋にもどらなかつたら、君はこうやって逃げることができなかつたはずだ。でも、なんでアヤメさんはわざわざ君の部屋に行つたと思う！？そのまま朝まで放つておけば、ツバキちゃんが生け贅になるつてわかっているのにっ！！」

あの時、アヤメは戻る必要などなかつた。ツバキを助ける気持ちがなければ、生け贅になるために部屋に戻つたツバキを追つて、ツバキの部屋を訪れる必要などなかつたのだ。

再びツバキを部屋に閉じ込めさえすれば、予定通り儀式はツバキを生け贅として行われるのだから。

それでも、アヤメは行つた。

「君を、助けたかったんだ」

「…………うそよ…………」

ツバキの視線が、頼りなげに宙をさまよう。

「嘘なものか!! あの時、アヤメさんは君に何て言つた…? もうここに居る必要などない、そう言つただろう! ?」
「でもつ!!」

ツバキは直久をしつかりと見据えた。その瞳にいっぱいの涙を浮かべて。

「生け贋は……アヤメがかわりにやるって……言つていたわ」「そうでも言わなきゃ、君はある部屋を出よつとしない、そう思つたんだろう? アヤメさんは、君を自分の部屋に置うつもつだつたんだよ」

「……アヤメが……私を……?」

直久は息を短く吐いた。肩の力が抜けた。

「そうだよ。だって、君たちは双子だろう。君がアヤメさんを心配するのと同じように、アヤメさんだって君の事をずっと心配していに決まっているじゃないか」

よく似た姉妹なのだから。

「顔かたちだけじゃない。お互にを思いやる、優しいところまで。戻ろう、アヤメちゃんのところに」

直久は柔らかく笑つた。

「でも、私……アヤメにひどいことを……」

「分かつてくれるよ……君の妹だろう?」

いたずらっ子のように直久が微笑みかけると、ツバキはつられて口はしを少しだけほころばせた。そして、視線を清次郎に移し、柔らかに微笑む。

「清次郎さま。行けないわ……妹を助けなくては」

「え? ツバキ! ?」

一人わけが分かつていない清次郎は、きょとんとしたままツバキに手を引かれるよつに、屋敷の方へ一、二歩足を運んだ。

その時だった。

「早く、あそこから出してあげ

ツバキの顔が瞬時に凍りつく。

「

「居たぞっーーっ！！」

直久の目にも、それははつきりと捉えられた。純白の雪の絨毯をぐちゃぐちゃに汚しながら、銃を持つてツバキと清次郎を取り囲もうとする村人たちの姿が。

ツバキたちは、あつという間に村人に取り囲まれた。

「どこへ行く、アヤメ」

最初にツバキに声をかけたのは、父親だった。しかし、その顔は、今までツバキに一度も見せたことの無いほど、恐ろしく怒りに歪んでいた。

「大切に大切に育ててやったといふのに、こんな男とどこへ行こうというのだ」

「お、お父様？」

「さあ、帰るぞ。お前のような、しょうもない娘は、遊廓にでも売り飛ばしてやる。そうすれば少しは金の足しにもなるうよ」

鬼のような形相の父に腕をつかまれ、ツバキは震え上がった。その父の手を清次郎が振り払う。

「あなたは、自分の娘をなんだと思っているんですか！！！」

「黙れ小僧！！　ぶつ殺してやるっ！！」

怒り狂つた父が、清次郎を突き飛ばした。清次郎は雪の上に投げ倒される。その清次郎に向かつて、父が銃を構えるのが目に入った。全ての動きがツバキにはゆっくりに見えた。

撃たれる！！

清次郎さまが撃たれる！！

私に、外の世界を教えてくれた。外の世界に連れ出そうとしてくれた、大切な人が、殺されてしまうっ！！

「やめてええええええっ！」

ツバキが清次郎と父の間に飛び出したのと、父が引き金を引いたのが、ほぼ同時。

ズギューン……

銃声だけが、雪の作る静寂の世界を引き裂いた。

一瞬の間を置いて、ツバキの体が傾いた。ゆっくり、ゆっくり。

仰向けに倒れていくツバキ。

長い黒髪の一本一本が、粉雪と共に宙を舞う。

「ツバキ　つ！」

名前を呼ばれている。

大好きなあの人人が、自分の名前を呼んでいる。

返事をしなくては、と思った。思ったのに、どうして声が出ないのだろう。ツバキには、自分の体に力が入らないのが不思議でしょうがなかつた。

「ツバキっ！　ツバキっ！！」

清次郎の息を呑む音が耳元で聞こえたかと思うと、ふわりと自分の体が彼の腕に収まるのがわかつた。そして、心配げに自分を覗き込む彼の顔が目の前に現れる。

（よかつた、無事なのね。でも、泣かないで。私は、どこも痛くないわ。本当になんともない。大丈夫だから、そんな顔なさらないで）そう伝えたいのに、口が動かない。

本当に自分は、どうしてしまったというのだろう。

「ツバキ……だと？」

そこへ、驚きに満ちた父親の声が聞こえてきた。目の前にいる娘が、白い着物を着ていてこと、ようやく気がついたのだ。

「お前、ツバキを連れ出したのか！？」

父の声にあつという間に、満ちていく憎悪。

吐き捨てられた、言葉。

「 おのれ——つ——！」

（やめて、お父様！！ 清次郎さまを殺さないでっ……）

ズギュン ズギュン、ズギューン！！

銃声が再び聞こえ、ツバキの大好きな人の瞳が大きく見開かれた。そう聞く間も無いくらいの、わずかの間をおいて、彼の体がぐらりと傾く。

仰向けに倒れていく姿を、ツバキは必死で目で追った。

そんな！

嫌よ、嫌！！

清次郎さま、死んでは嫌よ！！

いやああああああああっ！！

ドサリ。

完全に沈黙した清次郎のたてた重たい雪音だけが、ツバキに絶望を告げた……。

直久はただ呆然と男性が鬼の形相で清次郎に銃口を向けるのを見ていた。

胸が真っ赤にそまるツバキと、彼女を抱きかかえ、男性を睨みつ

ける清次郎。その回りには、幾重もの人垣の中の一人でしかない直久。

いつたい何がおきているのだろうか、と直久が思う前に、男性がその引き金を引いた。

ためらうことなく。

ひたすらに、清次郎を撃ち抜いた。

何発も、何発も。

まるで、全ての怒りをぶつけるように。

雪に呑まれるように倒れ込んでいく清次郎とツバキ。だが、誰一人として、父を止めようとするものはいなかつた。ただ、じつと、清次郎の息絶えるのを見つめているだけだつた。

(なつ !)

むごい。

むごすぎる。

これが、現実におきたことだとういうのか。

これが、人のすることなのか。

あまりに凄惨な状況を目の当たりにした直久は、呆然と立ち尽くことしかできなかつたのだ。

そんな中、すでに息のない清次郎に全ての銃弾を撃ちつけてなお、引き金を引き続ける男性の肩に村人の一人が、いたわる様に手を置いた。男性は、我に返つたようになり、苦々しい顔で村人を振り返る。そして、搾り出すような声で言つた。

「 …… 行くぞ 」

「 ぎ、儀式はどうするんですか ? 」

「 生け贋 ? これで十分だろう ? 谷から突き落とすのも、銃で殺すのも、娘が一人死ぬことにはかわらん。行くぞ 」

かける言葉が見つからないのか、村人たちは顔を見合せると、無言で男性の後に続いてその場を立ち去る。残された直久は、ふらとおぼつかない足で、雪の上に横たえる一人のそばへと近づいていく。ツバキの前までくると、がくりと膝を折つた。

「……ツバキちゃん……」

呼びかけにツバキは答えない。

目に一杯の涙を浮かべ、彼女の大きな瞳が一瞬だけ直久をとらえたような気がした。

直久は震える手をツバキの口元に運ぶ。かすかに息があつた。
「よかつた……」

直久は小さく息を吐いてから、少し視線をずらし、清次郎を見た。その瞳は、かつと見開かれ、整った彼の顔とはまるで別人な気がした。その額に、くつきりと被弾の跡がある。一発で即死したに違いない。

僅かな間だけ、直久は目を伏せると、そつと清次郎の瞼を手で閉じてやつた。

……直……ちゃん……

直久は再び耳を疑つた。突如、ツバキの声が聞こえてきたのだ。でも、耳にではない。頭の中に直接響いてくるかんじだ。まるでテレパシーのように。

思わず直久は、ツバキに視線を落とした。

「ツバキちゃん！？」

直ちゃん……お願い

再び声が聞こえたが、やはりツバキは唇を少しも動かしていない。しかし、直久はツバキの声だと確信していた。

「ツバキちゃん！？ しつかりして！」

ツバキの、紫色になってしまった唇が小さく動いた気がした。だが、声にならない。自分に伸ばされたツバキの手を直久は膝を着いて受け取つた。優しく両手で包み込む。

そのツバキの細い手から、彼女の気持ちが流れ込んでくるのが分

かつた。

これでいいの。

私はもう、これでいいの。

暖かな、柔らかな、ツバキの心が直久に伝わってくる。

私は満足よ。あの部屋の外にも出たわ。それに、愛した人と死ねるの。

ずっと一緒にいられるの。

もう十分だわ。

だから

ツバキは、痙攣しながら直久に握られていた自分の手をゆっくり開く。

「鍵……あの部屋の？」

ツバキは直久を見つめ続ける。再びツバキの唇が小さく動く。直久は必死でその唇の動きを読んだ。

でも、読まなくて分かる。

ツバキが願う、最後の心。

命の最後に、思う大切な人。

“アヤメをたすけて”

直久はあふれてくる涙をこらえることができずに、天を仰いだ。はらはらと舞う雪。零れ落ちる直久の心の雪。

ぐつと歯を食いしばり、片手で涙をぬぐうと、直久はツバキをもう一度見やり、力強くうなずいた。

「オレが助けるから」

鍵を強く握り締め、直久は駆けだした。必死で駆けた。

ツバキはその遠ざかる直久の背中をいつまでも見つめていたいと思つた。

でも、もう瞼も重たい。

ねえ、アヤメ。

私はアヤメになりたかったわ。

私の妹。

私の光。

私ではない私。

私とはまるで違つ少女。

ねえ、アヤメ。

今度もまた私はあなたの姉妹でありたいわ。
でも次はもつと色々な話をしましょう。

もつと、一緒に笑つて。

もつと、一緒に泣いて。

もつと、もつと

……

もう一度と動かないツバキの姿は、鮮血で真っ赤に染まり、まるで白銀の世界に浮かび上がる椿の花のようだつた。

寒椿。

それは、この白い雪の上に、妖しいほど美しい花。

美しく咲いた次の瞬間、ポトリと地面に落ちるその花を、人々は首が落ちるようだと氣味悪がるが、本当にこの花は美しいのだ。白の上に浮き出るような鮮やかな朱。

悲しくも、切なく、美しい。

そして、懸命に生きていたことを讃えるように咲き誇る花[。]

直久は、必死に駆けた。

涙で前が見えない。

体が怠く、重くなつていいくのを感じた。

思うように走れない。

それでも、必死に、足を前に進ませた。

……………っ！

心なしか、辺りの景色がぼやけていくようと思える。涙のせいばかりではないようだ。

扉が見えた。アヤメのいる部屋の、あの、生け贅にされる少女たちの部屋の扉が。

だが、その時、襲いかかるように白い光が直久を包んだ。

直久——っ！！

薄く開いた間に真っ先に飛び込んできたものは、青ざめたゆずるの顔だった。

「直ちゃんっ！！ 僕のことわかるっ？」

続いて和久の顔。

「……………っ！」

弟の名前を呼ばうとしたが、なぜかうまく声がない。

「よかつた、気が付いて」

「ここは……………？」

キヨロキヨロと視線だけを動かし、状況確認につとめる。それで、自分に抱きついているゆずるの姿に気がつき、そっとゆずるの手を

どけて、ゆっくり身体を起こした。

戻ってきたのか。

ツバキの記憶の世界から。それは、同時にツバキの悪霊もいなくなつたといふこと。

満足した、もう十分だと。ツバキがそう思つたから、悪霊は苦しみから解放されたのだろう。

でも。

直久は唇を噛み締める。

「直ちゃん、大丈夫？」

心配そうに覗き込んできた和久に、無理矢理に笑顔を返したもの、悔しくつて仕方ない。

結局、何もできなかつた。アヤメを助けられなかつたのだから。俯いた直久の手に、そつとゆずるが手を重ねる。ゆずるらしからぬ行動にびっくりして、反射的にゆずるを見上げる。

ゆずるは直久の握り固められた拳を自分の手で包み、そつと胸の高さまで持ち上げる。

直久はその拳の中に異物を感じて、ゆっくりと手を開いた。

「ああ……」

その金属の正体がなんだかすぐに直久にはわかつた。目頭が一気に熱くなり、あつという間に涙がこぼれそうになる。

こんなに詰び付いていただろうか？

いや、そんなことはどうだつていい。

「…………つ！」

直久は再びそれ 鍵を握り締めると、駆けだした。

「直ちゃんっ！？」

後から追いかけてくる和久の声も、今の直久には届かない。早く、早く。

階段を駆け下りて、あの部屋に。

一刻も早く、あの部屋に 彼女の元へ急がないと…

直久は例の扉の前で一旦足を止めた。

鍵を持つ手が震える。

百五十年以上その役目を忘れて、錆付いた鍵穴は、なかなかその主を受け入れようとしない。直久の気持ちばかりが逸る。

力チツ。

ようやく鍵が開く音が、廊下に響いた。

直久は一呼吸付いてから、扉をゆっくりと開いた。

「…………っ！」

あれから、いつたい、どれほどの月日が流れたのだろう？
彼女は、ずっと、ずっと、直久を待ち続けていた。
待つていたんだ。

「…………ううつ」

はらはらと、直久の頬を涙が伝っていく。

扉の内側には、何度も何度も引っ搔いた痕があり、剥がれた爪が扉に刺さっていた。

至る所にある黒ずんだシミは血だろうか。

扉のすぐ側で、彼女は力尽きていた。

「…………アヤメさんっ…………」

直久はたまらず、ボロボロの赤布を纏つた一体の人骨の側で、膝を折つて泣き崩れた。

苦しかったに違いない。
寂しかったに違いない。

それでも、ずっと待つていたんだ。

直久が助けにくるのを、ずっと。

力尽きても、こんな姿になつても……。
自分だけを、待つていたんだ。

「こんなに待たせて、ごめん。…………ごめん、アヤメさん」

「本当に、ありがとうございました」

何度も繰り返し頭を下げるオーナーに、優しく首を振る和久。

「もう大丈夫だと思いますが、また何かありましたら、いつでもおつしゃつてください」

ベンションを覆つていた影もすっかりと晴れ、よしのの意識も取り戻されて、万事解決したわけだが、直久一人、なんだかすつきりとしない。

旅行鞄を片手で抱ぎながら、直久は眉間にしわを寄せ、和久に振り向く。

「カズ、ちょっと聞きたいんだけどさあ～」

「何？」

直久は、自分だけに起きた体験をゆずると和久に話し聞かせていた。すると二人は何やら納得して、オーナーに仕事を終えたことを伝えたのだ。だが、直久はちつとも納得できない。

「確認するけど、ゆづるを襲つた少女の靈はツバキだつたんだよなあ？」その理由はアヤメさんをあの部屋から助けだすこと

「それと、鍵を手渡すためにね」

「じゃあ、よしのさんやオーナーの妹とか、長女に生まれた娘が十六歳になつたら魂が抜かれたようになつちゃうのって、それとどう関係してたわけ？」

「それは……」

和久は口元に手を持つていき、親指で下唇をなせる。

「ツバキさんもアヤメさんも、あの部屋に誰かを身代わりに入れなければ出られないと思い込んでいた節があるんだ。特にツバキさんは、アヤメさんを自分の身代わりにして清次郎さんと逃げようとしていたわけで、身代わりがいなければ自分が逃げたのがすぐばれて

しまつという生前の思いが深い。強く思っていたことって、死んだ後も残ることがあつてね。しかも、不完全な記憶として残ることが多くて、ツバキさんの場合、怨霊となつてしまつたから、アヤメさんをあの部屋連れ出すためには、他の誰かを身代わりに入れなければならぬと、強く思い込んじゃつたみたいなんだ」

「要するに、ツバキはアヤメさんをあの部屋から自由にしてやりたくて、身代わりによしのさんたちの魂を部屋に引き込んだってわけだな」

「そう。だから、直ちゃんが扉を開けたとたん、いくつもの魂が部屋から解放されて、飛び出て行つたのが見えたよ。よしのさんも同じ頃、意識を取り戻したしね」

直久は、ふーんと頷く。

なんにせよ、ツバキも『怨霊の後悔無限ループ』から抜け出せたようだし、アヤメもしつかり埋葬してもらえるようだから、すべて解決なのかな、と直久は一人ごちる。

オーナーと話を済ませたゆづるが、怠そうに、鞄を担ぎながら双子の方に歩み寄つて来た。

無造作に突つ込まれた茶封筒が「コードのポケットから覗いている。「行くぞ」

擦れ違ひざまに短く言つて、ゆづるは先に玄関をくぐつた。それを追つて直久と和久も外に出る。

直久が銀世界の眩しさに目を細めた時、八重が三人を呼び止めた。振り返ると、八重の後ろに日本人形のように綺麗な少女が静かに立つてゐるのが見えた。

ドキッとして、直久はその少女を見つめる。すると、しつかりとした瞳で見つめ返される。

「お姉ちゃんが直久さんにお礼が言いたいんだって」「お礼？俺に？」

直久はきょとんとなつて、人差し指で自分を指す。それを受け、よしのが「ククリと頷き、すーっと目の前に何かを差し出した。あの

部屋の鍵だ。

「これを。どうか、直久さんがお持ちください」

「だけど」

「忘れないで欲しいのです」

直久がまじまじしているうちに、よしのは無理矢理、直久の手に押しつけた。そして、ふふふ、と微笑んだ。眩しいほどに綺麗で、可愛らしい笑顔で。

「あれ？ お姉ちゃんつて、直久さんと和久さんが見分けられるの？ ちゃんと二人を見分けられるのって、ゆずるさんくらいかと思つたわ」

八重の言葉で、そう言えば、と直久は思った。

迷うことなく今、まっすぐ自分のところへ来た。普通、初対面の人は自分と弟を、区別することなどできない。直久の両親ですら、日常的に直久と和久を見間違えるのだから。

腑に落ちない顔で、直久が首をかげていると、くすくすと笑い声が聞こえてきた。よしのだ。

「やあね、八重つたら。全然違つじゃない。見分けるも何も、直久さんと和久さんは別の人ですもの。ねつ、ゆづるさん」

急に話を振られたゆづるは、よしのを一瞥しただけで、無言で眉を顰めた。

それから、二人は何だかんだ言つてバス停まで見送つてくれた。三時間に一本、しかも午後2時が最終便だという、田舎のバスの中のバスがちんたら走つてくる。さすが山道。当然のように乗客もおらず、貸切状態である。

それを横目にしながら別れを言い交わした。

バスが止まり、ゆづるが乗り込み、続いて和久が乗ろうとした時、直久はふと思い出した。

「そう言えば、瞬さんは？」

その言葉に驚いて、和久が振り向く。

「直ちゃん！」

はつ、として直久は八重を振り返った。しかし、八重はぽかんとした顔をしていた。

「誰のこと?」

どうやら山神は、八重から全ての記憶を消し去ったようだ。よしの意識が戻り、八重の望みが叶えられた今、山神があの屋敷にのこる理由はない。きっと、高笑いでもしながら、どこへなりと行ってしまったのだろう。最後まで、よくわからないやつだ、と直久は心の中で舌打ちした。

直久が面白くないという顔をしていると、バスの窓を大きく開けて、和久が顔を出した。

「ほら、直ちゃん。早く乗つて

いつの間に乗り込んだのだろう。ゆずるも、バスに乗り込み、さっそく読書を始めている。

「はいよ

弟に短く返事をすると、直久は、姉妹を振り返る。

「じゃあ

と、いつものキメ顔で、本人評価で、できる限りさわやかに短い別れを告げた。そして、くるりと、一人に背を向けたところで、何かに袖をつかまれ、引き止められる。何だ? と首をひねって背後を確認すると、よしのが直久の袖を掴んでいるのが見えた。

「また来ただけますか?」

「もちろんですよ。お困りでしたら、いつでもビービー。お呼び立てください」「

直久がおちやらけて答えると、よしのは直久の袖から手を離し、ゆるやかに首を振った。

「仕事ではなく、思い出した時に、会いに来て欲しいのです

「え? おわつ

よしのは、直久の背中を押した。転ばないよつこ、一歩足を踏み出したことで、直久の体はバスのステップに乗り上げる。

「言つたのはそっちょ。私が百五十才若かつたらつて

直久がバスに乗ったのを確かめて、バスの運転手が扉を閉めた。
ぽかんとした、間抜けな顔の直久を乗せ、バスが重そうに走り出す。

直久はよしのを目で追う。

よしのはふわりと笑顔になつた。

「え？」

そう直久の口が動いたのが、よしのには分かつたようだ。
小さくなるバスの姿を見つめるよしのの顔は、まるで青空のよう
に晴れ渡っていた。

「いきましょ、八重。話したいことがいっぱいあるわ」

姉妹が去つたバス通りの両脇には、純白の雪が静かに横たわり、
道沿いに植えられた椿は、今にもはじけそうなほど蕾を大きく膨ら
ませている。そう遠くない未来、見事な深紅の花を咲かせるために
。

【完】

あとがき

はじめましての方も、そうでない方も、最後まで、寒椿双子天国にお付き合いいただき、ありがとうございました。日向あおいです。

本作品は、実妹である海土龍の著『寒椿』<http://nccode.syo setu.com/n5907d/>をリメイクしたものです。というよりも、私たち姉妹が『日向あおい』として活動した、本当の意味での処女作です。

『寒椿』よりも少し印象が変わったのではないか。

原作では中学生だった主人公たちも、『九の末裔』『寒椿』では高校生。少し、思慮深くなつたつてるはず！？（笑）山神さまも、裏のある自由人な感じになつて、私としては一番のお気に入りです。また登場させよ。レギュラーにしよう。そんなことを企んでます。

なんにせよ、妹とあれこれ議論しながら執筆するのは始めてだったので、本当に楽しくエンディングを迎えたと思います。ただ、執筆している本人も、どっちがどっちだったかわけが分からなくなるくらい双子双子双子……。また、当時中学生だった妹の思考はぶつぶつでいて、それをつなぎ合わせるのに苦労しました。ええ、とつても。なんで、生け贋の前にお茶会？とか（笑）

原作と読み比べてなどなど、レビューや感想、お気軽にお願ひします。一言感想歓迎

今後も、ゆっくりと漫才双子の『九の末裔』シリーズを私なりにリメイクしていきます。特に、寒椿の続編『春眠』では『将門シリーズ』のアノ人やソノ人が登場したり、と私も妹も楽しみながら、構想（妄想）し、プロットを作成しています。また、『九の末裔』

第一シーズンも考えてるので、息の長~~~~~い、応援のほどよろしくお願いします。

2010.1.8 日向あおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3683i/>

九の末裔 ~寒椿~

2010年10月8日11時16分発行